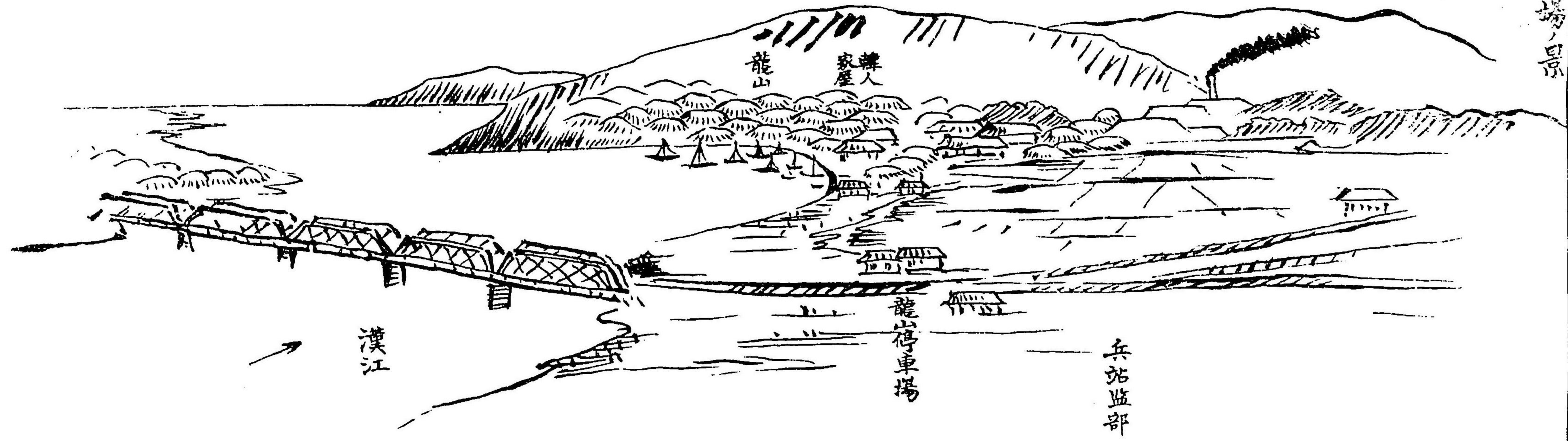


龍山停車場ノ景



なりき稍日本語を解す年齢十八才然も妻帯者にして韓人帽子を頂き居たり懐中時計を所持し巻煙草をくゆらし頗るハイカラ式なり余試みに問ふ何の故に日本語を學ぶ曰く日本人多し交際上不便多き故なりと亦問ふ十年前成歡役より大戦争ありしを知るか曰く知らず又傍らより韓人あり容貌人品稍中流に位するに似たり彼嘗て日本に遊ひしを語る日清戦争の勝敗は何れにありしかを問ふ曰く知らず牙山の戦争を知るか曰く知らず余は茫然として深く韓人の境遇を悲しまざるを得ざりき或は爲にする處ありて知らざるを矯飾するか未だ其真意を解せず又一人の老人あり多數の韓人を送られて太田驛より乗車す蓋郡司なるべし車中十數の壯漢幼童附隨して別意を叙するに似たり嘗て支那人の禮法を聞く梅讓恭敬兩の袖を頭上にかざして地に伏すは其至れるものと彼等の其老人に對する懇懇謙讓所謂三命よして伏すもの支那の風俗と全し彼等の旅行は常に腰輿に乗して二人の輿丁之を擔ぐ南大門前高官家族の一行に會す主公馬に乘し衣冠正しく傍らより大傘をかざししめ其他の女子小兒は輿又は人力車に乗り數人の女子例のフーメーギを頭上より覆ふて徒歩して従ひ男子三四人前後を擁して威儀實に堂々たるものありき

五月二日京城滞在

京城は韓國中央政府のある所李朝の大祖李成桂以來歴代五百餘年の都府なり或は漢陽と云ふ韓語にソールと稱す即ち王城の義なり北緯三十七度卅五分にあり我國の能登の

北端越後長岡等と略同緯度の處とす冬期温度靈度福島仙臺等と略同し夏期廿五度我畿内の温度と同一なり

新朝鮮の王朝は其始祖を李成珪と稱す初め成珪高麗王に事へ功を以て將帥となり權勢内外に震ひしが此時國王驕滯にして國政を修めず國民皆望を成珪に屬す國王明に抗せんと欲すれ共成珪聽かず遂に王を廢して自立し故號を復して朝鮮と稱す是に於て使を遣はして明の服色制度を用ひ其正朔を奉せり是を新朝鮮の大祖とす其後李昭の時日本の關白秀吉に攻められしも秀吉の殂するに及びて始めて始めて其國を復せり清の明を亡ぼすや亦朝鮮を攻めて京城に迫りしかは君民共に清に下り約して方物を獻し是より國王の廢立必ず清帝の冊命を受く明治九年我國と條交條約を訂結して稍獨立國の假面を得たり明治卅七年我國の保護國となる今王諱は熙初め載晃と名く興宣大院君李昱應の第二子なり李朝第廿六世に當る我文久三年哲宗嗣なく入て大統を承く北に北漢山峙ち南に南山聳え西方一帯仁王山の丘陵に圍まれ東京落山の南稍開く城廓四圍を圍み高十尺乃至二十尺切石を以て疊み延長五里東西南北に四大門を開く鉄扉を開閉して城外と相通す城内東西三十町南北二十町戸數四万二千五百人口二十万あり東大門より街路を経て南大門西大門に至る道路は道幅六間以上あり其他概して狹隘不潔極めて甚し東北隅に惠仁門あり東大門の南に小東門あり西北隅に彰義門あり西大門と東大門の間に西小門あり仁王山西大門の間一條の水流南に注ぎ不潔汚穢名狀すべから

す西北彰義門附近より一條の溝路を市内に通し東西兩大門の稍南方を東流して東大門附近に注ぎ其不潔なること宛然屎糞の流るゝに似たり北漢山は突兀たる岩石高く殆ど秃山にして南山一帯老松鬱茂恰かも釜山の龍頭山の如し地質は目撃する限り花剛岩なるが如し漢城電氣鐵道は米人コーンプランの計畫となり現在線は西大門外より清京里に至る五哩鐘路より南大門を経て龍山に至る三哩にして別な電氣事業をも營めり尙清京里より揚州に至る十八哩は既に延長工事より着手し更に漢江沿岸蟹岩より開城府に至る廿餘哩間にも延長すべき計畫たりと云ふ王宮三ヶ所昌德宮は北漢山の麓の稍東にあり文廟其東にあり景福宮は西にあり諸官衙は概ね景福宮前の廣路を并列す景福宮門前二個の大なる高麗犬あり宛然我寺院の山門に似たり王宮や稍廣大壯麗多少の威嚴を保ち得るが如きも諸官衙の建築に至りては其体裁我内地の平屋作の高さあるや否や新王宮は慶運宮にして又其南にあり王城其他諸官衙及び大路の兩側は日本内地の如く商店も多くは瓦葺みて其低きと全國悉く然り其他の街路は例の如く藁葺土壁なり南大門を入りて南山の北麓に沿ふて進めは泥岨附近に於て是れ我居留地なり韓人町と異なり商店柳比内地と同じ西より數へて警察署、領事館、郵便電信局、韓國通信隊、商業會議所等あり公使館駐劄軍司令部は倭城臺の東にあり倭城臺や文祿の役増田長盛の築きし城址にして今は是を利用し一大公園とす南山の翠濃か下眼下、京城の全景を臨む蓋京城隨一の名區たり邦人茲に天神宮八幡宮等を勸請し清らなる溪水のほとり鳥居の高く立

てる影茶亭三五小丘の彼方此方、點在し恰かも内地の都會に遊ぶの感あり本願寺此麓よりあり城内塔洞、有名なる蠟石の塔あり有名なる建築専門の工學十關野氏の究研によれば頗る貴重すべき塔たるが如し今左より同氏記述の一斑を擧げん此塔婆は京城大圓覺寺廢址より昔時此寺興福寺と稱し李朝眞都以前より在りたるものにて元の順帝至正八年即高麗忠穆王四年頃の創立なるべし傳へ曰ふ忠肅王の十一年元の順帝の孫金童公主を娶りしに順帝深く此公主を愛したりしが故に其殂するま及び深く之を悲しみ公主の爲め石塔婆を造り一は漢陽より一は豐徳に置き元の承相脱々其事を主りたりと果して然るや否やを知らず此塔婆は十層にして三重の基礎の上より立つ故に俗に十三層の塔婆と稱す上部の三層は今側に下ろしあり口碑によれば壬辰の役加藤清正吾國へ送致せんと欲し之を下ろしたるも其重量の過大なる爲め捨て置きたりと基礎は各方形其大さ十一尺六寸塔身は上下の二部に分れ下部は三層にして其平面は基礎と同様なり上部は七層各方形の平面を有し其頂は寶珠露盤ありし者の如くなるも今は破壊せられて見えず全高五十尺許第三の軒までの高さ地盤より十八尺七寸あり此塔婆は純白なる大理石を以て造りたるものなれど數百年間風雨に暴されたる爲多少磨損し全体黝黒色を呈すれ共猶其四面の彫刻は頗る麗なり更に細部を視察せんか塔身の柱は各層悉く圓く其周圍に雲龍を薄肉彫にせし如き屋根は何れも瓦葺を摸し其唐草瓦の三角様をなせるは韓地後世の唐草瓦の形狀の先驅なるが如き破風は懸魚の形を有し韓地近時の建築常に



京城南山
倭城甘臺
公園景



日本公使館

茶店

泥境
日本人居留地

懸魚若くは桁隠を缺くを例とするに此塔婆に於ては明かき其遺制を見るが如き壁面及組物間等も於て悉く佛像及不動明王天部等を半肉彫にあらはしありて其佛像の形式最も我鎌倉時代の者も類似せる如き全体の權衡殆ど完美し手法又自在も奇趣横生す意匠の豊富彫刻の精妙頗る警嘆すべき者あり此塔婆は傳説の如く元の工匠の手に成りたる者なりとせば其形式手法は直ち元の真相を示せる者當時の高麗の技術が彼の影響を蒙りたることの大なるを知るべく亦高麗技術の如何なる者なりとやを間接に徴證し得べし其建築及彫刻の形式が我鎌倉時代の者と多少關係を有するは亦當時元と我との關係を間接に表白せるものと云ふべし其技術の精妙韓國第一流を下らず元朝技術の精華を傳へたること彼の支那もありても亦珍と稱すべき者ならんと其他西大門外の獨立門(高卅餘尺)老人亭(南山東南麓閔一族の別墅東大門外清涼里閔后の陵地麻浦街道孔德里大院君の墓所等一覽の價値あり南大門内電車鐵道の西に後備第廿四聯隊兵營あり西大門外漢城府尹の西亦第廿四聯隊の一部を置く王城樞要の區は既に我兵力の權下あり西大門内韓人の兵營あり帶劍なく姿勢正しからぬ朝鮮兵は王城附近の要所々々を配備しあるも其屯所たる六七枚の板片を釘付にしたる辻便所程にも足らぬ處に着劍の銃を手にして佇立せり其見すばらしき言語の外なり京城には特定居留地なるものなきを以諸外國人城内に雜居す城内清水に乏し邦人は倭城營の一部の溪水を使用し居たり漢城附近勿論清流も乏し給水問題は京城に於ける本邦人發展の一大難問なるべし城内の

不潔は言ふも更なり景福宮門の石壁に向つて放尿するもの數人を見たり王城の周圍は放尿の爲石壁の色黄褐色に變するを見る居留地の或る裏手にて十七八才の壯年小便して手を洗ひ衣服を以て拭ふを目撃す是れ實際談あり夜間小路を散步して韓人家屋より小便を投するものみ逢ふの危険あり韓人家屋内元便所なし適宜是あるも單に屋内の一溝に放尿するのみ西大門外漢城府尹のある右側尿糞屋内より滲出し大道の兩側に流れ其不潔殆んど言語に絶す勿論彼等は沐浴せず時々湯又は水おて拭ひ去るに過ぎず韓國の山河や蓋し數百年來糞尿の堆積し滲透して今や地中何れの處か其侵襲を蒙らざる處あらんや韓國平安道に清川江あり名の如く頗る清潔然も上流を分拆するにアンモニアの混入するを見ると朝鮮旅行者は此朝鮮水の幾分は必ず飲料に使用せらるゝを覺悟せざる可からず「見ぬ物清し」とは人の言ふ處我輩の宿舍敢て異狀を認めざりき

午前七時より午后三時迄市中を散歩し脚の向ふまゝに普く見聞をほしめまゝにせり其間韓國駐劄軍司令部に出頭し副官廣田中尉あつきて京義鐵道未成線便乗の許可を請ひ置き更し居留地公立小學校の現況を視る校長山口縣人横山彌三氏なり明治廿二年八月山口太兵衛氏居留民の總代となるや初めて初等教育の必要上校舎の建設を計畫し爾來幾多の變遷を歴て今日に至れりと云ふ本年の統計を知らんとするも得ず昨年度統計上重要な部分を記せば

教員數 居留地戸數 居留地人口 生徒數 (備考)本年度は勿論人口

京城男	計八人	九五四	二二六	計四三九	二〇四	計三四五	戸數生徒數増加せるは事
女	計三〇	一、六三五	五七九	計二、六六六	五九二	計一、〇六六	實なり
釜山男	計三〇	一、六三五	五七九	計二、六六六	五九二	計一、〇六六	實なり
女	計三〇	一、六三五	五七九	計二、六六六	五九二	計一、〇六六	實なり
居留地費よする	教育費	生徒一人に對する	小學校經費總額				
教育費對百分比	一戸負擔	教育費					
京、二二、二〇〇	五、〇九三	一四、六七五	五、〇六二、九〇〇				
釜、二九、六二二	八、九四四	一三、九六五	一四、四九五、二四〇				

現在生徒府縣別及職業別

農	工	商	官吏	勞力	庶業
東京	四	五	四	六	六
大坂	三	五	二	四	四
京都	一〇	四五	三	一	一八
長崎	一〇	四五	三	一	一八
佐賀	一三	二二	一	二	二
福岡	五	一一	四	四	四
熊本	二	一	九	二	二
大分	一	九	一六	二	一六

此表よれば自然の結果として京城が南日本の領域たるを知るべし長崎山口大分等の多きは船便のよき影響なるべし由來西南人口過剩眞好個の發展場なり

宮崎	一
愛媛	二
香川	一
和歌山	一
山口	一五
岡山	四
廣島	二
島根	一
兵庫	三
三重	一
愛知	二
神奈川	三
埼玉	一
千葉	二
茨城	一
滋賀	一
群馬	一

福島	二
秋田	一
山形	一
福井	二
合計	五六〇

五月三日晴、午前十時再び駐劄軍令部に出頭し便乗券下附の模様を聞く幸ひ廣田副官の斡旋により臨時陸軍建築課宛の照會書を得たり聞く陸軍に縁故あるもの、外私人の便乗を許可せずと余は從來の職名及現下の漫遊目的の爲め公職に準して許可せられたる由にて副官の好意盡力多謝する處なり即ち該書を携へて南大門より乗車龍山驛に至り臨時陸軍建築課を訪ひ乗車券を得たり區域龍山平壤門往復期限二日間臨時軍用鉄道監部龍山驛長と記入しありたり因て龍山附近を散策し再び京城より歸り明朝出發平壤に向ふに決定す午後再び市中を徘徊し平壤行の準備をなし晚景學部參與官文學博士幣原氏を訪ふ韓國の教育よつきて知る處あらんとせしも宴會出席の故にて不在其意を果さず明朝出發の都合もあれば歸宿して寢よ就けり

五月四日晴、午前六時京城を出發し龍山驛に至る軍用建築列車の悉く荷車然も無蓋列車にして便乗客は荷物の上に或は郵便物の間に踏む事なれど其危険の度不便の度固より客車中にあるもの、比にわらず時は煤烟を蒙りて全身「ニードロ」の如くなる事あり

といふ此日幸ひふ有益荷車一臺あり郵便物を積載す余の其内に入りて先づ風曝しの不幸を免かるゝを得たり同乗者十數名あり京義鐵道は停車場も未だ命名しあらず龍山半塊間合計十三ヶ所悉く完成の停車場なく二棟或は三棟の兵站部建築あるの外切符賣下場待合室等は勿論未だ建築の筆影だも見る能はず爲め沿道の事情記事詳細なるを得ず只驚く可きは各停車場敷地の廣大なる事にて其規模の大内地人の想像以上なり大略は沿道の都邑に沿ふて鐵路を敷設すと雖も停車場より其地附近の都會に至らんは通常半里壹里の遠距離にあるは普通なりと覺悟せざる可からず京城以北邦人多からず韓人と雖も嶺南より比して人口の稀少なるを覺ゆ鐵道の通する處殆んど無人の原野將水過大の邦人を迎ふるに足る高陽郡坡州の北龍山津あり茲に臨津江を渡る清流ならねど水量稍多し韓船の上下するを見る此江は江源道伊川府の北威鏡道馬息嶺の南より流れ朔警支隊の名に著はれたる京義道の朔寧郡に至り龍山津より南交河郡に至りて漢江に合す開城府に至る迄の地質花剛岩能く發達す開城府より着せしは午前十一時頃なりき京城を去る十六里半人口五万邦人八十餘名在住人蔭の産地として有名なり古へ松都と稱す後高麗の主都たりし處にして城郭廢存す後高麗の始祖を王建と稱す松嶽郡の人にて前の高麗王の後裔なり王建の時は方に是れ支那五代の亂世にして干戈多事なるを以て東方茂願るに遑あらず王建機に乗して兵を起し遂に新羅を征し半島の全地を擧げて其有元歸し都を此地に置き城郭を經營して互市文學の中心と爲す王建佛教を信すること最

も深かりしを以て佛教盛行はれたり我延喜年中已に木版活字の製を知り之を用ゐて印行するの書ありと後國勢衰微を將軍李成桂王を廢して代りて王となる是に於て國亡き王建より三十三世四百五十年なり府中滿月臺、善竹橋等の遊覽地あり北方天摩山帝釋山の峻嶺を望み形勢稍雄大なるも其地勢を京城平壤と比較せば固より云ふに足るものなし附近の山上に韓人の墳墓累々たり沿道至る處の山上山脚より此種のものを見る韓人の死するや占して一定の地を得一塊の土饅頭を作る下等社會は只其儘にして碑石なく裝飾なし中流以上に至りては間々其圓形なる土山の前左右に人像畜馬の石像を並べ上流に至りては更々其威儀の盛なるを見る孔德里大院君の憤慕の如きはあり下等社會に至りては只此土塊あるのみなるを以て遠く望めは山腹の稍平かなる處恰かも半圓形の饅頭を並へたるが如く其數時としては幾十百に達す如斯山の頂上又は丘陵を選ぶて高麗朝以後に多く見る所にして彼の新羅時代の遺跡たる慶州の南「五陵」の如きは其殆んど総てが平地に築きたる圓形又は瓢箪形にて我古代の陵墓と殆んど同一なり嘗て白鳥博士は三國史記に見へたる韓國の古語と我國の言語に同一の系統に屬するものあるを指摘せられたり韓語は所謂ウラルアルタイク系の言語として我日本の古代史に密着の關係あるは今更説明を要せずと言ふべし停車場内煙草菓子辨當等邦人の賣子四五人を見る金川郡の北にて禮成江を渡る江は北の方遂安郡の鉄鑛地砂金地より來りて開城の西碧瀾渡を過ぎて江華島の北より注ぐ水清からず平山府右方太白山上より城趾の巖然

たるものを見る平山府も温泉の湧出ありと云ふ禮成江附近より平山に至る間少しく第三紀層の發達するを見る瑞興、鳳山、黃州の間は慶尙道と同しく古生紀の地層なり午辰の役小西行長の進軍せし方向にて加藤清正は全川の南開城の北、牛峯より東北、谷山を経て感鏡道に向いしと云ふ日清戰役は混成大島旅團九月七日より九日迄黃州にあり師團司令部本隊第二行進團友安中佐亦此道程に進みたり更北に進みて大同江に至る一大木橋を架す洋々海の如き中に小瀛船の橋下に碇泊するを見る柳樹の類にやあらん疎林河に臨む處韓人の舟兩三岸頭あり橋の南は有名なる船橋里にして日清戰役大島旅團の奮戦したる處一柳樹上彈痕數を數ふべし我將校以下百四十名忠死の憤墓あり既にして平壤停車場に著せしは午後五時なりき京城を距る事六十五里なり停車場は平壤の南一里余にあり是より徒歩して南門即ち朱雀門を入り大同江門外の樓屋に投ず旅舎は大同江の西岸あり旅舎三四其他大坂商船會社出張所等ありて稍旅情を慰むるに足る此日旅中余の注意を喚起せしは沿道人口の稀薄なる事とす又水流の欠乏甚しき事はなり臨津江禮成江黃州城南の小流大同江の外殆んど一小流だも目撃する能はざりき加ふる水流多くは緩漫山の平凡と水の滯緩とは其調和配合の妙を失して徒らに單調ならしむ加ふる山間湖水の碧藍を湛ふるなく單調ある地勢をして一層單調ならしむ活動なき朝鮮人や其由來する處蓋し遠しといふべし

五月五日少しく雨あり平壤滞在

平壤府は北緯三十九度四分我陸中前澤附近に相當す東は大同江岸に臨みて船橋里と相對し南は一帶の平地なり西方小丘の連なるもあるも要するに平地なり北は大同江岸より數重の山岳圍繞し東方一端有名なる牡丹臺あり京義鐵道南西より北西に走る北方義州街道坎北院を経て順安の金産地に通す東北、野洞長水院を経て三登縣江東縣成川郡に通す成川郡は明治廿七八年の日清役に佐藤大佐の引率せる元山枝隊の進路にして同隊は成川より順安を経て平壤に向へり東方三登、江東、麥田店大地境洞より長水院に至る街道は立見少將の引率せる朔寧支隊の進路なりとす師團司令部は南西大同江畔保山鎮より松湖、沙川、新興洞、麥田縣より平壤に向へり本隊亦略同一路を進みたりき烏兔勿々十年の歲月を経て再び日魯の交戦となり來つて十年前の戰場を見る知らず十歳後の今日何れの地にか其舊蹟を訪はん此地平安南道觀察使の所在地にして京城を去る六十里大同江畔鎮南浦より陸路十五里江口魚隱洞より五十哩とす市街を内城中城外城東北城の四區に分ち就中中城は富民の居住する處なり東大同江畔に大同門あり城中一の大門とす二重門あして一は南面し一は東面す樓上に上れば全市街眼下あり一に挹瀋樓と稱す樓上挹瀋樓重修記あり揚州趙斗淳記とあり其他二三面重修の來歴記す其構造正に我内地の寺院を見る山門の大なるもの支那日本の中間に位するの形式なり朱雀門は大同門より小なるも南方停車場よりの正面に當る其門外西側は平壤離宮あり未

だ完成せず朱雀門を入りて行く事政町左側は我憲兵分隊屯所あり右に府尹衙門あり大同門北に練光亭あり元韓國郵遞司のある所今は我軍用電信部の使用する處なる大同門と朱雀門と街道の十字街頭に相當する處韓風の宏壯なる建築あり元御眞影を安置したる處今我平壤兵站司令部の事務室たり門前旭旗の懸るを見る威風堂々たり北西に向ふて城内一丘あり丘上鐘樓あり更に丘を下りて北西に觀察府あり兵隊の籠にありて建築宏壯なり更に北西に沿ふて小丘上ふ日語學校あり官立にゆらず日本人の經營よか、る傍の山上は城内第一の高点にして茲に哀悼碑あり卅七年日魯事局の犠牲となりし人々を記念す平壤城内南部一帯に平地にして西部は丘陵北は全部丘陵のみなり北西城壁より七層門あり門を出で、西方を臨めば身は城壁數丈の高臺の上に立つ城壁は沿ふて北すれば日清戦争當時の遺物にや一帯の斬壕を穿つを見る北は一面老松鬱茂風景頗る可林中をたどりて瓦葺の韓人家屋二あり傍らに箕子廟の碑立つ余の至るや韓人出で來りて低頭平身廟宇の案内をなすべきと告ぐ一小童をして從行せしめ奥院の門扉の錠前を開き墓の内景を縦覽せしむ其体裁孔德里大院君の夫れと同一なり去るに臨んで錢若干を與ふ小童謝して曰くサヨナラ、アリガトと以て我日本人の幾多の此廟を見舞ふの頻繁なるを知るべし松林の間を東して玄武門に至る原田重吉氏名譽の地たり玄武門や我嘗て想像すらく平壤城の死命を制するの天險に向ひ勇奮以て陥落の端緒を開く必ずや天險の以て我忠勇なる兵士を苦しむるに足るものあらんと深くぞ知ら、其言さ正



12/1

(27)



平環城
北東方向牡丹臺

置壁

玄武門

大同江

大同江

121

(28)

平壤城
北郭牡丹臺
玄武門



見も乗越るを得我試みふ門外より攀登したるは両手を地へ附けずして門を乗越るを得たり只彼れや戦時たり左右より砲彈飛來り門内敵兵充つるの時なり是や蕭條たる十年後の空場にして城壁の所々崩壞して所謂古城の殘墟の寂漠を示す左方に高く高山の聳ゆるものはれを壯丹臺とす玄武門より臺に至る間約三四丁の間西北面に對して石壁を造る壯丹臺は平壤城東北の出丸にして完全なる城壁を繞らしたるものよりあらず平壤守備隊は城内の東北隅より七星門の傍に

觀察使尹公致定去思碑

同治二年三月 日

觀察使金公蘭淳去思臺

道光廿一年二月 日

の石碑あり觀察府の左側よ

觀察使閔公詠緯善政碑

光緒八年正月 日

觀察使趙公成夏去思臺

光緒四年三月 日

等の石碑の境内に安置せらるゝを見る大邱北門内にも此種の石碑數多を見たり韓人の官吏に對して斯くも謳歌するの傾向あるは果して然る善政の伴ひしものありて然るか

頗る不可思議の現象なりと云ふべし思ふに是れ支那的風習の傳染にして徒らに官吏に媚び徒らに文字を弄したるのみ固より精神よりして感謝の意を表せしにあらす支那韓國否な日本と雖も文章と實地實景と離れ其誠意精神を寫さずして一種の玩弄品視しつゝあるは一斑の通弊おして東邦記録の研究は頗る注意を要するものありと云ふべし平壤附近は地質上中世紀に屬するものにして大同江南文鑑山には無煙炭の産出あり平壤上流二里なり韓國よて石炭の出づる所としては現今仁川の北、通津の無煙炭蔚山東萊の邊、鴨綠江東海岸の煤炭等なり其他順安に砂金地あり大同江上流お般山の金産地あり目下英人の經營にかゝる今、朝鮮國鑛山の事情を聞くに鑛山は二種類に分れ一は王室に屬し一は政府の所有に屬す大抵良鑛山は王室に屬し就中最有望なる咸鏡道平安道黃海道は悉く王室に屬し宮内部に鑛山監理あり御料鑛山全体を掌る各道亦監理あり都て四人とす其下に委員又其下に別將あり別將の下に税監あり租税を徵收す租税徵收の方法たる税監は鑛夫頭の督丁なるものより受取て別將に渡し別將は之を委員若くは監理に渡し監理は之を王室に納む其税率は極めて不規律にして例へば或所よて砂金を發見し之が採取願を出せば許可を與ふ一ヶ月鑛夫一人ふて砂金五分乃至八分を課す其鑛良好なるときは直ちに税を増し、増したるが爲め鑛夫之を見棄れば又税を減す即ち別將は採鑛官吏にして亦受負人たり別將は其土地に於ける許否權を有し自ら鑛夫を備ふて採掘せしめ若し己れの受負金より餘分お採取すれば其利益となる而して其定まり

たる税金を監理に渡す監理は別々俸給を受けざれば其税金の中より頭を刎て之を政府に納む税率は其所に依て異なれ共忠清道の稷山よては鑛夫一名一ヶ月砂金八分を納む般山も亦八分端川大洞等は一ヶ月三分永興は平均五分ありと云ふ韓國全体にて幾何の税金を納むるや不明なれ共黃海道よては十匁包百個を皇室に納むと云ふ是を純金とすれば五千圓程なり般山よては一ヶ月四百匁の金を納む故に一年間四貫八百匁にて只一箇所なるも黃海全道の四倍以上となる鑛業權は如何して得るかと言ふに先づ砂金を發見すれば其地よ青松等を樹て、目標となし其處よ杭を穿つ而して杭の周邊六尺四方若くは十尺四方の外權力なし故に其杭の産額の大なるを聞けば直ち其隣地お青松を立て、其權利を得第一の發見者は却て其利益少なきものありと云ふ平壤の韓人戸數約五千人人口二萬邦人の居住するもの三百名を超ゆ領事官館警察署郵便局商會總代理場等あり砂金煙草を産物とす其他名物よ素麵と妓生あり平壤の妓生は有名なるものにて大同江の水流の清きは韓國に取つては京の加茂川にて皮膚の美なるも是ふよるか朝鮮の藝妓は通常の藝妓と官妓との二種あり官妓とは地方官吏の直轄に屬するものにて無税よて營業し其代り官家の祝典等あり又官吏の招聘するある時は無賃にて技を演ずるものなり樂器は三絃琴(其絃は眞鍮線を用也)蕭、横笛、縦笛、鼓、大鼓等にて唱ふ所は俚謠又は詩にして舞は神巫の舞若くは能樂の如く優長なるものなり通常の人を聘するものは客自から妓の家に行き又之を自家よ招きて以て技を演せしむ亦此地に妓生

養成所あり京城に有名なる妓生は皆此地の産出なりと云ふ大同江や平壤附近までは頗清潔ふして川の本色青藍色を呈す全都の飲料水たり水汲桶としてはブリキ罐の上下に細工を施し背の中部に天秤棒を横たへ兩手を上より覆ひ掛け終日汲水に營々たるもの大同門邊雜沓織るが如し韓人固有の汲水法は手頃の水甕を頭上お戴き手を以て其顛倒を妨ぐの婦人の河邊お立つもの即ち是れ茲お一種の奇習とも言ふべきは韓人の洗濯法なり布片を河邊の石上に置き尺餘の木片よて打ち洗ふこと我「きぬた」を打つゝ似たり決して手よて揉み上るが如きとなく又こぬか石礮よて洗濯するを知らず彼所お茲お三々五々丁々又丁々又奇風と言ふべし邦人の在住者は主として大同門内外にて兵站司令部までの兩側は既に日本人の占居する處日本風の商店或は木造或は煉瓦造あり其他大同門内より城壁の内部に沿ふて裏小路は恰かも内地同様の觀をなし料理店小店等續々開店するを見る下宿屋あり豆腐屋あり角力の興行あり新日本の經營盛なりと云ふべし朱雀門より停車場まで約一里も畧日本人家屋にて連絡するを見る目下中央の大道取廣げ中にて我司令部憲兵朝鮮巡查等は頻りに舊家屋の破壊を監督しつゝあり一年ならずして平壤は全く新日本の市街お變せんか此地京城と同しく大道の兩側の瓦葺とす其他墓蒼たるは他と全し

古の朝鮮國は漢江以北にあり箕民衛氏皆王儉城に都す今の平壤府なり漢武帝衛氏を滅すや其地を以て樂浪郡となす樂浪郡は王儉に治し朝鮮縣と名づけたり高麗國の平安道

よ起るや初代東明王朱蒙より二十世の孫長壽王巨連のときに至り都を此地よ定めたり我雄略帝のときとなす爾來春秋幾變遷遂に今日我日本の勢力範圍に入る感慨無量、

平壤の玄武門外影寒く昔を語る松風の音、

壯丹臺に登りて見れば風あれて船橋里邊雨したりなり

雲深く入りにし身にを今更に御國の光あふかれにけり

國亡び主はかかれとこゑ高く船歌歌ふ韓人あはれ

登哀悼碑小丘、

維昔旌旗卷土來、連營驕險暫爲魁、天兵一舉明王霸、萬古招魂舊砲臺。

登壯丹臺、

堅壘金城長白苔、江山蕭颯動余哀、休言成敗輕論破、同是征夫戰死臺。

弔戰死者、

今日隆興何不期、荒原埋骨亦情義、黃泉笑祝開明澤、人祭于城戰死碑。

五月六日雨、平壤滞在午前旅舎より午後平壤兵站司令部に至り來意を通して平壤以北軍用鉄道便乗の手續をなす即ち一書を携へ雨をつきて一里餘の停車場に至る鉄道監部より安州行の便乗券を得たり再び雨を衝きて宿舎に歸り明日の用意をなす時より報あり鎮南浦行汽船明七日午後一時出帆と茲よ於て汽船便の前後を考ふるに大同江を上下する汽船は毎日あるにあらず時としては二日或は三日目荷役の都合により不定規の

ものたり安州行は一日として足るべきも歸來此地も長く滞在するが如きは境遇の許さ
 る處如かず安州行を止めて大同江を下らんにはと即ち大同江を経て鎮南浦行と決す
 聞く處よれの安州以北清川江大寧江は未だ架橋工事落成せず御用船の通行を以て連
 絡し夫れよりは輕便鉄道にて新義州(義州を去三里)に至るを得べきも時間の如きと未
 だ定規なく只事實上連絡せるのみよて今後數ヶ月を要すや云ふ現は大同江の架橋を鉄
 橋となすが如きは幾多の日子を要するや知る可からず

五月七日晴、午前は未だ餘裕あれば再び觀察府北哀悼碑の下に至る蓋本日招魂祭の執
 行せらる、當日なり行々日語學校を訪はんとせしを同校生徒亦式を列する爲め校庭に
 整列中なりしを以て果さず只韓人生徒の整頓法の如何なるやを知るを得たるのみ大小
 長幼固より不規律學生服(日本風)あり朝鮮帽子あり所謂「チョンガ」あり服色黒白或は
 紫色等種々あり約百人を數ふべし丘上よて既に紅白の幔幕を連ね綠葉の「チ」門幾旋
 の旌旗喫茶店舞臺烟火臨時雇入樂隊等かたの如く用意整ひ僧侶の讀經守備隊の參拜其
 他日本小學校生徒約五六十名の唱歌日語學校の生徒參拜餘興として生徒の競争運動手
 踊等頗る盛大を極めたり韓人の群集山の如き中よ可憐なる尋常科程度の日本學生が碑
 前に向ふて禮拜し嘸啞たる喇叭の聲と共に歌ひ出す若お代の曲余は遠く船橋里の邊黒
 龍の走り行く影を臨み牡丹臺上松影疎なる處幾多勇猛の同胞激戰の當時を思ひ眼前此
 光景を視て一種云ふ可からざるの感にうたれざるを得ざりき天祐を保全し給ふ我大

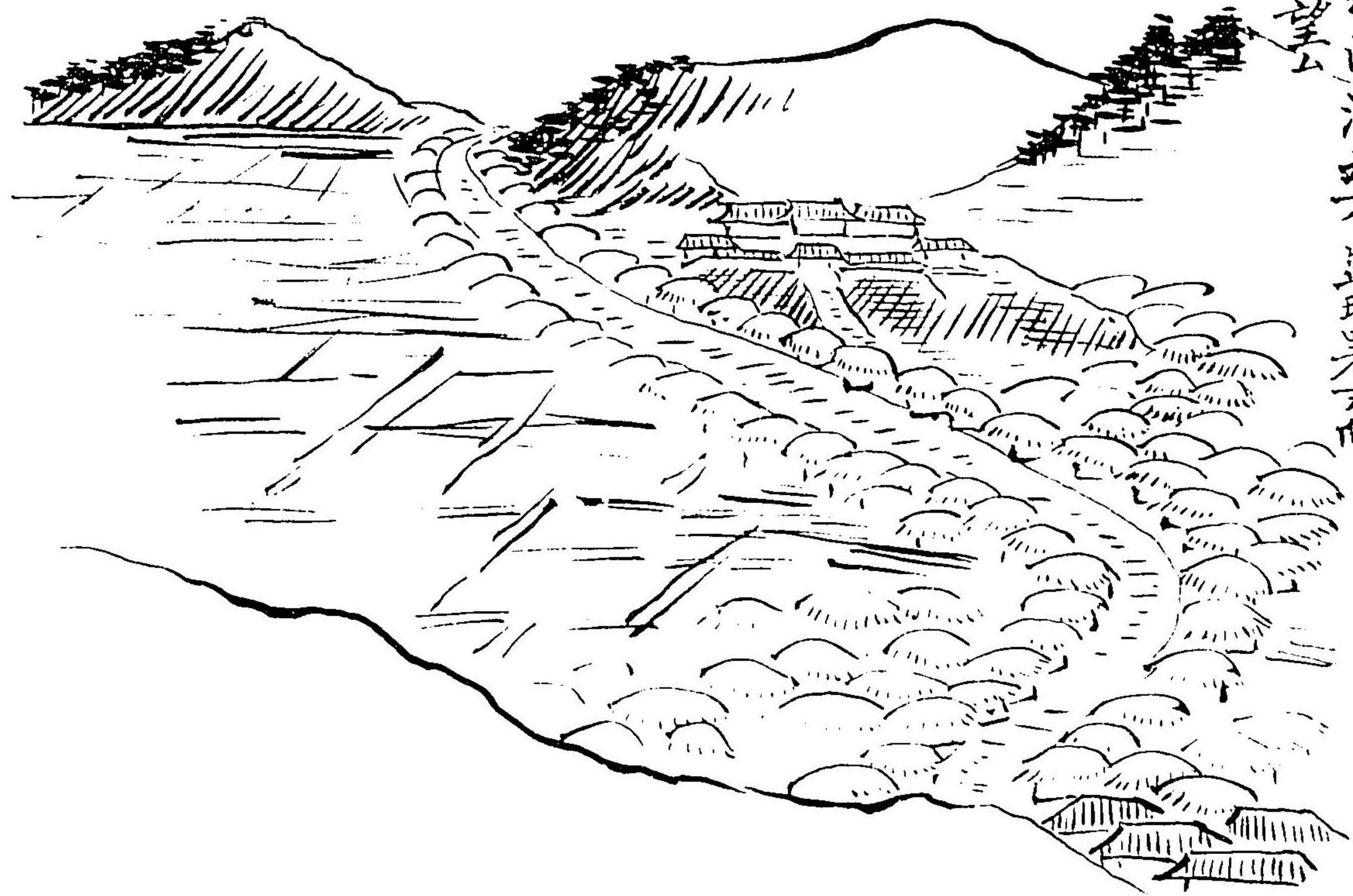
元帥陛下の御稜威は斯迄に及びしか余は古今を冥想して感慨是を久しうす、式終り匆
 や歸舍用意を整へて大同江畔に至る大同江丸に乗りしは午后一時なりき大同江や平壤
 以北は普通の川流の如くなるも平壤以南は急に其形勢を異にし江口潮流の干満此地よ
 及び晩景早朝約半ば一帯の砂濱たりしもの正午頃には洋々たる大海の如く一面の潮水
 其幅二百間以上以南は水色黃濁所謂黃海の海波と同一なるもの正ふ龍山以下の漢江が
 洋々海の如くなるも形勢を同じくす韓國の東岸は干満の差僅かに一尺に滿たず仁川の
 如きは其差實に三十三尺木浦にて十三尺に及ぶ地勢亦東よ高く西方に傾き西海岸一帯
 遠淺多島海あり東海岸は島影殆んど無し是注意すべき形勢として地學者の往々西部の
 陥没したる結果たるを想像する所以なり大同江丸は鎮南浦迄八時間を要すと云ふ萬景
 俗よりは稍大形の汽船を通ず鉄道架橋の稍南なり支那「ヂヤン」韓船等數多碇泊す川幅
 是より時として三丁時として四丁途中の光景や雄大氣宇頗宏濶只惜むらくは水色黃
 濁なりと雖數日間の韓國旅行中此日の如く心氣を壯にせし事あらず眞個に大國の大河
 の如く日本内地の渡頭呼べは答ふる對岸の如き小規模のものよあらず兼二浦に達せし
 は午後五時なりき川幅此邊畧半里此浦は江の東岸にあり日魯時局の發展と共に發見し
 たる港にして京義線の一部黃州に連絡したる鐵道工事あり將來注目すべき大都會たる
 べきは疑を入れず今朝鮮新報に掲げたる五月三日發兼二浦通信なるものに左の記事あり

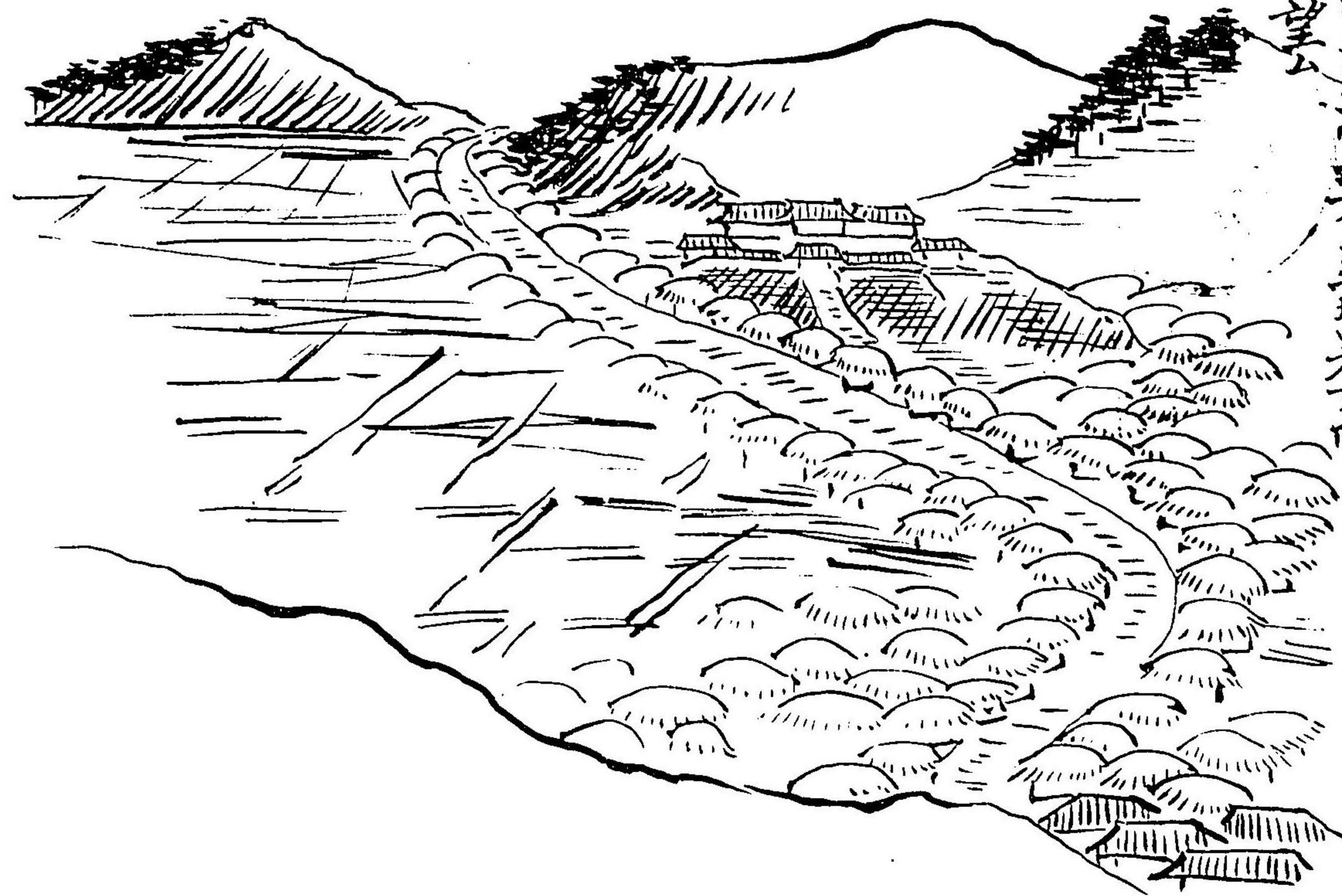
一、埋立工事、過日來新たふ着手して大に其工事を急ぎつゝある埋立事業（機關部タ
ンクを境としたる）は逐日進捗し居れり目下之れに使用せる人夫は韓人のみ百餘名
よして十四五臺のトロクを以て一日平均二十四五坪位宛埋立居れり而して該工事は
本年七月中を以て竣成せしむべきものにて竣工の上は之に倉庫及び千二百間の鉄
道工場を建築し之を以て京義線の第一工場に充つる由なれば隨て他の附屬建築物も
續々建設せらるべし

二、船渠工事、頃日來頻りに工事を急ぎつゝありし西部の船渠工事と切割線路より海岸
へ突き抜けたる處を基點とし船渠に材料運搬用として建設せられつゝありし輕便鉄
道線路工事は今回一時中止せる事となり之が力を以て更ニ監部の前面に當る埋立工
事及石割工事に傾注し富海岸より船渠に向ひ周匝する輕便鐵道線路は目下大ニ進捗
し二十日内外の後よは凡て竣効せらるべく而して船渠は其第一部分の竣功して茲ニ
一段落を告げたり又東部に於ける船渠は普通修繕船渠なるべき由なるが西部の分は
運河式にして鐵道材料其他一般荷揚の爲め築造せらるべきものなり元來潮時により
て事を行ふ時は僅かに一日六時間内外の事業時間と過たざるも該式よる時は優に
一日十二時間以上の業務時間を得らるべきものなり

一、大市街の規模、目下經營せられつゝある當地市街は約一里四方の豫定ふして戸數一万
人口二十万を容るゝよ足りて頗る大規模のものなるが目下埋立つゝある道路の如き

鎮南浦北方 監理署方向
ヲ望ム





鎮南浦北方 監理署方向
ヲ望ム

(31)

一、埋立工事、連日漸た著手して大に其工事を急ぎつゝある埋立事業（機關部タ
シタを境としたる）は逐日進捗し居れり目下之れに使用せる人夫は韓人のみ百餘名
として十四五臺のトロッコを以て一日平均二十四五坪位埋立居れり而して該工事は
本年七月中を以て竣成せしむべきものにて竣工の上は之に倉庫及び千三二百間の鉄
道工場を建築し之を以て京義線の第一工場に充つる由なれば隨て他の附屬建築物も
續々建設せらるべし

二、船渠工事、頃日來頻りに工事を急ぎつゝありし西部の船渠工事と切斷線路より海岸
へ突き抜けたる處を基點とし船渠に材料運搬用として建設せられつゝありし輕便鉄
道線路工事は今回一時中止せる事となり之が力を以て更に監部の前面に當る埋立工
事及石割工事に傾注し富海岸より船渠に向ひ周匝する輕便鐵道線路は目下大に進捗
し二十日内外の後には凡て竣功せらるべく而して船渠は其第一部分の竣功して柱
一段落を告げたり又東部に於ける船渠は普通修繕船渠なるべき由なるが西部の分は
運河式にして鐵道材料其他一般荷物の爲め築造せらるべきものなり元來潮時により
て事を行ふ時は僅かに一日六時間内外の事業時間と過たざるも該式による時は優に
一日十二時間以上の業務時間を得らるべきものなり

三、大市街の規模、目下經營せられざる當地市街は約一里四方の豫定ふして戶數一萬
人口二十万を容るゝに足りて頗る大規模のものなるが目下埋立つゝある道路の如き

烟、北方向、大同江上流ナリ
鎮南浦、東方
旭岡及大同江ヲ望ム

旭岡

帝國領事館

浅瀬于潮現ハ、マ、マ、マ

親船場

韓人町



も其巾凡そ十五六間あり而して當地は將來一切外人の居住を許さざる事となす由なり

一新設料理店敷地 今回許可せられたる料理店敷地も當一年の後には再び移轉せしめらるゝ都合とあるべく其理由は新たに居留地として漸次該方面に開發されつゝあれば元來料理店は居留地外十町を距らされは營業を許されざる制定により自然他日發展の曉には再び移轉せらるべき境遇に立至るべしと云ふ

此記事によりて該地近況の如何を知るべく將來大同江畔の大都會として深く世人の注意すべき處たるべしと上陸するもの乗船するもの共多數人忽ち錨をあげて發す兩岸の岩石潮流干満の爲ふ水面上一間余に一條の横線を畫し形勢多くは斷崖絶壁時に翠松三五其間に點綴するあるも密林の崖頭を蓋ふが如きは遂に余が目撃し能はざりし處とす江流南して更に西に折るゝの處鉄島豪然中江に横はる西方遙かに雲影のたなびくが如く一帶の翠巒江頭に浮ぶは即ち鎮南浦の近きたるなり悠々茫茫又漫々如何も想像するも河流の内、在るの感なし濁浪漸く舷を撃ち船体動搖稍大なり忽ちにして黒烟の空を塵するもの兩三、洋風の家屋を丘上に望むもの一二次で瀛宙は着港を報す正に午後八時翠峯一帶小平地を圍み一團の高樓大廈其間、密集す夕陽遠く黄浪に吞つき旭旂海風を翻て街頭に立は鎮南浦埠頭や即ち是れ上陸直ちに帝國旅館に投す

五月八日晴、鎮南浦は平安南道の西端にあり大同江の北岸に位す江口の南端魚隱洞を

距るもと十三哩平壤を距る事三十七哩明治卅年十月の開港にかゝる東南は江中活潑島小活潑嶋の青嶼點在し埠頭水深く千噸乃至二千噸の船舶を碇泊せしめ得西方一帶翠巒に接し北部小丘の間を通して石井浦沙洞梧山店等に通す東は旭が岡より一帶の松丘長く南に延びて大同江を限る戸數五百六十人口四千七百七人卒あり毎年十二月初旬より翌年三月迄結氷の爲航海杜絶す約我内地の札幌邊の如し韓人町旭が岡の北より我居留地は其南より旭が岡は禿山なるも領事館のある處岡上道路を區劃して一部韓人の居住するものあり警察署郵便局民役場學校病院第一銀行出張所商話會俱樂部大坂商船會社支店等あり此地米穀の輸出は韓國第一位にあり南浦の對岸卜頭浦より南する事陸行三里にして黃海道文化温泉場あり有名なる九月山の南にあり黃海道は温泉多し松禾信川亦温泉場なり冬期の入浴者少なからず只道路不完全なるを以て馬背を借らざる可からず朝鮮馬は小なりと雖も頗る強健内地通行は馬背を最も便利とすと云ふ午前十一時仁川行の船便あるを聞き結束して波止場に至る堀久商會慶寶丸入港の豫定なりしも平壤より未だ歸帆の途に就かず更に堀久回漕店に至り仁川行を慥かめたるに本日午後五時相違なく出帆の豫定なりとの事なれば乗船切符を購ひ午後再び波止場に至り一茶店よつきて待々事多時慶寶號至る即乗船す堀尾室同乗客邦人四名韓人二名あり三等室は韓人室よ滿つ同室邦人の内覺人は憲兵にして南浦より一人の兵士を伴ひ京城に至るもの聞く處ふよれば同輩の間に衝突を起し遂に相手に負傷せしめたる爲審問の爲

同行すと一人は仁川の商人なりき韓人客は郡司やあらん埠頭日本兵充滿して荷物の運搬雜沓を極む此日早朝一隊の兵士御用船にて某方面より我同乗の兵士は其遠征に漏れたるなり憲兵某氏語りて曰二年以前より韓國にありて戦争破裂前の形勢頗る重要な任務に服したりと其在留中の珍談奇聞を語る今公にし難き点あれば茲に記さず兎角して船内は無聊を堪ふる數時午後八時漸く大同江を下を半夜夢醒來れば船体の動搖頗る甚し是を「ヤン」沖通過の時となす江口大海に出る處渦流船舶の操縦に困しむと即ち是れ

五月九日晴午前六時船は正に黃海洋上にあり天候稍曇潮流頗る急黃濁の度大同江の如くならず稍青色を帯ふ蓋し稍南方に進みたるなるべし既ふして船と多島海中入る船中一等客よ米人あり歳七十有餘聞く處によれば平壤に令息の居るあり金鑛事業に従事す面會の傍ら單獨東洋漫遊の途に上れるものと其志や壯其意氣や雄邦人の五六十歳にして家居して園藝を樂しむものと比較せば如何流石な米國人なるかな午前八時海色灰青色を呈す波浪極めて平靜午後天候極めて平靜何等の幸福ぞや嘗て聞く朝鮮の西岸一帶潮流の急なる爲海霧の多き時としては非常に危険にして途中停船の運命に遭逢する事多しと余は幸ひに此快活なる航海をなすを得て飽まで大海の眺望を貪取するを得たり

八十島はかすみ消えて韓國のうみはるかなり海州の沖

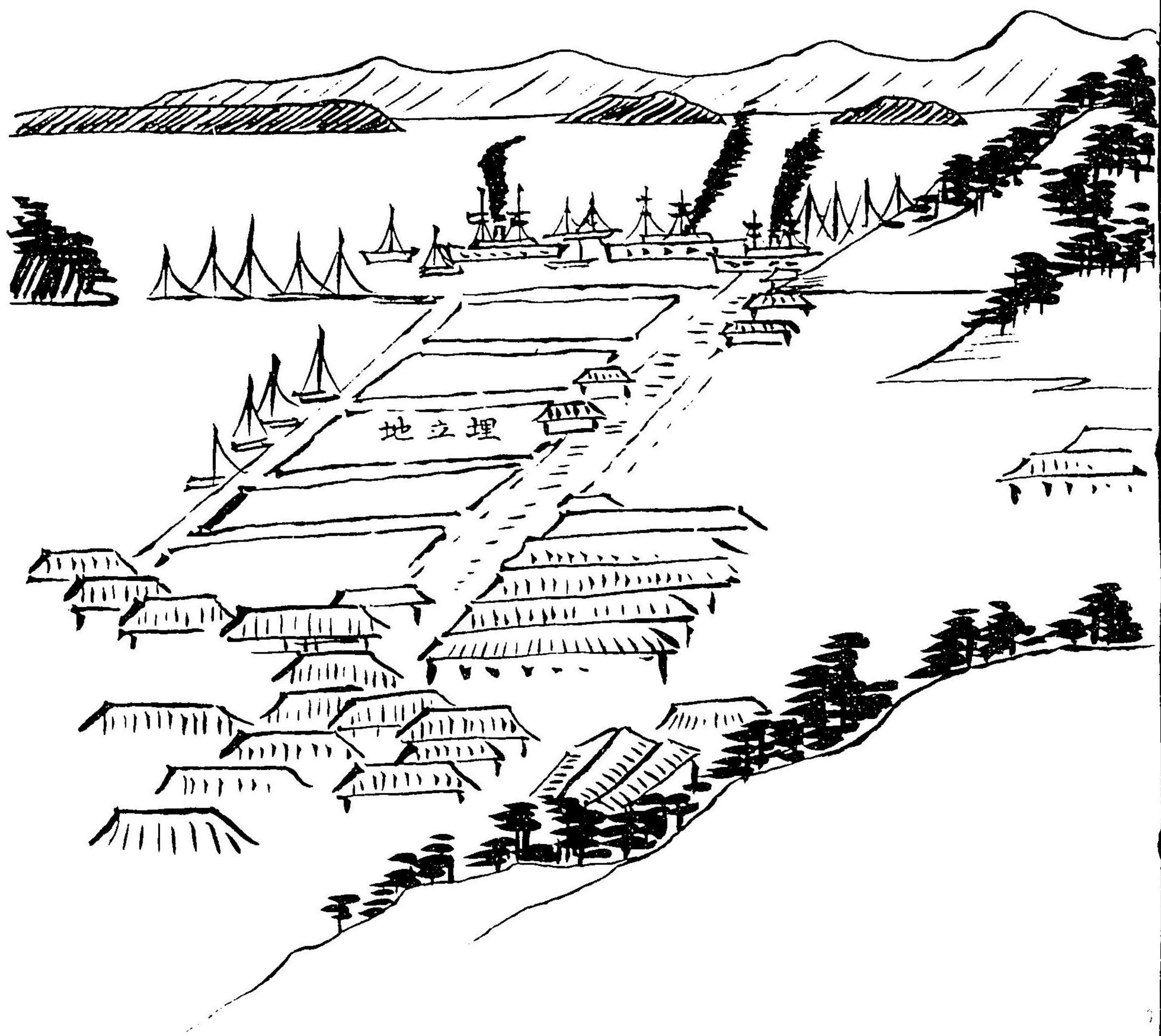
雲か山か見わかぬ沖に黒船の影ほの見ゆるあかつきの空
 玆に平壤鎮南浦の物價につきて一言し世人の參考ふ共せん平壤にては宿泊料上等一泊
 貳圓五拾錢中等貳圓下等壹圓五拾錢晝食一飯上九十錢中七十五錢下六十錢なりき夏蜜
 柑壹個七錢下宿同様にするれば一日九十錢なりとか下等壹圓五十錢にては韓人家屋の外
 面だけ稍清潔に塗替たる八尺一間の狹隘なる室内にて辛棒せざる可からず内地八九
 十錢の旅舎の割合にては壹日三圓の奮發せざる可からず鎮南浦は中等壹圓五拾錢（湯
 浴なし）普通壹圓なれば平壤よりは平均五拾錢安價なりき夏蜜柑などは壹個三錢なり
 しも理髮料は普通三十錢なりきカラー一個を求めしに廿錢一茶店ふ巻すし二本を食ふ
 て代金三十五錢を要求せられき以て其一斑を察すべし午後四時仁川港着停車場前松葉
 屋に入る

五月十日晴、仁川滞在終日旅舎にあり稍頭痛の氣味あり静養す
 五月十一日晴、

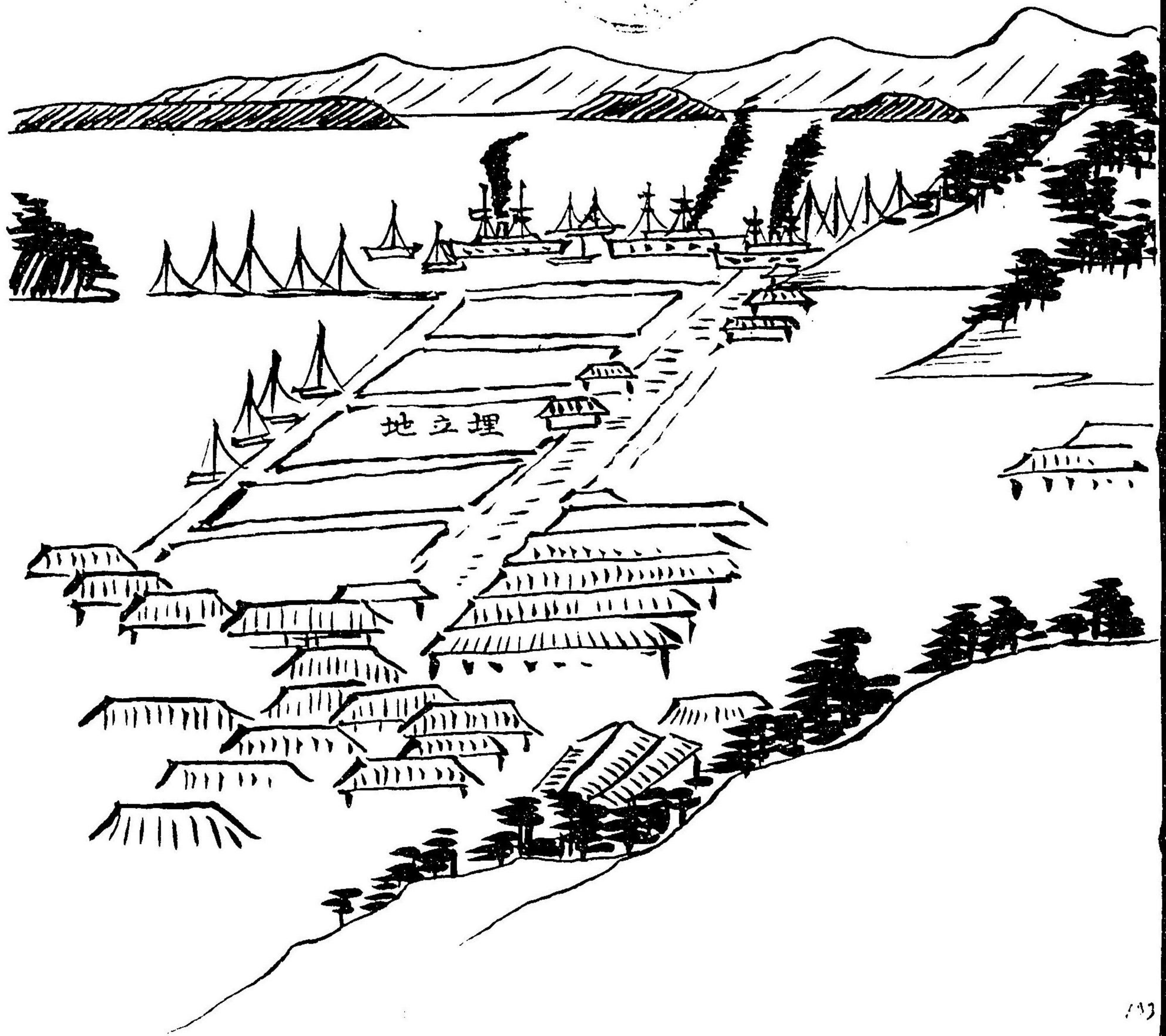
仁川偶感

島嶼如恒繞四周、海門風絕巨艦浮、偏憐碧浪空委他、大廈衝雲入斗牛。
 仁川港は元來仁川府に屬する濟物浦として東部一帯一丘陵に限られ北方内海を隔て、
 漢江口方向通津府に對す西は永宗島クレイル島巴島夕チイ嶋を以て外洋を限り港頭に
 月尾島屏障の如く西方に横はる月尾嶋内の即ち埠頭内港にして以外は即ち外港なり南

鎮南浦南方
 波止場望山



鎮南浦南方
波止場望山



地立埋

雲か山が見わぬ沖に黒船の影はの見ゆるもかつきの空
 茲に平徳鎮南浦の物價につき一言し世人の参考ふ共せん平壤にては宿泊料上等一泊
 貳圓五拾錢中等貳圓下等壹圓五拾錢食一飯上九十錢中七十五錢下六十錢なり夏
 柑壹圓七錢下宿同様にして一日九十錢なりとか下等壹圓五十錢にては韓人家屋の外
 面だけ稍清潔に塗替たる八尺一間の狭隘なる室内にて辛棒せざる可からず内地八九
 十錢の旅舎の割合にては壹旦三圓の奮發せざる可からず鎮南浦は中等壹圓五拾錢(湯
 浴なし)普通壹圓なれば平壤よりは平均五拾錢安價なり夏蜜柑などは壹個三錢なり
 じも理髮料は普通三十錢なりきカラー一個を求めしに廿錢一茶店を巻すし二本を食ふ
 て代金三十五錢を要求せられき以て其一斑を察すべし午後四時仁川港着停車場前松葉
 屋に入る
 五月十日曜、仁川滞在終日旅舎にあり稍頭痛の氣味あり静養す
 五月十一日曜、
 仁川 偶感
 島嶼廻船四周、海門風暴巨艦浮、備修邊陲空委他、大廈雲霧入斗牛。
 仁川港は元來仁川府に屬する濟物浦として東部一帶一丘陵に限られ北方内海を隔て、
 漢江口方向通津府に對す西は永宗島、イ、島已島、チ、嶋を以て外洋を限り港頭に
 月尾島屏障の如く西方に横はる月尾嶋内、即ち埠頭内港にして以外は即ち外港なり南

方大部幅小部嶋等を以て南陽灣と界す大坂商船會社等千噸以内の船舶は月尾島前の埠頭に近づくも郵船其他は滿潮の時、あらざれば近づくを得ず多くは沖合遙か月尾島の西に投錨し約一里は短艇の手を借らざるを得ず月尾島前と雖も明治廿七八年戰役以後一の瀧州を生し干潮の際は一小嶋の觀をなす干満の差實に三十三尺なり漢江や年々花剛岩地方片麻岩地方等の泥土を流出し爲り、港頭を埋却する頗大十數年の後、は或は月尾島附近自然の埋立工事を見るならんと云ふ然れ共外洋は島嶼、圍まれ船舶の碇泊安全なれば本港の繁盛を害するお如き事はなかるべし陸路京城を去る八里半大同江口へ二百廿二哩大連港へ二百九十哩太沽へ五百三十六哩芝罘へ二百七十二哩釜山へ四百三十二哩長崎へ四百五十九哩を距つ全港一の森林地なく翠綠の賞すべきなきは勿論河流の以て給水其他、便宜を興ふるなし此地用水の不便なるや仁川港内適當の井水二ヶ所を有すれを一個所三拾圓以上の收利を見るべく普通の家政ならば優、一家を支ふるに足ると云ふ明治十六年一月の開港に係り目下人口邦人六千五百以上韓人三万歐人八十人本年の如きは恐らくは合計四万以上に達せんか日本居留地清國居留地各國居留地の區劃あり市街は各國居留地を通して南北、山手通り本町通り上町通中町通海岸通等に區別す時局發展以來兩方開化洞敷島等約一里間人家増大商店連續するに至れり海岸通の北端は即埠頭として丘上英國領事館あり丘北は仁川停車場の在所にして夫より以北約十四五町亦日本家屋の増加を見る汽車は北を廻りて更に港東の丘後に出で南し

て京城に向へり行程廿五哩、七にして一時四十七分間を要す中途四驛を置きて永登浦に至り京釜線に連絡す山手一帶歐人の家屋あり埠頭附近支那人家屋多く平地は大略日本人のみ埠頭に仁川兵站司令部あり海岸通の南に大神宮あり氣象臺は北端東部の山上にあり此邊山腹矮松亂生す日本領事館日本警察署郵便電信局民役所仁川病院居留地小學校官立日語學校郵船會社支店大坂商船會社支店堀商會第一銀行支店第十八銀行支店第五十八銀行支店朝鮮新報社智恩院高野山東本願寺妙覺寺の出張所等市中に點在し貿易額一千万圓以上實に朝鮮國第一位の開港地たり其關係正に我横濱の東京に於ける如き位置に立ち國都唯一の門戸なり往年汽車の連絡なきや漢江を溯りて龍山に向ふものありしも今や鐵路一瞬京城に入る其繁盛や想像するに足る輸出貿易は殆んど日本人の獨占事業なるも輸入貿易も在りては清商決して侮り難く洋人も亦此間にありて邦人の經營頗る苦心を要するものありと云ふ輸入品の重要なるものとしては生金巾(英)晒金巾(英)シーチング(英)全(日)綿毛縞子紡績糸(日)絹反物、夏布、金屬品、日本酒、米材木砂糖、麵粉(米)石油、紙巻煙草、鐵道材料、石炭及骸炭、器械、吹、繩、燐寸等あり以上の内、點を附するものは重に本邦人の需要に屬し韓國人は未だ此等の諸品を需要するに至らず又鐵道材料は京釜鐵道會社用に輸入し來りしもの輸出の重要なるものは大豆、米、牛皮、人參、鑛金等なり是等經濟上より韓國を見るときは猶正に農業時代にあるものにて天産物の外國産としては輸出せらるものなし就中米穀は重要輸出品たり

且其輸出先亦大半本邦なるの故、米穀の豊凶は直ち日韓貿易に多大の影響を蒙るを知るべし本港の將來よつきては京釜鐵道全通の爲旅客も多く釜山より上陸すべく仁川港頭旅人の出入或は影響する處あらんも貨物の出入に至りては北清南清本邦を初として更に増大すべきは瞭然たるの形勢ならん其他鎮南浦木浦蔚山港等悉く鐵路を以て連絡するに至らば多少の影響あるべきや論なきも今茲に評論するの余地なければ略す午前は港の内外を散策し午後官立日語學校を參觀す校長岩崎氏熊本縣人なり韓國官立日語學校は此校の外京城に一ヶ所合計二にして其他有志家の設立するものを合して全國四十余を算すと云ふ明治廿七八年日清戰爭の影響として設立せられしもの、一にして現在生徒數三十名あり四學年に別つ内地に高等小學程度に日語を加へたるもの學科修身、會話、讀方、書取、翻譯、筆算、珠算、地理、歴史にして教科書には帝國讀本八冊外に學部ふて翻譯せし韓語(漢字諺文混合體)の萬國歴史萬國地理漢文には論語を用ふる居たり時恰も學年末試験中なりしが其成績を聞くに筆算等の成績初級の内は頗る宜敷由なるも在學中に結婚者を出せば其結婚者は未婚者に比して忽ち成績の劣り行くを見る韓人の早婚は慥かに精神界の發展に大影響を來すを知るべし聞く生徒の妻あるものは時として男子よりは年長者あり雨天外出の難き日の如き終日妻君の膝下を御伽して肉慾に耽り其精神を消磨し去る者比々然らざるなしと又聞く讀本中日人の韓國に對する出來事假令は神功皇后の三韓征伐豊公遠征等の如き記事に至れば朗讀を忍みて之を避

くるの情ありと蓋人情左もあるべし助手教員二名の韓人あり韓國師範學校卒業生の由經費凡一ヶ月四十二圓校長給の外なりと助手李根浩氏曰く岩崎氏は杉浦重剛氏の門下なりと教室二、教員扣所一、校長室一本年の卒業生五人なり其卒業生の目的とする處單ふ日人多き爲に實際上便利を得んとするに過ぎず遠大の計畫などは憐むべし然も半途退學者頗る多しと是を堂々たる韓國直轄學校の現況とす辭して更に韓人の小學校を訪はんとす生徒三十名程暮々咄咄の聲盛なるも教員一人も出席せずとの事なれば追て訪問せんとて辭し去れり然も機を失し再訪の餘暇なかりしこそ遺憾なれ聞く處よれば終日無定限の讀方(意解なし)を教授するのみなりと正に我寺小屋の如きか更に居留地小學校を訪ふ此日太神宮の祭典あり同校生徒參拜の爲果さず尾して大神宮に至る祖國の神靈に參拜して幼童に日本の觀念を注入せんとするもの内に此地出生の生徒あり未だ祖國江山の洵美を経験せず禿山赤土の大神宮を参して果して皇國の觀念を作り得んや否や内地に執着するも不可内地の如何を知らざるも不可母國愛すべく遠征敢てすべし在韓教育家苦心の第一頁たり社頭を會我五郎工農社對面の演劇を見る四圍の風光に調和せざるの憾みありしも兎も角韓國の一角ふ此藝能を賞するを得たるは旅中の一興たらずんばわらず開花洞敷島約一里殆んど飲食店料理店貨座敷等とす目下猶建業盛なり街上日本兵士の往來緘るが如し是れ數日前某地より渡來して滞在し更に某地に向ふ者朝來背後の山上或は市街を練歩さて朗々軍歌を唱ふ意氣既に滿韓を壓す多數

の宿舎は皆是の爲に徵發せられたり在留邦人の元氣を知るべきなり

五月十二日晴、午前八時再び仁川居留地小學校を訪ふ校長三城敬藏氏に就て同校最近の事情を問ふ當校の沿革を聞くに明治十六年一月仁川港の開港場となるや居留民漸次増加し來り教育機關の必要起り明治十八年の秋に至り本願寺支院内に僅か十餘人の兒童を收容し以て初等教育の端緒を開けり明治廿三年に至り居留地公費を以て借侶の外専任教師を置き學校擴張維持の方法を決議し支院附近に狭少の平屋を建築したり是れ當仁川小學校の成立せし當初の模様なりとす全校明治卅七年調の統計中重要なるものを示さんか

戸數 一五二一、男四、九〇四、人口百に對し在籍兒童數六五六、

生徒數 男一八三、女一七二、

學級數 六、

保護者職業別 官吏九 農八 工六五 商二九五 勞六三 庶業九四、

授業料、尋常科 三十五錢 高等科 五十錢

教員給 四、八九六 歳出總額 三二、五二〇 教育費 八、〇八六、

居留民 一月に對する總經費負擔 二〇、七二七、

居留民 一月に對し 教育費 五、三二六、

生徒府縣別

- 山口 一三九 長崎 一三一 大分 四三 福岡 三九 大坂 二八 廣島 二六
- 兵庫 二二 熊本 一八 東京 一五 徳島 一三 愛媛 五 福島 五
- 佐賀 四 京都 三 神奈川 三 岐阜 三 鳥取 三 和歌山 三
- 鹿兒島 三 愛知 二 茨城 二 福井 二 奈良 二 嶋根 二
- 高知 二 香川 二 宮崎 二 三重 靜岡 各 一 千葉 群馬 各 一
- 栃木 山形 各 一 石川 岡山 各 一 米 一 清 二 韓 一

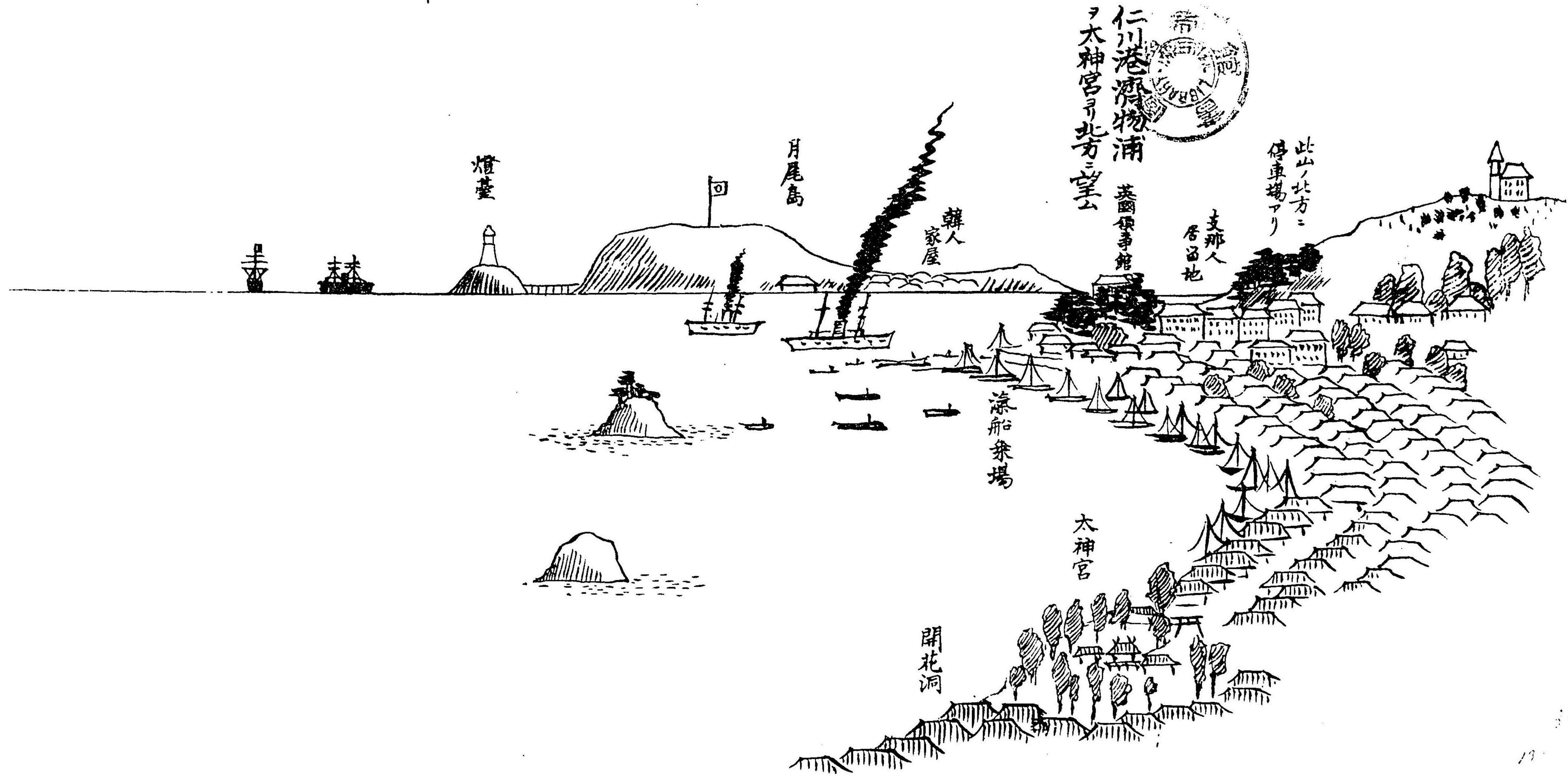
領事 加藤本四郎 管理者 民長 富田耕司 民會議長 繁野清彦

同校は昨年来非常に在籍生徒の増加を來せし由にて目下壹万有余の大金を以て増築工事に取掛り居れり校内比較的清潔教員の熱心校長の懇切何れも海外の同胞教育に熱心なるもの、如し只目下困難あるは入學退校頻繁なること、生徒出生地の雜多なるため統一上困難を感ずることありき

午後仁川出帆の船ありとの事なるを以て歸途大坂商船會社仁川支店に立寄り乗船切符を購ひ歸宿せり午后二時出帆の豫定との事なれば晝食匆々埠頭へ至れば遙かの沖合月尾島の西方へ安東丸の碇泊するを見る韓人の余を案内するに任せて小艇に乗る四人の水手にて余一人を送る海上約一里半安東丸に着す貨錢日貨壹圓を請求す余は傍人へ問ひて金五十錢を與ふ彼等不平を訴て止まず大喝一聲叱し去らしめて乗船す韓人の日人



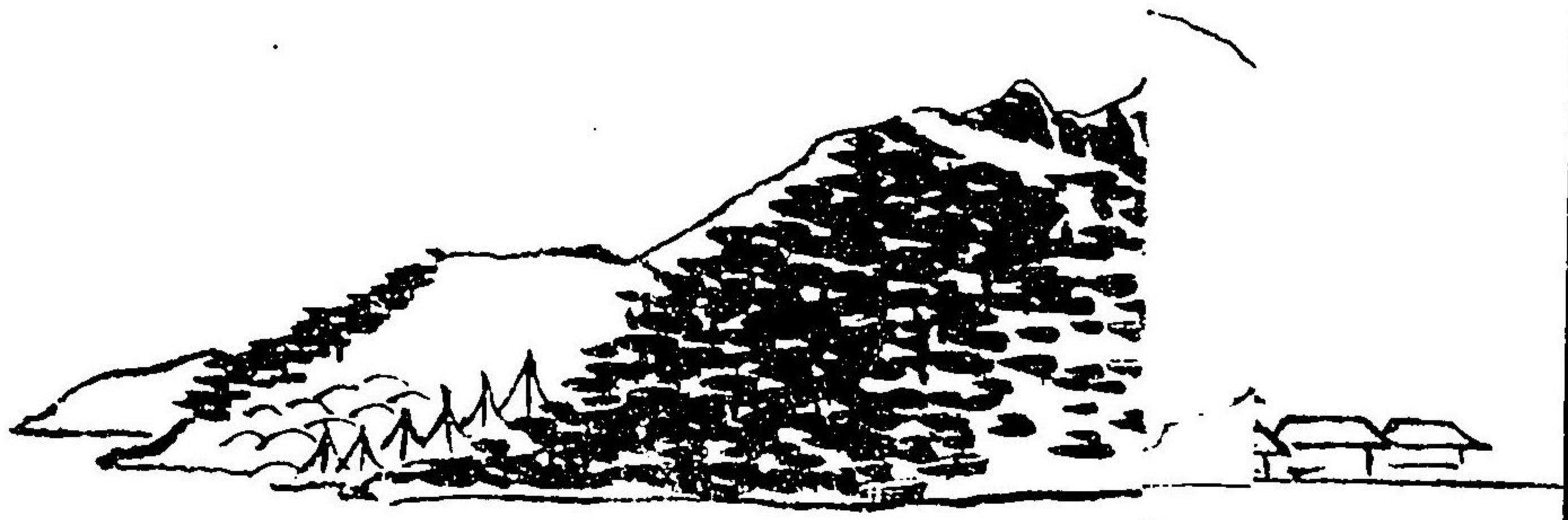
二二



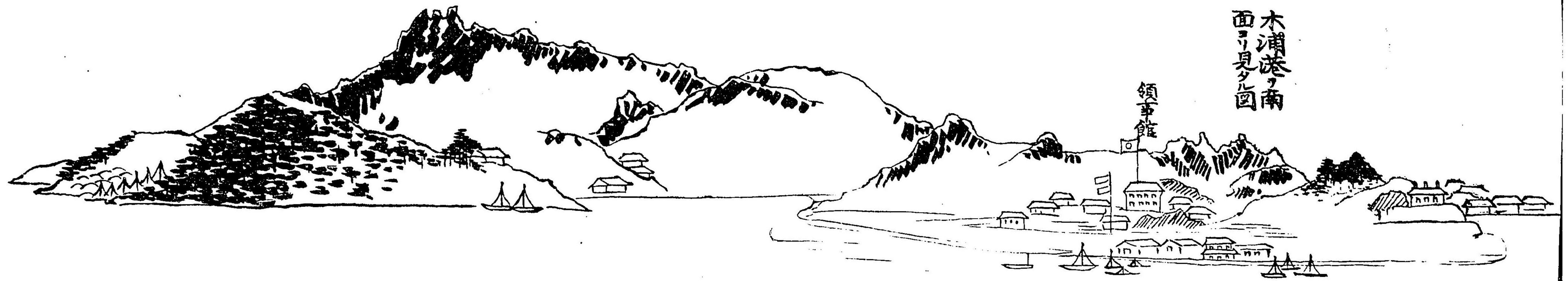
に對する其利慾に汲々たるや常に斯の如し然も最後ふ一鉄拳を興ふれば是る午後四時
發港す小部島靈興嶋の間より南して豊嶋沖に日清戰爭の昔を忍び皇子叢嶋の南に出て
ば一碧万頃海波渺々の間より出づ夕陽漸く西に沈み船内電燈の光明かなり
五月十三日晴、朝來夢さめて甲板に出れば海洋一面軟滑油の如く海軟風は徐ろ肌
を洗ひて壯快營ふる物なく天候亦極めて快晴船の正に全羅道沖あり白鷗三五船尾
を伴ふて舞ひ時に海波を翼を浸して更に奮勵尾行し來る見渡せば大海滄茫遙かに一点
の春螺を望み御用船にやわらぬ一朶の黒烟微かよ水天髣髴の間に横はる韓國の不潔や
山河の單調や心腸腐爛して頭上更な一点の白を加ふるの思ありしも茲に至つて身心忽
ち快活形象雄大眞個に遠征の快趣を呈し來る水や碧藍天候や快晴旭日微かよ東天に登
りて海鳥空を翔ける正に是一幅の好畫帖

碧水如油萬里平、旭紅微上白鷗迎、凝眸絕海孤帆影、豊島洋上大氣清。
午前八時双子列島を西方に見る午前九時全羅道不浦港着木浦港へ全羅道西南端榮山江
の海に朝する處にあり附近一帶花剛岩より成り殊に港頭骨立せる花剛岩塊の禿山海岸
に臨み西端の一部稍松林の翠色を賞するに足る港内水深く四方島嶼を以て圍繞せらる
港内よりは全く外洋を展望する能はず極めて安全なる埠頭たり明治三十年十月の開港
に係り本邦人の居住するもの一千人を超ゆ市街は領事館迎務安通東海岸木浦堂本町通
南海岸山手通等に分れ領事館郵便局居留民會商業會議所小學校東本願寺病院一銀行

出張所各汽船會社代理店等あり重要物産は米大小豆海草牛皮棉花等なり此地榮山江の流域に類する事として榮山江の如何を知るは必要の條件なり延長約六十里其流域は十二郡に亘る水源には羅州光州南平縣潭陽府長城府等の都邑を控へ下流二哩ふして榮山浦あり百石以上二百石以下の船を泊するに足り増水の時は六哩の上流に溯及する事を得水勢緩漫舟楫の故障なく他の大江の如く河身廣からざるも亦結氷の憂なく砂礫の堆積甚しからず唯水深の度少しく遺憾なる点あるのみ木浦の開港せらるゝや本江沿岸は自然に其發達を促進し輸出に輸入に頗る好況を呈するに至れり殊に江畔の各地は地味肥へ家畜も購買力と生産力と二つながら韓國中他に比類なき發達をなし十萬結の沃野百餘萬の民族皆此間に衣食す加ふるに氣候温暖産物甚だ多く養蠶業の如きも邦人の已に着せしものあり古來光州の如き羅州の如き將た棧州の如き其名の示す如く絹糸の製造盛大を極めたるの歴史に徴すれど其將來の養蠶業の好望なるは論せずして可なり余は便船の都合上群山地に上陸の機會を欠き有名なる江景萬頃等の農業地方を視察するを得ざりしも木浦附近も群山附近に優るとも劣らざる農業地にして本邦人の農事經營既に見るべきものあり朝鮮にては田地の坪數計算に「斗落」なる語を用ゆ地方によりて差異あるも平均我國の貳百坪と見るを得べし稻十束を一負と云ひ百負を一結と云ふ結よつき地租即ち結種韓貨八貫文を課す木浦附近は一斗落(三畝歩の水田)の時價上田六七貫文普通四貫文内外なりと云ふ群山地方にて一斗落二百坪の計算なれば上田

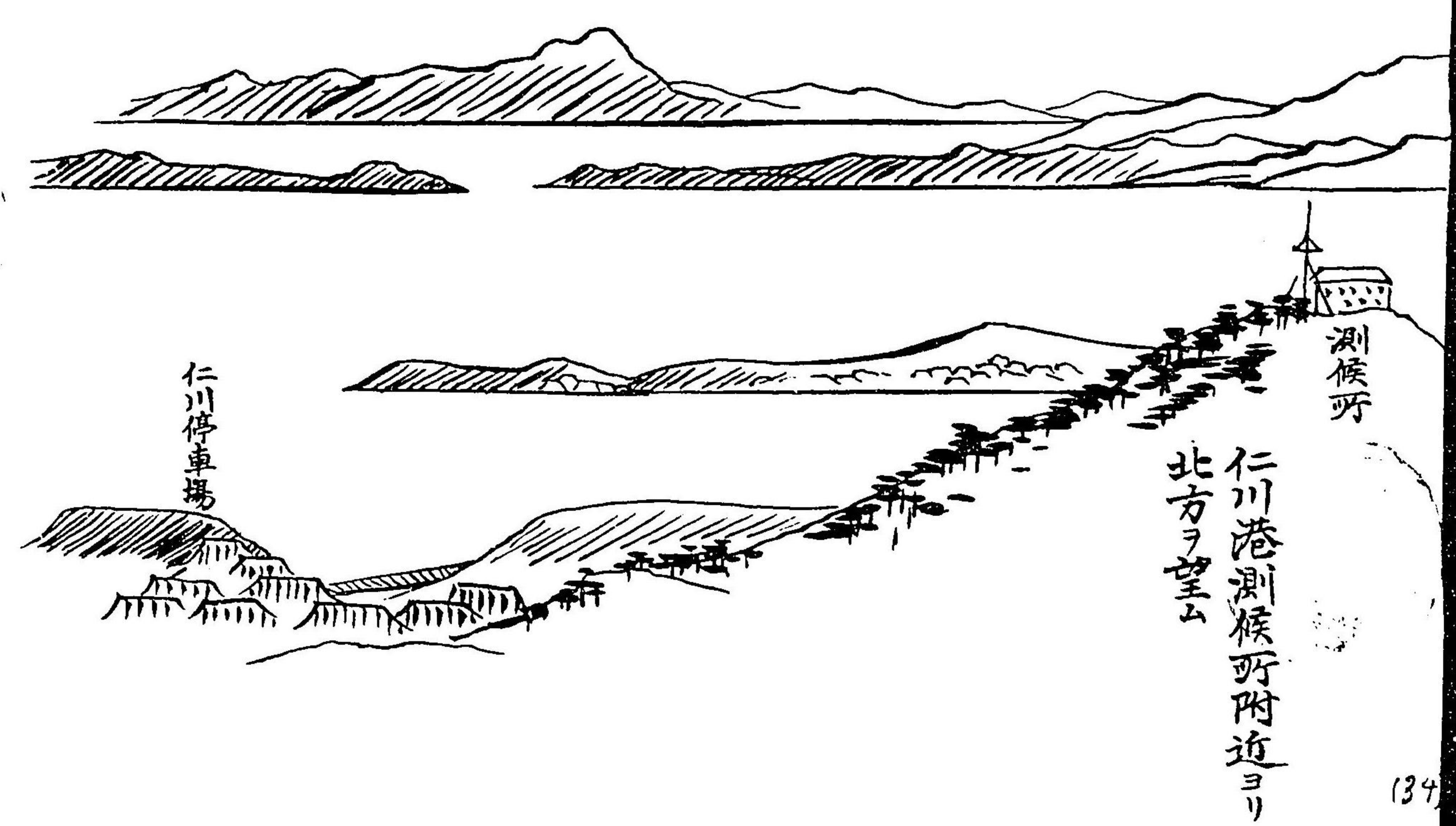


測候所



木浦港の南
面より見る図

領事館



仁川停車場

測候所

仁川港測候所附近ヨリ
北方ヲ望ム

139

141

十二圓より十五圓中田六圓より八圓下田三圓より五圓の間ありと言ふ地價の安きは斯くも意想外なるも種々の原因より來るものにて主として人家の稀少なる事將貧國の常なる物に標準の低き等は自然の原因なるべし

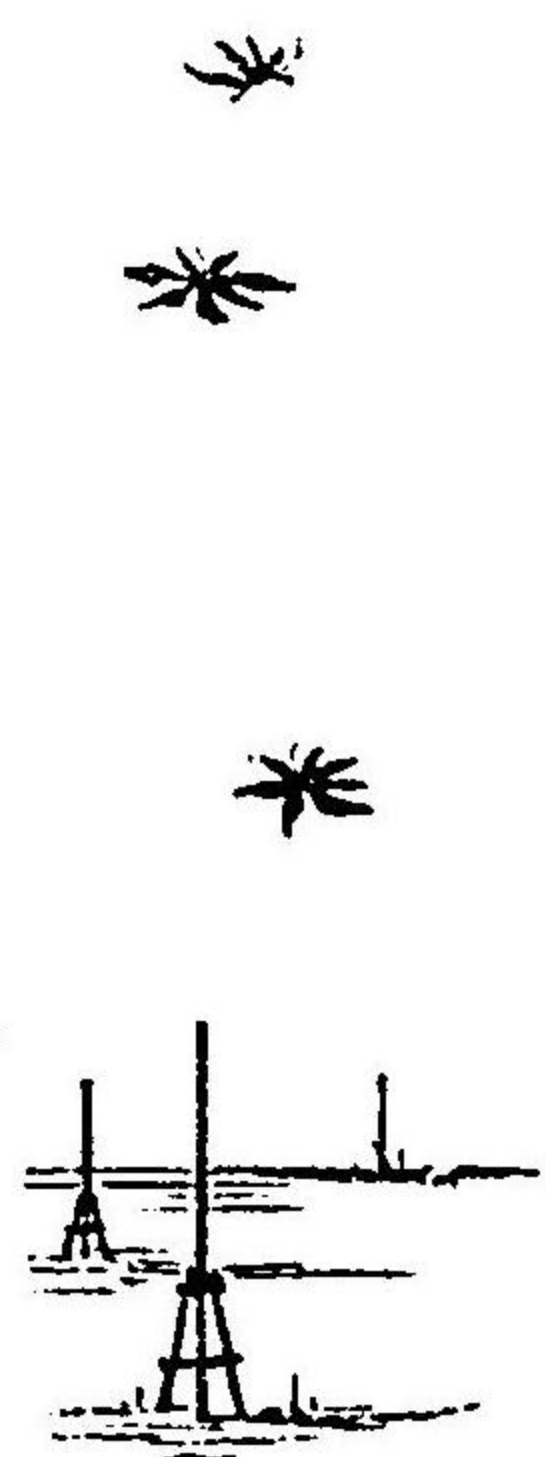
正午十二時木浦出帆釜山に向ふ達里嶋附近を南ふ臨海嶋半島を東へ過るや有名なる珍嶋の瀬戸を通過す華盛頓灣を出で、右ふ所安群島青山島所音島等を望み左ふ莞島新智島雲龍島等を見て更ふ空濶ある大海へ出づ矚目數里一点の青螺を認めず天漸く暗く船体動搖稍大なり茲ふ於てか余は安臥して同室者と四方山の會話を試み話頭ははしなく韓國通貨の事に及ぶ内に一人の刑事巡查あり木浦港より乗船せしもの曰く嘗て余は京城にあり通貨贗造の盛なるや王城の下に私鑄器械四十餘臺を發見せしこと有り且其後幾回もなく我々國より韓國白銅貨の贗物を密輸し來り民間通貨の黑白を辨せざるに乘して惡貨を利用して巨大の暴利を占めたるもの少なからず爲めに民間私鑄亂造の惡貨非常に多し韓國の貨幣整理や實際上頗る困難なりと余も至る處に韓人が通貨の授受に一々正否を鑑定し所謂ナツプシ(惡の義)を避くるに吸々たるを見て其不便を歎したりき聞く京城にては六金の授受に砂金を用ひ商人亦自國へ贈る通貨に砂金を用ひと今や白銅貨密輸入を以て暴利を博するが如き時代は過去の夢となれり韓國貨幣整理や既に着手せられたり正々堂熱心と勉強とを以て商業に従事するは今日にあり

五月十四日晴、午前六時船は巨濟島の東加德島多太浦の沖あり壬辰の役南海島北の

露梁の戦開山島見乃梁附近の戦巨濟洋の戦等は皆我海軍の苦戦せし所加徳島の安骨浦釜山の南多大浦西平浦絶影島等皆然り憾むらくは我船多く夜間は是等の島嶼を經過し其當時の情感を深ふする能くざるを午前七時絶影島の西水道より再び釜山港に入る我假裝巡洋艦一隻水道附近にあり本日午後四時出帆との事なれば余は輕装して一先づ上陸し十二日以来の汚垢を洗ひ去らん爲一旅亭に入り旅亭より石州津和野より韓國に留學するもの一人有り曰く京城に於ける我留學生は熊本縣より約廿名と我郷里より余一人との外に其影を見ず熊本縣は縣費支辨よて五ヶ年以前より留學生を派遣し居れり我は皆て郷里出身の小藤理學博士の朝鮮地質の探險に従事せられし結果深く韓語の必要を感じ藩主龜井伯に談して余を留學せしむるに至りしなりと其學費一ヶ月拾五圓熊本縣の留學生と同居し自炊しつゝある由なき津和野や小藤氏を出し森林太郎氏を出し福羽子を出え山間にありて學者を出せし處蓋し美譽と言ふべし晝食後本船お歸る船中婆艦隊の風評多く乗客の意氣大よ昂る午後六時發韓山の隨見旅行を終りて再び馬關に向ふ

余思へらく朝鮮や自然の地勢上大に邦家の發展を許すに困難なる事情を有すと云ふべし夫れ前述の如く其自然の山河の單調なるや既に人類の發展に妨害あり加ふるに大陸には必ずや大國の發生すべきものなれば一度大陸の野心家よして其毒手を海島に延さんか自然の道程として韓半島は其蹂躪する處なるや必せり我日本の如く自然の膨脹を許さば是亦大陸經營の一着歩として此地に其巨腕を投すべきなり史上の興廢統一政治の有無固より其文化の發展に影響すべしと雖も自然の風土の單調は所謂邦家よ要する組織的原素の欠乏を來し其影響の及ぶ處人心無形の重要部分を侵襲し遂に左顧右盼今日の境遇に達す朝鮮人や自然の命運なり假令日本をして古來此地にあらしむるも其結果多きを加へんや蓋し人間に境遇あり運命あり遺傳あり其天職に多數の差異を來す如く國亦自然の黙約天運あらざるや只文明は其自然力を利用して變形し勉めて意識的勉力を以て其自然を善用するの外なきのみ

韓國漫遊や實に隨見旅行なり飛脚的大觀的旅行なり爲めに「現今」の韓國を見るに急にして過去との關係史的研究の如きは殆んど手を下す處なかりき若夫れ來を察し過去を思ふて精細なる研究旅行をなすが如きは我境遇の許す處ならんや願はくは再遊を期して其所志の萬一を果さん



九州之部

五月十五日雨、前夜來雨あり風あり海上平穩ならせ朝鮮海峡の風濤渡韓當時よりも大なり婦人客の如きは大に苦しむ午前六時六連島に達す碇船一時間檢疫官來る甲板上に整列して健康診断を行ふ七時過る頃馬關に入る直ちに短艇よて九州門司に渡る門司は昔への文字が關趾にて九州鐵道の起点を茲に置しより新たに開けたる大港よて石炭輸出よては其名海内に鳴る處なり東西九町南北二町の狭少なる市街にして其雜沓の様馬關に譲らず直ちに瀛車にて宇佐に向ふ時に午前九時卅五分なり韓山の雲影未だ眼前にありて身は既に緑山青水の我九州に入る轟々又轟々小倉、行橋、中津、等夢の間に過ぎ午後一時十五分忽ち宇佐の入口長洲(宇佐驛)に着、長州町は宇佐郡の東北驛館川口あり豊州線の終局停車場なり是より車行二里にして有名なる宇佐町に達す人口約三千五百町内中學校郵便局等あり八幡宮の爲め發達せし小市街なり産物としては穀物、生蠟、生絲等あり此地九州著名の大社なれ共賽人の繁昌する点より言へば到底金比羅、成田等と比すべくもあらず成田の繁昌の如きは一つには東京に近き原因するとするも金刀比羅の如きは地理の不便に關せず夫れ自身の繁昌を有し其福々しき日本第一ならんか従つて市街の整へる旅舎の廣大なる祖廟伊勢神宮に劣らずと言ふべし海國の日本と金比羅水難救濟事業の如き益々其勢力増大するなるべし此地八幡宮は弓矢

の神源平時代にふさはしき神社和氣清磨の事蹟を以てするも大宰府天満宮の繁昌たる
 奪ふ能はず神社の繁昌は一方國民思想の方向をトすべく宙に地理の僻遠交通の便否の
 みに因らざるなり見るから昔のまの寂しき街路草茅の屋根行人稀なる神社の附
 近街頭商店始んど皆無人力車全市を通じて僅かに兩三箇言語未だ東京辨を融合せず
 まだ見ぬ」を「まだ見らん」と言ふ如き「聞かんとゆふに」を「聞かんちちゆ」と言ふが如
 き「雲の上から」を「くもん上かり」言とせて「言はせちゆ」「引きぬきて」を「とたび
 きぬいしじ」「蹴破りて」を「けあしーじ」と言ふ如き方言の異様なる真個は別乾坤の思
 をぞする左れをこは物質的文明の發達したる点より比較したる見解なれど更に心を靜
 かふして身を奈良朝の昔しに置き清磨公を配し平家物語源平盛衰記を讀み來れば街頭
 の幽寂は附近火山的奇絶の峯巒を調和し草葺の家屋社殿の古雅宛然一編の土佐繪巻物
 を見るの感ありなまぞいに常世流に變らぬ處ハイカラ式に遷らぬ所是れ宇佐の宇佐た
 る神境ならんか、八幡宮前みつ屋に投宿す

五月十六日晴、午前七時宇佐八幡宮に詣り社殿は字龜山と言へる丘山より官幣大社
 にして祭神三座社殿三字あり第一殿は應神天皇、第二殿は比賣大神第三殿は神功皇后
 なり第一は和銅五年第二は天平三年第三は弘仁十一年の創立とす華表建物境内に立列
 なり石燈層社道を装ひ鬱蒼たる樹林頗る大規模境内総坪數三万八千四百十二坪餘例祭
 の三月十八日其他一年八十餘度の祭禮あり中にも儀式の盛大に參拜者殊よ多きは鎮疫

祭(舊曆正月三日)春祭冬祭(舊二月十月酉の日より卯の日迄七日間)御田植祭、御祓祭
 虫振祭仲秋祭等とす傳へ曰ふ欽明天皇二十一年冬菱形池の邊民家の子三歳の時神託し
 て云ふ我は是人皇十六代譽田天皇なり是によりて豊前國に鎮坐す云々案するに大
 本國一宮記に宇佐宮應神天皇、比賣神、大帶姫香朝宗廟とあり延喜式神名帳頭註に八幡
 三所は一八幡、二比女神、三大帶姫也、豊前國宇佐郡菱形山廣幡八幡大神、坐郡家東馬城
 峯頂、復亦人皇四十五代聖武帝御宇神龜四年、就此山奉造神宮、名曰廣幡八幡大神宮、と
 あり然れ共八幡、太神の何人なるやは明瞭ならず古來八幡は應神天皇と定まり居れど宇
 佐の地は書記に宇佐津彦等の神武天皇を迎え奉りし事あれど應神天皇は何の因縁あり
 や思ひ當らず栗田先生の古風土記逸文豊前の條に田河郡鏡山は氣長足姫の登り給ひし
 事見也或は宇佐邊にも何等かの因縁あるか左れど豊前國風土記に鹿春神が新羅より來
 りしを載せ續日本後記に承和四年十二月太宰府言、管豊前國田河郡香春岑神は辛國息
 長大姫大目命忍骨神豐比咩命是二社云々とあり忍骨命の忍穗耳命なるは論なし豐比
 咩命は蓋し忍穗耳命の嫡后にて古事紀の萬幡豊秋津師比賣命ならん然らば大目命との
 誰ぞ延喜式卷十豊前國田川郡三坐としたる順序には大目命第一忍骨第二比咩命第三な
 れば大目命は蓋し忍骨の母后にて比咩は嫡妻なるべし此三神の關係は恐らくは八幡三
 社の關係あむらさるか八幡三社の内第二の比咩神は何人によ應神の忌妃か箱崎八幡三
 社は一、應神二、聖母三、甕門とあり廿二社註式石清水八幡宮三坐式外三所内男修一女

体二として注す神功皇后玉依媛とあり玉依姫は神武の后にて其三社配合自然と近からず若し此比咩神が豊比咩命なれば息長大姫を母と見て氣長足姫に比し忍穗耳を八幡に比して見ば如何母子三人の關係極めて妙ならずや余は茲に於て八幡太神の忍穗耳尊なるかを思ふ者の一人なり神武天皇駐驛の地として其先祖を茲に祭るは來歴上あり得べき事なればなり吉田東伍君の説は如何なりしや地名辞書を所持せざれば記憶せず多分忍穗耳命なりしかを思ふ餘白なければ細論せず境内の建造物とは本殿三社の外は申殿渡殿廻廊御湯殿南中樓門西中門北中門東中門休息所神馬舎能樂堂繪馬堂等あり寶藏神輿庫御守所高倉解除舎頓宮等あり其昔の盛大さこそと思はれたり境内二隅に旅舎數軒あり名物に「あめ」あり只神境の幽靜に伴ふべき掃除の届かざるため且は目下小學校の一部を茲に假設せしめて聊か不潔の感ありしは神威をけがすと云ふべし龜山の一部に和氣公の建碑の計畫ありしも雨後の事として行見す午前九時更次腕車を飛ばして前日通り宇佐停車場に至る此地方は見渡す處多くは檀の木を植ゆ畑中見ゆるもの皆是にして日本國中九州を第一とする由なり所謂木蠟の原料にして大坂以西は大梅を經過せざるものを新實と稱し經過せるものと「直り」と稱す而して古實とは一ヶ年を經過せるものなり製造法は土地に従ひ多少不同あるも通例檀實を蒸釜の中に敷きたる麻布の上に入れ蓋をなすして之を蒸し壓搾器の鉄鉢中へ敷きたる株欄製の袋へ移

し押石を載て楔を絞め蠟分を流出せしむ之を生蠟と稱す晒蠟は生蠟に灰汁を混し解かして水中に流入せしめ生蠟を小粒となし日光に曝し一週間を経て又灰汁を混し更に十日間太陽に曝して製す晒し畢れば之を熔解し模型に注入し四角なる塊となすと云ふ午前十時卅分發車中津に至る車中見る所の南方の山岳多くは奇形宇佐郡速見郡の間に在る鶴見岳由布岳等を初めとして活火山或は消火山の連嶺東西に連亘し山勢奇拔形白雄大を極む中津町は元奥平氏拾万石の城下として初め天正八年黒田氏に屬し慶長五年細川領となり寛永九年より小笠原氏領となり享保二年奥平大膳大夫昌成の有となり以て維新の際に至る奥平氏は三州長篠城主奥平九八郎信昌の後なり市街は下毛郡山國川の東海岸より人口一万五千商業頗盛なり有名なる福澤翁の出身地とす町の西南端にて腕車を賃し山國川の東に沿って耶馬溪に向ふ新道開鑿中にて道路極めて險惡余の旅行中第一の惡道路を思へらく花剛岩地方は其土砂多くは全岩の蕚爛したるものなれば其道路の修繕亦此細砂を利用し足當り極めて妙中國地方の道路是なり河亦磊砢たる巨岩少く悠々通らす淺砂舟を通するに難きものあり是に反して新火山地方は磊々たる巨岩怪石多くは土砂概ね堅實所謂土砂にあらす砂礫なるもの多し爲めに我信州の如き惡道路を以て天下に鳴る大分縣や亦新火山岩地方にして耶馬溪に至る處の如き新道開鑿中の迂回路に至りては殆んど道路と言ふ可からず途中鶴居眞坂を経て東成井(樋田)に至る道程五里餘一小驛をなす郵便局あり山國川の水稍青灰色を帯びて日光

大谷川の如く晶明ならず余は所謂耶馬溪の勝區を懐かざるを得さりき更に進む事一里道漸く奇山漸く怪新火山岩の斷崖は川の兩側を壓し來りて河中更に怪岩奇石を點出し水は東に又西に流れては激して飛沫玉を散せしめ止まりては深淵水渦を生ず落ちて瀧となり走りて瀬をなし奇巖峭壁迅流奔湍縱横に紆曲す火山岩の特相益奇を極む道路は凝灰岩層の川に逼る處を鑿開し忽ちにして暗忽にして明暗き處は天魔の杖能く人馬の行通堪ゆるに驚き明なる處は溪流に翠綠と碧潭とを見る山容樹色變幻異態名狀すべからずトンネルを出入すること十數回附近の光景確氷峙より妙義山を望むが如し只彼は山上高き處に奇形を示し是は溪流に沿へたる道路の兩側にあり既にしむが如し只彼は山中の第一勝區とす旅舎二あり民家三四あり羅漢寺より來る所の小溪は玆に山國川に合して四方稍開く耶馬橋を玆に架す橋畔に立ちて四方を觀望するに水蝕作用の原因する斷崖絶壁妙義の旭岳附近に似たり直立して天を摩する如きもの伏して深淵を伺ふが如きもの或は坐するが如く或は走るに似たり此間老松の岩上に立つあり密林の岩側を蓋ふあり翠巒は遠く屏障となりて怪岩は近く眼前に逼る山陽ならざるも其勝區たるは異巖なし山水の奇傑なるより見れば正は支那の北宗畫か是を邦人畫家の内より求むれば雪舟流の支那山水なるものか然れ共思ふ山陽の文やあまりに大に耶馬溪の風光聊か過賞に失せずや余嘗て妙義旭岳の絶嶺を攀ち陰かに其自然が鬼斧を弄するの極盡せるを感じき今青村に來り羅漢寺に詣て所謂天下の絶勝なるものを見るに地

山國川上流守實地方
ヨリ遠く西北方英彦山ヲ
望ム

溪間鬱々蒼々名谷皆是
杉林ニテ陰森トシテ植林ノ
好模範ヲ示ス山國川水流ノ多
量ナル所以



守實村

大谷川の如く品明ならず余は所謂耶馬溪の勝區を疑はざるを得ざりき更に進むと
 一里道漸く奇しく山漸く怪しく新火山岩の斷崖は川の兩側を歴し來りて河中更に怪岩奇石
 を點出し水は東に又西に流れては激して飛沫玉を散せしめ止まりては深淵水渦を生
 す落ちて龍となり走りて潮をなし奇巖峭壁迅流奔湍縱橫に紆曲す火山岩の特相益奇を
 極む道路は凝灰岩層の川に逼る處を鑿開し忽ちにして暗忽にして明暗き處は天魔の大
 枝能く人馬の行通を越ゆるに驚き射なる處は深崖に翠練と碧潭とを見る山容樹色變幻
 異態名狀すべからずトンチルを出入すること十數回附近の光景確氷峠より妙義山を望
 むが如し只彼は山上高き處より奇形を示し是は溪流に沿へたる道路の兩側におり能にし
 て青村に達す溪中の第一勝區とす鎌倉二あり民家三四あり羅漢寺より來り所の小瀧は
 並に山國川に合して四方稍開く耶馬橋を建て架す橋畔より立ちて四方を觀望するに本領
 作用と原因する斷崖絶壁妙義の旭岳附近に似たり直立して天を摩する如きもの伏して
 深淵を伺ふが如きもの或は坐するが如く或は走るに似たり此間老松の岩上に立つもの
 密林の岩側を凌ふあり翠巒は遠く靡靡となりて怪岩は近く眼前に逼る山國ならざるも
 其勝區たるも異態なし山水の奇傑なるより見れば正に是支那の北宗畫か是を邦人畫家
 の内へ來むれば雪舟後之支那山水なるものか然れ共思ふ山國の文やあまりに大に耶馬
 溪の風光聊か過賓に失せずや余嘗て妙義旭岳の絶嶺を攀ち陰かに其自然が鬼斧を弄す
 るの極盡せるを感しきや青村に來り羅漢寺に詣り所謂天下の絶勝なるものを見るに地

大谷川

一五〇

山國川上流守實地方
 より遠く西北方英彦山ヲ
 望ム
 溪間鬱々蒼々名谷皆是
 杉林ニテ陰森トシテ植林ノ
 好模範ヲ示ス山國川水流ノ多
 量ナル所以



守實村

や、稍風水稍清からず、妙義の上、駕するの、借越なるを思ふ、妙義や白雲金洞金鶏の三山を
跋渉せんか其豪壯雄大豈耶馬溪の下にあらんや青村に山國屋あり唯一の旅舎とす余は
耶馬橋畔の來青舎に入りて眺望を肆にし次で耆闍崛山羅漢寺に詣す曹洞宗なり天然の
岩壁自然の妙區一步は一步より危く山の中腹倒れんとする如き處羅漢寺あり窟中五
百羅漢あり是を無漏窟とす甘露水此窟中に涌くうれしともうれし本堂の後背部より暗道
あり賽者の請ひによりて一巡するを許す然も寺院や多く人工の妙を見るのみ恰かも長
野のプラン堂の奇なるが如し此地一の耶馬溪燒なるものあり吉村左樂なる茶人の創製
する處にして黒元を吉村松月園とす風流雅趣好個の紀念品たり夕食後紀念品を購ひ傍
ら何とやらん武裝せる二人の勇ましき舞樂をとある村社の拜殿に見て來青舎に一泊す
旅舎は山國屋を宜しとする由なり

五月十七日晴、午前八時青村を發し山國川に沿ふて更ふ上流に進む道路頗るよし青村
程の景はなけれど所々小絶壁をなし小勝區をなし旅情を樂しましむるよ充分なり城井
村大字戸原、城井村大字柿板(山陽の投筆の名所)等の勝を探り下郷村大島より三郷村
守實の山口屋に達す行々杉林の頗る能く生育するを見る蓋植林の盛なるを見る山路時
どしては狹隘兩岸相逼る處一町も満たざる處あり時正より正午なり行程六里人力車通ず
守實は山間の一小村落風俗淳朴なり宿料低廉侍過懇切客室清潔余の旅行中唯一安價の
一旅舎なり此地より豊後國の西端日田郡豆田驛に達する街道にして山陽の耶馬溪記に

「既經二肥薩隅遠寓豐後隈邑、臘月五日入豊前」とあるもの即ち是か「今馬溪百里如妙義者不知幾十峯謂之海内第一或不誣也」と云へるもの其長程約十里行程に於て妙義より大なるものは即ち有り然も青村附近の外特は絶景となすに足るものなし抑も余の凡眼なるが爲か將た山陽の明文或は實に過ぐる爲か其光景の豪放奇抜なるは固より異論なき處なり午後の時間は前途の行程不便の爲め宿所の都合上茲に一泊す溪聲の潺々たる間遙かに英彦山の異容を望む

五月十八日曇、午前七時守寶村を發し更に山國川の上流に遡る吉野村を過ぐる頃より水稍清く密林徑路を覆ふて山岳重疊前途人家なき處あり約四里にして槻木村に達す山國川の上流中、極端の村落なり是より路只一人の通行に堪ふる程まで溪水を横さる事四五回固より橋梁なく徒渉して進む羊腸たる山路崎嶇たる經路をたゞれば山益深く道愈急なり潺溪たる水聲は時に木の葉を揺る風音と和して獨り旅路の寂漠を感ず此間約二里遂に行旅一人だも行合はず兎角して峻坂を攀ぢ絶頂に達す時正に午後一時彦山川と山國川の分水嶺なり頂上は空濶樹木なく西南英彦の秀峯を望み西北福智山帆柱山(豊前筑前の國境)の連嶺其他企救郡の諸山脈波濤の如く綿々一寸の空地なきが如し顧みれば東南亦山岳相重なりて守寶の方向は何れにや辨する由なし下る事約十四五丁右すれば津野、油須原道なり余は即ち左して彦山の東北麓豊前坊に達す豊前坊は所謂寒山口として高住神社あり神代杉の密林苔あくまで青く溪流一條晶明清冷神さびたる

社殿、水を含める青黒き石橋異個な俗累を脱するの仙境とす、一茶店あり然り唯一の茶店人家とては附近二二里の間は此茶店のみ盥鉢あり數杯を平ぐ佳味々々天下の逸品なり時午後二時はより三十丁彦山の頂上に攀ぢ難木密立する處溪流の迹自然のまゝの坂路一歩々々兩手を以て岩角を支へ樹枝を頼り三步一休五歩一憩見上れば陰森固より道路の痕跡だもなし只おぼろながらに一條の間隙あるのみ傾斜頗る急恰かも富士の胸付八丁か加ふる靴足なり呼吸逼迫身体綿の如く疲れ午後四時漸く最左翼の一峯に上りて熊笹全地を覆ふて身を没する處一小石祠あり系の如き細徑を下る事約十數町更に上りて巨岩の間をくゞり遂に彦山の山嶺に達す時に一人の「鳥さし」あり双肩に五六の鳥籠を擔ひて平然たり曰く毎日の如く此地に遊ぶと余は一生懸命の仕事なりしよさて世の中は萬事が「馴れ」にあり傍らに天地を我物顔に四近の塵埃盡く吸盡さんず勢なる高きをなせる男あり(力餅)を賣る、其不味言はん方なし今日は余と共に三人の客ありと何ぞ悠々たるか英彦山上に研聲雷の如く「力餅」一日賣却する三個是を東京大坂の俗塵に比す眞は山中僧はなし毀譽敢て耳邊に至らず「世間適意誰如我」の感なくんばあらず、彦山は海拔千七百七十米突豊前田川郡豊後日田郡筑前上坐郡に跨る新火山岩を以て構成し絶頂は三個の奇抜なる秀峰となる官幣中社英彦山神社は中央の頂上より山上の社殿にして壯嚴斯の如きを見るは余の知る處にては他に其例を見ず祭神正哉吾勝々速吳忍骨尊相殿神は左に伊佐那岐右に伊佐那美命を祭る本殿建坪四

十六坪三合屋根は銅尊百四十八坪五勺上古は單日子山と稱せしを嵯峨天皇の勅より彦の字に改め靈元上皇の勅よりて更に英彦の字となしたり本社周囲は杉材能く發育し他の山嶺の只怪岩の磊々たるものと其趣を異す西南峯上三角測量標あり標のある所を下る數丁有名なる材木岩あり其成生の原因は火山附近に普通の現象なれば言はず頂上の眺望極めて濶大肥後阿蘇山の南なる馬見原町、北福智山等を望見し得べし本社より下る三四丁御供所あり産靈社あり神水あり三の鳥居あり更に十數町まで中津樓等のある處を過ぐれば社務所あり是より稍人家あり彦山町是なり固より坂路の兩側四五の人家あるのみ町の人口一の鳥居あり即ち銅華表なり是より絶頂迄四十二町とす豊前坊へ三十町と云ふ午後五時油屋旅舎に投す待遇懇篤宿料低廉余は二ヶ月の旅行中耶馬溪と此地とを以て最低廉の物價たるを知る即ち此地が如何に活動社會に遠かり居るかを知るべし思へらく豊前豊後の境地山勢峭峻流水の浸蝕せし痕迹亦奇變を極む而して海光の特に碧藍たるに至ると蓋し水光山色と兩ながら天下に類少なからん豊州よ汝は番人を出さる可からず詩人を生まさる可からず思想の人を生む正に汝が天職たるべし否過去に於て既に其徵候を見る未來亦正に如斯なるべし

望彦山、
 彦山高處望氣紙、木末樓臺晴始分、日暮天壇人去盡、香烟散作數峯雲」
 廣瀬 淡窓

南豊途上、
 雲烟縹渺匝仙鄉、一路南薰草木香、風景豊州最奇絶、海波山色兩蒼々」
 伊藤 春 詠

耶馬溪、
 撥磔疊嶂盡奇饒、造物應緣着一凡、爭得雲梯三百丈、乘風飛上万巖巖」
 齋藤 竹堂

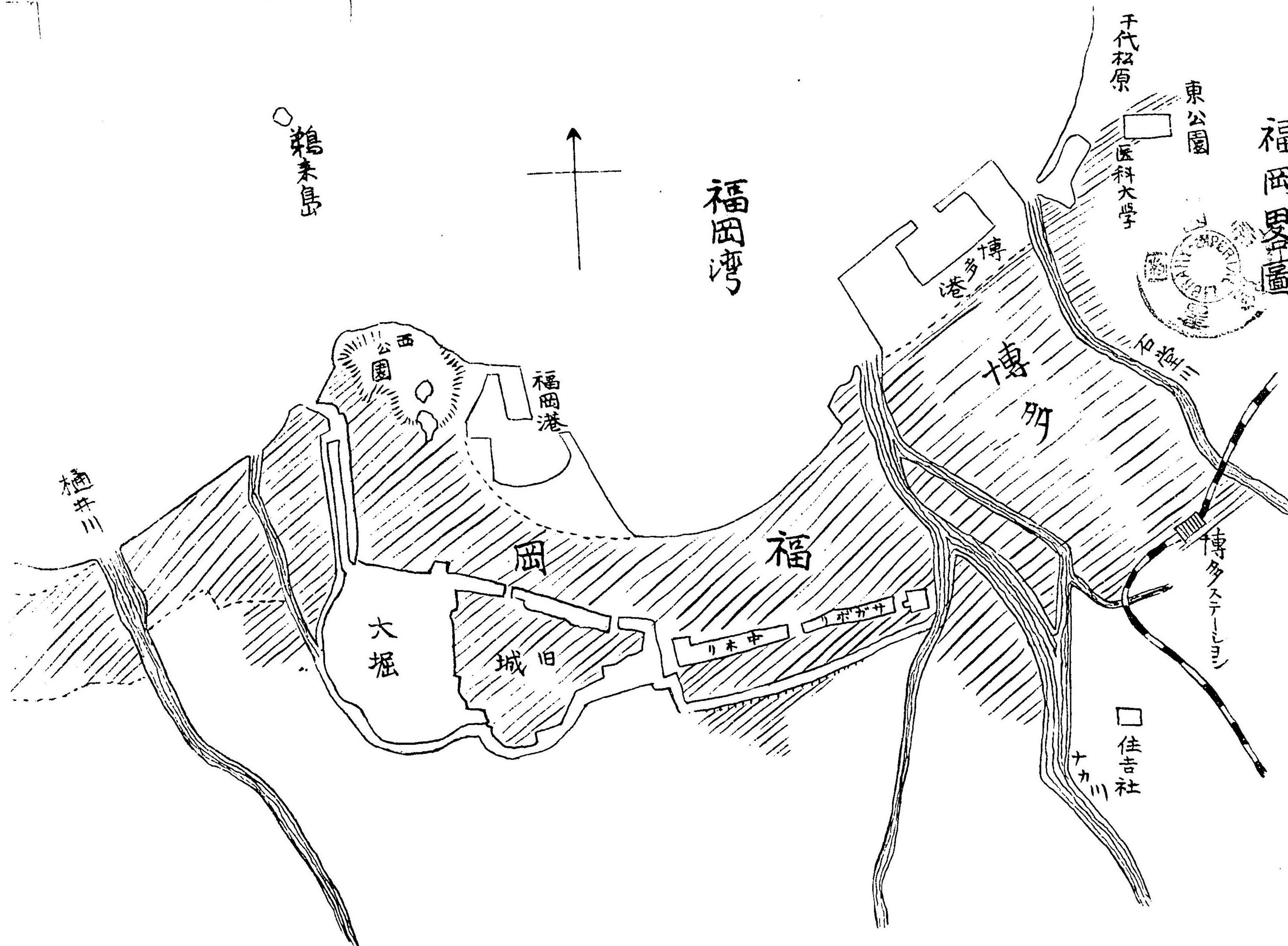
人間慣見作尋常、絶勝誰知屬此鄉、大息江山絶知己、重泉欲喚老山陽。」
 全 上
 梁 星 巖

山靈盤薄意難測、欲出變機誇與人、青倒碧奔攔不住、峯々忽作亂柴數、」

五月十九日晴、午前七時彦山町を發し羊腸たる坂路を下り彦山川に沿ふて走ること三里増田を経て添田停車場に達す此日暑氣甚しく全身流汗淋漓たり固より人力車なし道路は稍よし添田は豊筑炭田の最南炭坑地として煤烟天を蓋ふて工業の盛大を思はしむ停車場より晝食し午後一時五十分發炭田地方を縦貫して折尾に向ふ沿道の停車場悉く炭坑所在地として九州鉄道の此地方を通ずる蓋し炭坑を主とするもの川崎、後藤寺、伊田直方至る處の停車場規模廣大真個に人意を強よするに足る此地方にて有名なる炭坑は筑前の大辻、大の浦、新入、餘田、大城、豊前、田川郡の金田、小松、豊國、大鏡峯地、伊田、赤池、筑後の三池、肥前の芳谷等として肥前の天草までは無煙炭坑あり盛なりと言ふべし夫れ石炭は古代植物の地下に埋没して空氣に觸るゝことなく徐々に自然の分解を遂げて生せるものにして植物性物質の成分たる水素酸素の多くは揮發性の化合物となり

て飛散し其炭素は泥土と混して殘留し壓力の爲めに凝固して石炭となれるものなり今此鐵道によりて若松港へ搬出する石炭の状況につき大畧を記さん各坑より若松への送量は毎日一万二千噸(水陸兩端)なるも昨今は漸く炭積船も運賃の引上等にて充實したるの觀あると共に船より船への荷役大に頻繁を加へ從て若松の貯炭は殆んど皆無なり九鐵會社の運搬上に關係を有する筑豊五郡内の各坑所貯炭高は二等炭を除き約十三万噸なり而して各坑の毎月採掘額は三十二万噸餘にして九鐵會社の運搬力とは稍均衡を得たるもの、如し各坑所の状況は現在の設備と坑夫の缺乏其他の事情に於て是以上の採掘は暫く不可能の事たるのみならず追々梅雨の時季に際し排水量は増加し一方坑夫の缺乏等にて先づ當分の間は從來より一割方減少の見込あり斯は炭價の昇騰にも拘はらず殆んど毎年の例として見ざる可からず又當地炭價の趨勢を見るに唐津石炭會社の如き一万斤に付下の如く引上たり一等塊炭四拾圓一等全二十九圓三等分二十八圓一等赤炭三十圓二等分廿九圓五十錢三等全廿九圓一等粉炭二十二圓と以て九州地方石炭市場が現今如何に活潑なるかをを知るを得ん地は東洋の諸港灣に近く搬出亦頗る便將來滿韓兩の經路運賃の低廉産額の大其繁盛を知る可きのみ日本人の惰性或工業を起すに稍もすれば自己の郷里に於てせんとするものあり九州や北海道や眞個に天然の工業地加ふる東洋市場に奔馳するには其交通の便否運搬費の多少等充分なる注意を要す折尾驛に達せしは午後五時過ぎ更午後六時廿一分博多より向つて發す遠賀川(彦

福岡界圖



山川と直方に會し下流は蘆原に注ぐを渡り赤間、福岡、古賀等を経て香椎に至る。大社香推の宮は東方四丁にあり神功皇后外二体を祭る立花山近く東に聳え名島の翠色を西方に臨む博多灣鉄道此地より分岐す開く博多灣の北志賀島に連續する一帯の沙洲の中央南に向つて西戸と稱する處あり海水深く博多港に比して大規模の良港なり。と近時博多灣鉄道なるもの此西戸に連絡し南宇美に至る此鉄道と此良港にして奮勵熱心以て經營する處あらば若松港の繁榮の幾部博多港繁榮の一部を吸集して將來有數の大港と發達するやも知る可からず箱崎吉塚あたりより西方一帯海濱に松林あり有名なる千代の松原東公園は即ち是れ園中元寇紀念碑立つ湯地火雄氏數年苦心の結果よて日連大師龜山天皇の銅像松林中に屹立し鐵道線路より優に望見するを得福岡醫科大學亦此地にあり博多に著せしは午後八時二十分なりき川端通り明治館に投宿す

五月廿日曇、後雨

博多市及福岡市

博多市は筑前國福岡灣を面する九州の一大市街にして東は石堂川を以て千代村（商業學校有）豊平村（東公園、千代の松原、福岡病院等あり）と境し西は那珂川を以て福岡市に接す東西約十町、福岡市は東那珂川より樋井川の西「西松原」に至る間にして東西約一里兩市合計人口七万七千餘九州第二の大都會なり

福岡は黒田氏五十二万餘石の舊城下なり黒田氏は宇多源氏佐々木源三秀義六代孫黒田

左衛門尉大夫判官源宗清の後なり宗清江州伊香郡黒山邑を保つ七代にして重隆に至る孫孝高(如水)孝高子長政とす慶長六年長政福岡城を築き以て維新に至る是より先慶長五年長政此國を領し十二月十一日入國し天正十五年小早川隆景が築たる糟屋郡名島城に居たりしも此地邊隅に片寄り城下狹隘して治世に便ならざるを察し父如水に謀りて慶長六年警因村の境内福岡と云へる處に築きたるもの是なり今の佐賀堀の在處は鍋島直茂の助力せし所とす又國中に端城六ヶ所を置く大隈城(嘉摩郡大隈)高取城(鞍手郡)左右良城(上坐郡)黒崎城(遠賀郡)若松城(全上)是なり大坂陣後元和元年台命に依て其五城を破却す左右良城のみ依然たりしも寛永九年七月九日城主栗山備後豊前へ立退きし後は肥後八代仙臺の白石の如く城番を置きしか破却せしかを明かふせず次に福岡城と名つけたるは長政の先祖右近太高政下野守重隆父子備後國邑久郡福岡の人なれば其本を思ひ出でたるなり長政の子忠之のとき弟長興に五万石を分配す筑前夜須郡秋月藩建なり舊城は福岡市の中央にて今陸軍營所第廿四聯隊の所在地たり東中、佐賀堀等を以て那珂川に接続し西の大堀を以て菰川に通す市の西端西松原に近く中學修猷館あり九州中學中著名なるものとす大堀の北福岡灣に突出する處西公園あり一小丘上にありて近年の開設よかゝる未だ園内の設備全からざるも眺望は市中第一とす北西方福岡灣を隔て、元寇役よ名高き志賀島殘島の翠巒を望み鶴來島近く眼下よあり那珂川の海に入る處舊城綠林の間よはのみゆる處悉く一顧の價あり公園の東海岸よ福岡港あり埋

築地を以て新市街地とし船舶の碇泊よ便なり博多港埋立地新市街(五万坪)と相對し福岡灣頭の良港とす博多織蠟燭等を此地の名産とす今博多と福岡と繁盛の度を比較する博多は人馬雜沓商業活潑眞博多商人の名に背かず福岡は士族風にして街頭人馬の往來多からず何となく裏町の觀あり商業上より見るべきは福岡は博多及びばざるや遠からん博多大字住吉に住吉社あり底筒男命筒男命表筒男命を祀る久米邦武氏嘗て住吉社は委奴國の祖神を祭りたるものにて後世の筑紫國造盤井なるものは綿積國海神住吉神の裔孫なるべしと論せらる住吉社のある所と新羅、博多豊浦墨江と外國船出入の要津を指して必ず鎮坐す博多は元當社の境内たりしならんといふ神功皇后征韓時代の香推宮文永弘安の元寇大宰府の門戸として古より海外の交通多く志賀島より掘出せる漢委奴國王印の如き其海外交通の由來久しきを証するよ足るもの少なからず午前九時福岡城北魯兵の捕虜一隊雨を侵して福岡城に入る我見る余は疊に天津の三井寺よ同一の事實を見今又元寇紀念の地神功皇后三韓征伐の古蹟に此事實を見偶然と言は言はん余よ取りては其配合の妙を想像せずんはあらず午前十一時博多停車場發大宰府よ向ふ午前十一時三十七分二日市着直ちに下車して更に鉄道馬車に乘し大宰府天満宮よ參拜す

大宰府

二日市驛の東北一里よあり贈太政大臣正一位菅原道實公の廟所なり公は天穗日命の

苗裔にて是善公の第三子なり幼ふして顯悟容止閑雅にして威徳あり長するに及んで忠愛五朝に歷事し官右大臣ふ進み萬機を司り裁決流る如く綱紀振肅し人其風采を思ふ延喜元年正月廿五日讒より俄に大宰權帥に左遷せらる同三年二月廿五日大宰府榎寺の寓所に薨去し給ふ遺命により天原山安樂寺境内に奉葬す今の神廟是なり同五年八月十九日味酒安行假々祠を建て香火を供す此年安行に勅して祠廟を創設せしめらる同十九年藤原仲平詔を奉し神殿造營の事を奉行し十五個年よして竣功す今の神殿は天正十九年筑前國主小早川隆景の建立なり天曆中天滿大自在天祖の神號を下し賜ふ籠門山町の東北よ登ゆ雲霧深く烟氣の如く常に絶えず故よ名づく又御笠山寶満山とも云ふ山上籠門神社あり祭神神武天皇の御母玉依姫なり大城山、町の西北よあり天智天皇四年八月筑前國大野及び椽の二城を築き給ふ昔は大野郷に屬す故よ大野山といふ山上城を置たるより大城山とも云ひ其後四王院を建立せしより四王寺山の號あり西北の高峯を鼓が峯といふ大城ありし時軍團を置て鼓吹を調練せし所火の尾といへる峯あり同時よ烽燧を置かれし所あり

觀世音寺

(萬葉) 坂上朝女

其南よあり清水山普門院觀世音寺と號す齊明天皇の御爲め天智天皇の建立し給ふ寺なり往古鎮西第一の大刹ふして四十九院あり堂宇の壯麗なりしこと帝王七代年曆七

十餘年にして落成するを以て知るべし奈良朝の頃天下よ三戒壇を置くや此地其一たり康平二年五月堂宇廻廊悉く燒失す治暦二年十一月廿一日再建然れ共以前の十分一にも及ばず今の堂宇は元祿元年に建立せるもの菅公の詩に觀音寺只聽鐘聲と作り給ふは此寺なり又小野道風の額あり墨痕依然として板上よ隱記せり

都府樓趾

又其地よあり天智天皇の御宇始めて建て給ふ東西十四間南北六間大なる礎四十一個殘れり其礎何れも方六尺餘あり其南に大宰府官廳の趾及大門の趾あり大宰府は九州二島三韓唐土よ關する事を司り且つ西方の藩鎮として外國の要來に備へ非常を防ぐ爲に置かる故よ都督府又西都鎮西府とも云ふ此樓に用ゐし瓦は堅牢にして鉄の如し世人之を愛玩す菅公の詩に都府樓纒着瓦色とあるもの是なり今は明治四年七月御盤郡を金村大里正高原善七郎氏都督府古趾と題せる石碑一基を立つ其後明治十三年八月福岡縣令渡邊清太宰府の碑を建たり太宰府の西南二十餘町に榎寺と稱する處あり菅公左遷當時の寓所なり菅家後章の都府の南館と記したるもの是なり後一條院治安年中都督惟憲懷古の情に堪ぬす其趾を伽藍一宇を建立す今は頼宮となれり菅公茲よて作り給ふ詩歌を中納言紀長谷雄よ送らる菅家後章即ち是れ長谷雄之我見天を仰で歎して曰く藻志絶妙天下無双なりと

夕されば野にも山よも立けふりなきよりこそもえ増りけれ

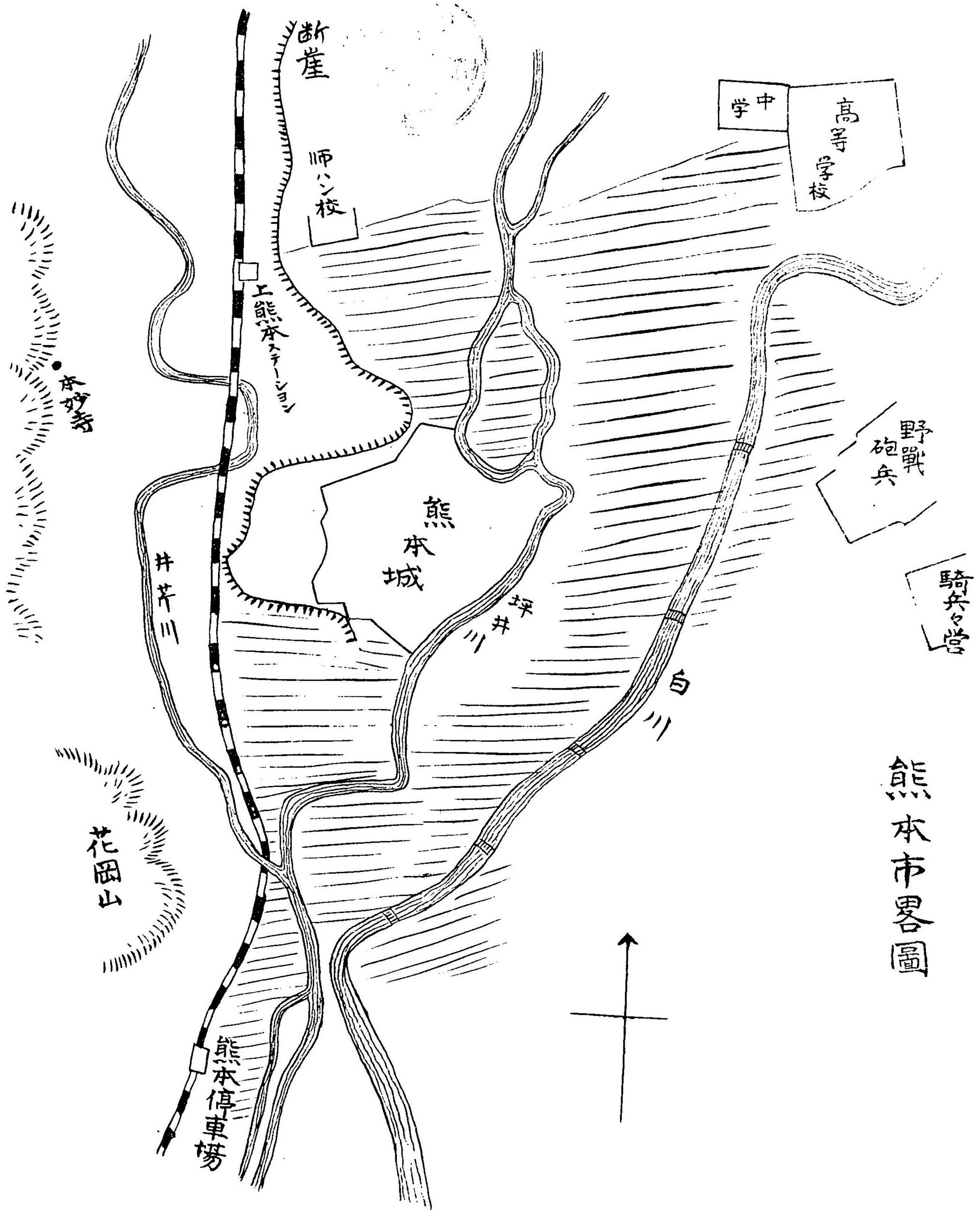
菅家

觀音寺の西に國分村あり水城村あり其間に有名なる

水城の遺趾

を存す天智天皇三年筑紫に於て大堤を築き水を貯へ名付て水城と云ふ是太宰府の要害なり東の堤長百九十二間西の堤長二百八十六間東西の間絶えて堤なき所百十三間堤の高さ五間根盤三十九間馬踏三間何れの時か堤の内は田と成れり文永十一年十月十九日蒙古の賊軍二万五千人水陸並ひ進み筑前博多に攻め寄せ水城に逼りんとす我軍是を討つ同月廿日大風起り賊兵溺死するもの一万三千五百餘人其他悉く遁れ去れり其後八年を経て弘安四年六月五日蒙古の賊又筑前國志賀能古島に至り勢に乗れ水城を衝き直ちに進んで大宰府を犯さんとす我軍水城の要害に據り防戦す賊軍進む事能はず閏七月朔日颶風大起り海水簸蕩賊船覆没十方の兵生て還るもの僅かに三人刃に血ぬらずして賊軍を塵とす

今や日魯時局攻守正に地をかへて大宰府境只梅花の馥郁たるを見るのみ大宰府は天潢宮を中心として左右巖然たる一市街發達す所謂人為的偶然的の市街にて金比羅の市街と成因を同じふず山間狹隘の地なれ共其旅舎等の廣大なる宇佐神宮等の到底及ぶ處あらず以て邦人崇敬の度と人心の歸向する處を印るべし日本人の菅公を崇拜するは其人格の高潔なるにも據るは勿論なるも冷かに過去の史上を觀察すれば失敗者に同情する人間の弱点も亦菅公贊美の一部の原因をなすもの也源義經の去て其跡を失するや歴



史の同情は遂に滿州愛親覺羅氏の祖先てふ傳説を生みき楠の敗死や如何に熱腸男子を泣かしめしかを思へ西郷南州翁の末路や亦一片同情心の後世に其形を現はしむべきは向國に陰匿するもの即ち是なりと由來人間の同情心の英雄偉人の末路の悲しむべきは向よを常とす藤原時平や或はあまりは鋭刀ありしなるべし菅公や少しく善人は過ぐるの欠点あらざるか左とあれ一偉人の勢力は此人口を吸集す真に神として畏敬するも足ると云ふべし

午后三時五分雨の内は肥後熊本に向ふ烟霧濛々遠近を分たす午後四時久留米に達す筑後川の鉄橋を渡りて須臾にして停車場あり市の西端なり人口約四万有馬氏廿一万石の城市たり有馬氏は本國播磨村上源氏赤松次郎則村十代の孫有馬中務大輔源則頼の後なり初め城主毛利家の小早川秀包是に居る慶長五年田中吉政全忠政來り元和七年有馬玄蕃頭豊氏此地を賜はり連續明治維新に至る久留米市を経過する頃より麥穂能く熟し黄金の浪は翠緑の群峯と相映し高良山の西南一帯平野廣漠蓋し第四紀層の發達せしもの筑前筑後肥後等は其米の産地なり九州地方の米は粒形長大にして立筋淺く米質堅硬よして外觀概して美なり即ち輸出向に適するもの歐米にしては單に米を煮て食するにあらず必ず調味料を加ふるが故に真正なる米の味を知るものなし唯外觀の美あるを貴むあり午後六時四十六分熊本驛着雨猶やまず

大宰府有感

頼 杏 坪

千里飛梅一夜松、土人迎客說靈蹤、坐來憶起當年事、落日觀音寺裏鐘

五月廿一日晴、午前七時より熊本市の巡覽を初む市は西方一帶金峯山の火山稜に圍繞せられ遠くは三の岳熊の岳平山岳の外輪山中央金峯山(海拔七〇五米突)の四周を回り近く荒尾山花剛山の小峯市の西側に聳ゆ北方は田原坂吉次越の險より東北堀川白川の流域丘陵起伏し南方のみ廣瀬田野能く開けて川尻町宇土町の附近緑川流域に連なる、白川の流れる市の東南境を限り是より子飼橋以下七橋を架して大江村本庄村等の交通を便にす中央より熊本城あり其東側は坪井川の清流北の方清水村より來りて停車場附近に至る井芹川上熊本停車場の西より城西を経て花岡山の麓に至りて坪井川と合す大體の區劃城の南北二部となる第五高等學校中學校師範學校は北にあり京都本國寺の末寺本妙寺は加藤清正公墓地の在る所荒尾山の東麓法性山にあり慶長十六年六月廿四日清正遺言して其遺骸を此地に葬らしむ同年十月令嗣忠廣靈廟を建つ寺院旅舍廟の左右に列なり宛然小市街をなす香花常に絶えず日魯事件の結果にや信男信女の「百度参り」「既参り」「南無妙法蓮華經の唱名」と和して其熱心其眞面目群集絡繹鬼上官の遺魂は滿州出征の兵士遺族をして遺般の渴仰の中心点たらしむ偉なるかな城北門外新堀町又錦山神社あり元々城内天主閣の下よりありしもの清正公神殿なり洗馬橋に電信局あり長六橋の南に公園地あり小規模なり野戦砲兵第六聯隊騎兵々營等大江村にあり細川侯元遊園水前寺成龜園は出水村あり境内幽邃泉水昌ぬ鎮西第一の遊園たり園内出水神社あり細川



温泉嶽方ヨリ望ム

侯の祖先を祭る植樹未だ完からざるも清幽の趣一遊の價あり余天下の名園を歴覽するに其泉水の清明なるは此成趣園を第一とす只惜むべきは植樹未だ充分ならず后部稻軍關は過ぐ即ち未成品を見るの遺憾あり城趾は中央の丘上より立ち西面は平地なるも斷崖ふして攀づ可からず形勢雄大鬼將軍の遺業眞に歎するに足る人口六万二千細川氏舊封五十四万石の城下なり天正年間豊太閤の島津氏を下すや佐々成正を此地に居らしむ后罪を得て此地は鬼將軍の有とあり關原役后史に小西氏の領宇土を領して五十五万石の大領主となる寛永九年六月清正子忠廣罪あり出羽の庄内へ配流せらる細川越中守忠利之に代る忠利は豊前一國三十七万石の領主なりしが此に至りて肥後一國は豊後の鶴崎を加へて五十四万石となりぬ忠利轉封の理由は明かならぬも小倉に於ける治績は以て其名聲を高め加ふるに忠廣配流后越中守轉封の風評都下に多かりしを見れば其才器人物慥かに大國の國主たるべき價値ありしなるべし細川氏は清和源氏義家四代の孫義實二男義季(三河細川)に住し細川氏を稱す曾孫細川頼春の後胤播磨守元常男兵部大輔源藤孝の后にして藤孝子忠興其子忠利即ち熊本城主たりし人なり正保三年弟立孝の子行孝より宇土城三万石を分つ寛文年中孫綱利宗家を繼ぎ綱利弟利重に新田三万五千石を分つ以て維新に至る

發熊本、

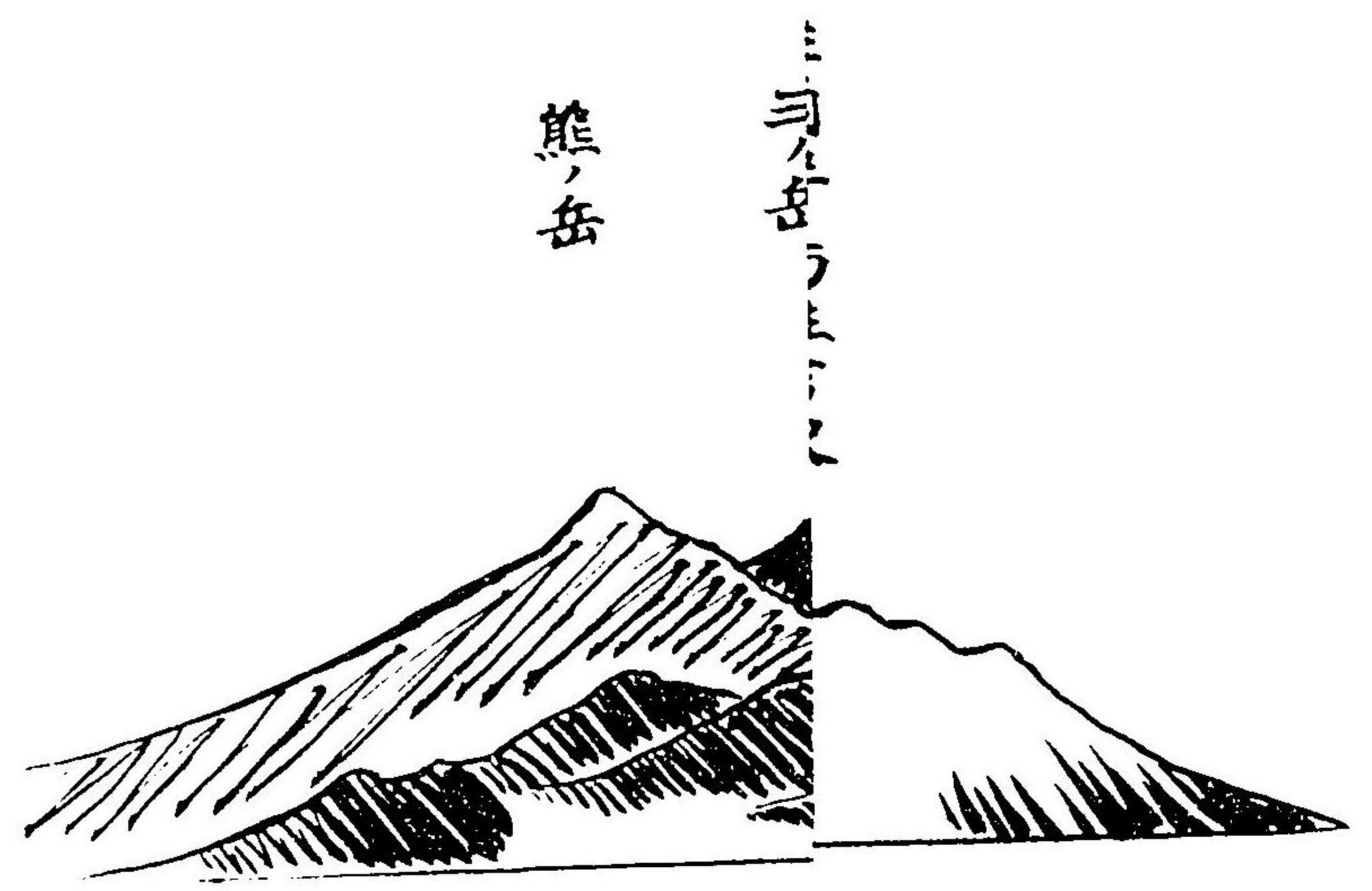
頼山陽

大道平々砥不如、熊城東去絕青蕪、老杉爽路無他樹、缺處時々見阿蘇。

熊本に遊んで先注意を惹くものを其形勢の雄大なることとす城や天下の名城なり鬼上官の遺跡たり東に阿蘇の秀峯遙か黒烟を天に沖し白川の流末洋々曲折して百貫石を注ぐ夫れ九州は自然の結果として徳川親藩を置くこと稀に譜代大名が關東の如き天然の境界なき小藩地に轉封又轉封席暖あるに暇わらず地方其勢力を植ゆるの歲月淺きには反し外様大名なるもの多きが上り地勢上大藩の形成も宜しく轉封亦頻繁ならず中には戰國以來其根據地を變せざるものすらありて山河の雄大を積年の恩威とは自ら豪壯の大勢力となり機を熟するや雲蒸虎號積年の滯蓄を發揚せざるはなし加ふるに地は大西の感化を受くるも宜しく時勢の變遷を逆睹する豈難しとせんや維新薩長の皇室に近づき奉りしは地勢の然らしむる處も亦大なりと言はざる可からず而して薩長の皇室に勢を比して稍熊本の一步を譲るの感ありしは亦地勢上海上の勢力に接近すること馬關長崎鹿兒島の如くならざりしに由るも一部の源因たりと言ふべし今や交通の機關備はる九州の中心点として人口多大鎮西學藝の中心点にして人口増加の要素を備へ根底ある素養ある文明を成就せんとす只一濟々發のみならずや横井小楠井上悟陰徳富蘇峯佐々友房あるのみの故ならんや熊本や單趣味の處にあらす

午后一時廿五分熊本發川尻宇土を経て三角に向ふ佐野驛に至る金峯山の連嶺海波一碧の上に現はれ風光快濶流車は天岳の北海岸に沿ふて走る筑後川の平野熊本の平野は第

四
三
二
一



熊岳

三ノ岳

(40)
167



熊岳

三ノ岳

金峰山

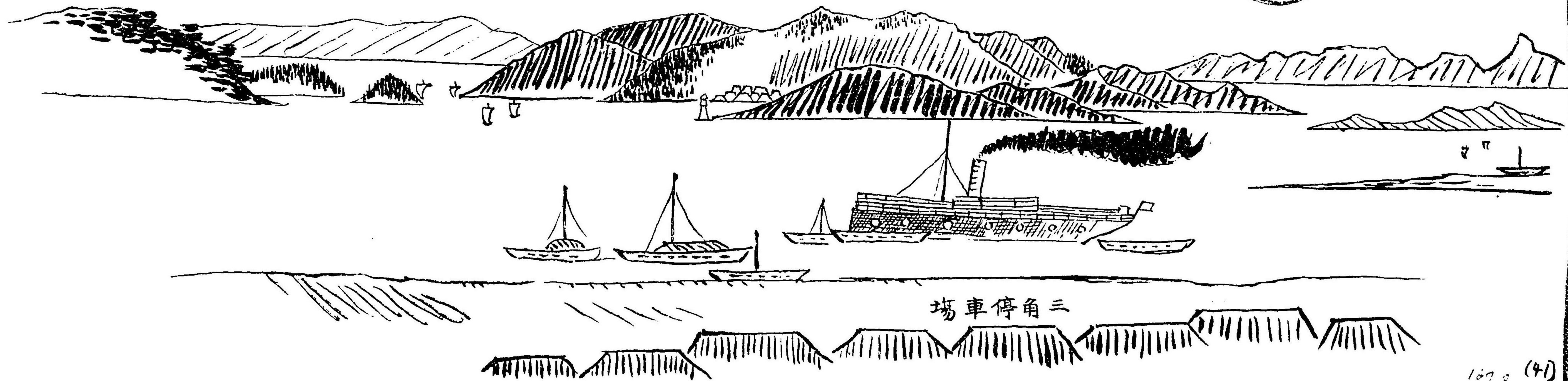
三角半島住吉駅
三ノ金峰山東ノ望



三角停車場ヨリ
南方ヲ望ム

大天野島

戸馳島



1672 (41)

風景粘板岩の層をなす處水蝕作用之に及ぼして波紋の如く雲影の如く層々其輪廓を重ね恰かも波線状の地貌を表す地質圖を觀るが如し」を、トを経て「トネル」に入り忽ち南海岸戸馳島の北水道に沿ひて進み午後三時遂に三角停車場に達す停車場附近は人家多からす所謂三角町は半島の西端にありて其間六七町を隔つ南面大矢野島戸馳島維和島の三島海面を圍繞し天然の良港にして風光絶佳なり只憾むらくは地域狭少熊本の門戸として東京の横濱に於ける廣島の宇品に於ける如くせんには稍狹隘にして市街の發達を沮害すべきか明治卅一年五月勅令第九十三號を以て特別輸出港と指定せらる附近に天然の炭酸泉湧出す一部は浴室に利用し一部は瓶づめとなし「ラム子」代用として販路を擴張中なり此地肥後汽船會社あり八代、天草、島原、口の津、長崎等の航海をなし行通自在なり午後十時發船との事故一茶店に夕食を濟し附近を散策し風景を撮影す晚景月色朦朧たり午後十時三角港を發し進むこと數十分微白色の斷崖の上黒線數條上より覆ふ如きもの縁り深き老松の浪よ伏すものなるべし形狀怪奇人の如く亦虎の如きもの恐らくは巨岩の波濤の間よ立つものならん忽ちにして前方遙か火光數点を認め忽ちにして暗く忽ちにして明く進むに従つて燈火千百海岸をかざる燈着たるが如き山脈一帶の人家あり三角町是なり燈光波に映して海風冷かよ面を吹く一小舟あり客を携へて我汽船に至る月色猶微人聲明徹山岳反響す少しく時間早がりせば山陽の所謂万里泊船天草灘、烟横蓬窓日漸没の景を見得たらんも惜むべし三角町の西端に一岩島あり

り大矢野島の北端と相對して三角港の海門をなす燈明臺山脚にあり船は其間を通過す小汽船の爲にや波浪漸く高し半夜夢覺來れば風風きて船進まず淡雲月を覆ふて海色暗し乗船客多し口之津にやあらん

五月廿二日晴、清曉霧晴れて青數点を北方に望む既にして香燒島を西方に見る船は深堀本郷邊を經過しつゝあり峽中處々に岩石よりあれる小島點在し老松三五株其間に横はり畫中の泉水を見るが如き處あり大船の往來如何あらんかと思はる、狹隘なる水道なり蔭の尾島を過ぐる頃西方に燈臺を見る即ち長崎港の入口なり一氣船あり海口を扼して船舶の出入を檢す我汽船高らかに三角港より來るを報す一水兵双眼鏡を手にして舷頭に立ち「ヨロシ」の一聲忽ち我船の進入を許可し立神、飽の浦、等の船渠を西に小菅船渠古川町外國人居留地等を東に見て出島の波止に着す查公來りて船客を檢す即ち上陸し平戸町伊崎屋旅館に入る時正に午前七時なり

長崎一港

肥前國彼杵郡に在り元深江浦といひ又瓊杵田津、深津江、瓊浪浦など云ひ貞應年中長崎小太郎の此地を領するに及びて終に地名となれり小太郎十世の孫左馬助子なし有馬直純の子を養ひて嗣となすこれを左馬介とす其子甚左衛門純景天文年中將軍義輝の命に背き長崎を去て筑後ふ淪落す大村理專代て其地を領す元龜元年南蠻船始て來り貿易を請ふ明年其臣友永對馬を遣はし市街を設けまむこれを島原町大村町外浦町

平戸町文知町横瀬浦町とす天正十六年豊臣秀吉長崎を收めて公領とし藤堂佐渡守寺澤志摩守を遣はし市街の地租を免すこの時市街二十三后分れて二十六町となる是を内町とす其后漸く人民輻湊し慶長二年市街を廣むこれを外町と稱し代官に屬し定額の地租を收めしむ寛永十一年長崎の商沽二十五人に命し南蠻人(葡萄牙)の爲し海を埋め家を造らしむ同しく十三年成る之を出島といふよりて二十五人を出島町人と稱し南蠻人より毎家家税を收めしむ大抵平均銀七十貫目なりき南蠻人寛永十三年より同しき十五年まで出島に在りしが遂に天草亂后葡萄牙人を放ち寛永十八年平戸より和蘭人を出島に引移らしむ毎家家税銀五十五貫目を出さしめ出島町人を分配す出島地形殆んど柄なき扇に似たり故に清商之を扇峽といふ寛永十二年明の商船をして長崎の一地を限りて貿易せしむ后肥前鍋島筑前黒田二家をして隔年交替勤番せしむ是を御番所といふ又番船を置き外國船を看守す元來清蘭の貿易は白糸(生糸)を以て根本とせしのは幕府は京大坂江戸堺長崎より白糸割符人を置きて專買を許すと爾來星霜幾變遷以て今日の盛大を致す元來本港は天然の良港にして單に地形上より論れれば東洋屈指の良港灣たり即ち其灣口船舶の出入に便にして市街に接近して船舶を碇繋し得べし只近傍平地少く近來數万坪の埋立工事となしたるも猶地域の狭少なるを感す輸出品としては海産物及石炭あり但し海産物は本港の貿易額上よ於ては主要の地位を占むるも之を單獨に横濱神戸に於ける海産物の輸出額よ比する時は遜色な

き能はず石炭又高島炭坑の其量を減したるより輸出額も幾分の影響なき能はず本港は尙ほ我國の石炭輸出港として門司口之津等に一步を譲るのみ輸入品には棉花油槽石油器械類等あれ共一として他港に優るものなし思ふに長崎や大坂神戸下の關門司博多三角等の發達と共に聊海外貿易の趨勢を減退せしめたるものあり市中を散策して之を馬關博多の人馬の雜沓に比すれば頗る其閑寂なるが如き感ありなれど造船所といひ良港灣といひ容易に其繁盛の度を減せざる可し人口拾五万七千四百餘九州第一の大都會なり煙草監甲細工は此地の名産也地勢東北に高く四面山岳を以て圍繞せられ一方として平地の他區に通するなし一條の水流東北より來りて出島波止に注ぐ瀛車は埋立地を過ぎて浦上時津を通す

諏訪神社公園地崇福寺八坂神社外國人居留地聖山出島等を巡覽して歸宿せしは正午後一時前途を急ぐものから全一時廿八分長崎發門司に向ふ長崎の地は地理學者の所謂半島國は文明の勝入に適するてふ一例を示すものにして只は港灣の良好なるのみならず位地正に歐西支那方面自然の門戸たり日本が世界と連絡を絶たざりし唯一の門戸たり若し夫れ長崎外交の由來を詳説せば頗る興味ある記事を得んも今は其場合にあらすかし車中長興驛に至る迄警官尾行し來り同乗者の族籍を調査す蓋し時局の影響なるべし長興驛より瀛車は大村灣の輪廓を縫ふて進む海水藍青微風だに動かす大草驛に至るの途上海岸に近く加島竹島の翠影を望む諫早に至る間瀛車は幾多のトンネルを出入し忽

大村附近
大村湾
之
彼岸
半
島
之
西方
望



ち暗く窟内凄滄の氣、打たれ忽ち明、鏡拭ふが如き大村灣の碧波を望む、變化田沒趣味湧くが如く一幅の油畫を見る如く大なる活動寫眞を見る如し、蓋し九州線有数の名區なり大村に至る灣頭琴浦に近く兒島横はり遠く笑島とカロー島と共に琴湖一碧の勝を分つ、亂山高下幾回築、中抱琴湖碧一泓、片雨斜陽偏有態笑洲忽暗日州明（劉石舟）の景趣や脚も是れ大村は大村氏二万七千九百七十石の城下として現今第廿三旅團司令部あり大村氏は元伊豫にあり一條院の御宇始めて肥前藤津彼杵高來三郡を給ふて大村に居る大職冠鎌足公の後胤遠江守直澄十五代の孫民部大輔純治の嫡男藤原純伴より引續きて維新に至る彼の大村純忠が高來の領主有馬修理大夫義純と共に夙に羅馬に使節を送りし事蹟の如き半島國の文明が如何に異彩を帯ふるの素質も富むかを知るに足る波濤の打つ處は世界文明の上をなごさにあらずして何ぞや、彼杵川棚を経て早岐に至る佐世保線の分岐驛なり早岐瀬戸を以て大村灣と佐世保灣とを連絡す東方俵谷山針明山等を以て佐賀縣と界す暫くにして有田驛も若く有名なる陶器産出地にして工業學校あり此地泉山の粘土は天然の備搗碎して原料に供し得べし製品には白磁青磁焼付等種々あり音清くして九谷焼等と異なり有田窯は慶長三年鍋島直茂朝鮮を征して還るのとき朝鮮人李參中といふ者あり直茂の臣多久長門守順安に従ひて歸化す而して後李參平彼國の盜法を以て盜器を製せんを乞ふ順安之を許して製せしむ李參平は朝鮮金江の人なるを以て金江氏を冒す頗る良工なり子孫今に至りて猶陶器に従事す初李參平肥前の

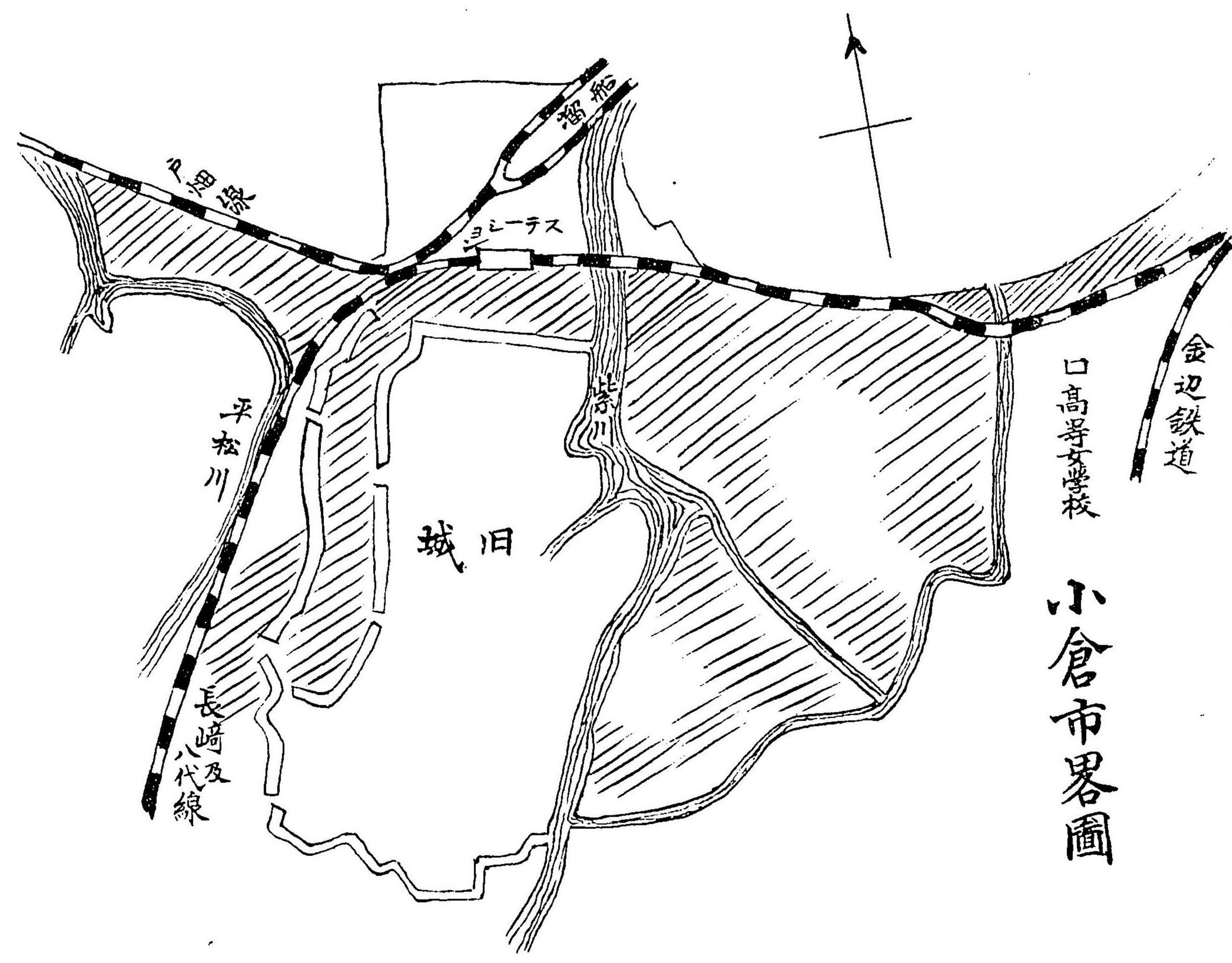
田中村にあり陶器を造り試むや雖も其土を得ず當時の器往々世に存す然れ共瓷器多く間々白磁の者あり之を堀出手といふ其斤白堊を松浦郡泉山に檢出し始めて精潤潔白の磁器を製するを得たり相次て遠近より工人來り集り終に一部落をなせり今の有田燒則是なり其地泉山の前面小溪中にあり泉山は滿山悉く磁に適應なる種々の其土及び釉料の土石を産す正保四年同國伊萬里の人東島徳左衛門といふ者長崎に赴き支那舶來の總官に學び釉畫彩色の法を得たり屢々試験して后同國南河原の人柿右衛門と相謀り遂に發明する所あり始めて五彩及金銀泥を磁器に附着することを得たり極めて支那の錦襪金襴様の如し是に至て其法全く備はる明治年間有田の工人辻勝造といふ者あり辻喜左衛門の後なり透彫を能くし其製頗る細密なり是頃勝造有田の工人と共に社を結ぶ是を香蘭社といふ而して勝造陶器は朝廷に調進すると亦舊の如し午后六時佐賀市に着す

佐賀市

佐賀縣廳の在る所人口三万五千九州の一大都會なり鍋島氏三十五万七千石の城下なり初龍造寺氏の所領なりしも慶長五年より鍋島家の領となる鍋島氏は大宰少貳經房長男鍋島平右衛門藤原清久の後なり孫直茂徳川氏に屬し關が原戦后此地に封せらる停車場は市の北にあり城址は市の中央にあり丘陵なく平野に城濠を回らしたるものなり明治維新史に著名なる事蹟あるは皆人の知る所なり此地蚊の多きを以て有名なり晩景蚊軍の襲來するや蝶類採集用の麻囊をかざして一掃すれば無數の捕虜を得る



(45)
183



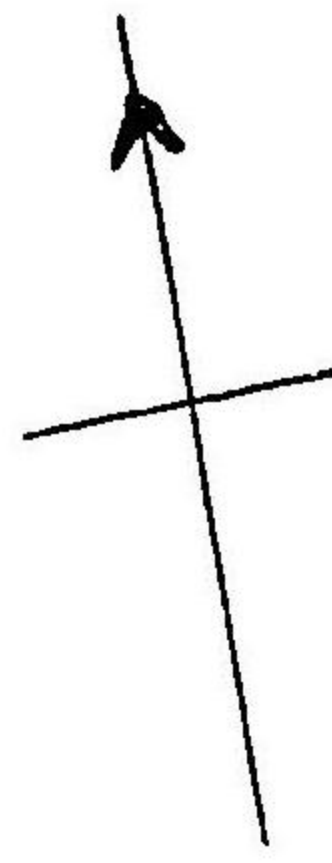
金辺鉄道
口高等女学校
小倉市界圖

旧城

船溜

平松川

長崎八代線



程なりと云ふ百里平原、緑接天、麥田、纒過、又桑田、行人終日難瘳、渴唯泥池、不見川、(廣瀬旭莊)の光景や佐賀附近の眞を寫するもの蚊群襲來亦此内より發生し來るものか鳥極、博多を経て黒崎に至る北方炎焰天を焦し電燈燦然一種のイルミネーションなり是を若松製鉄所となす製鉄場の鎔鑛爐は晝夜を分たす其壯烈の模様一見人意を強ふせまひ午后九時小倉着(小笠原氏十五万石の城下)全十一時門司着更ニ連絡船にて下の關上陸停車場前に投宿す

知らぬ火

佐賀近海有明の不知火は著名なるものなり余未だ其實際を目撃するを得ざるも其原因たる勿論微細なる海上動物の所爲たるを知る恐らくは動物學に所謂下等動物原虫の一種滴虫の一種鞭毛類中のノクチルカの種類なるべしノクチルカは其大さ約一ミリメートルに達し注意すれば肉眼を以て見ることを得べく海面に棲息し夜燐光を放つ時としては非常なる數にて群集するを以て海面の數方里之を爲し輝くことありと云ふ其形は桃の果實の如し原形質は重に其中央の一部に蒐集す核此中よりあり此中央塊より細き原形質の枝は四方に財出し体の表面に至りては此處に薄き層をなせる原形質を連續す此表面下の薄層が燐光を發する部なりといふ。

(九州旅行はあまりに飛脚的なり遺憾の至りなり余の服装が四月以來のまゝになると猶山陰北陸の一部を見んと余の希望は旅装の不便と共に九州地方に長く足を止む

るを許さず遂に此皮想的概察ある所以なり

山陰北陸之部

五月廿三日晴、午前十時三十分發汽車にて備前國岡山に向ふ水光山色舊に依て佳なり
 廣島を経て四日市に至る頃より日全く暮る午後十二時岡山着山長旅舎に一泊す
 五月廿四日晴、午前七時卅五分岡山市を發し中國鐵道にて作州津山に向ふ同乗者車中
 中學生多し蓋し金川中學校へ通學する者、瀛車は中生紀層の山間を繞り西大川に沿ふ
 て進む玉柏野々口の驛を経て金川に達す此地中學校あり有名なる日蓮宗の一派不受
 不施宗の本山妙覺寺は驛の西北二町許にあり金川の地たる北西大川と西宇甘川との會
 合点として山間の一小市街地なり岡山縣津高郡役所あり福渡驛にて西大川を離れ東北
 の一狹區に入る西大川上流より三十二里餘伯州の國境より東流下長田に至り南流して
 作州高田驛を経て東折し久世に至りて更ふ南流福渡に至る伯州街道は此川に沿ふて走
 る瀛車は忽ち弓削を経て誕生寺驛に達す有名なる淨土宗祖圓光大師の誕生地にて同名
 の巨剎は停車場の西北にあり車中より其位置を目撃し得午前九時津山に達す想ふ圓光
 大師の此地に誕生する日蓮大師の小湊に於ける慈覺大師の小野寺村に於ける弘法大師
 の善通寺に於ける教界の偉人の生地わながらに山河形勝の地よあらず然も一旦時を得
 て風雲際會するや天下の視聽を聳かすに至る天下何れの地か有爲の素質に富む者あ
 らんや只其人に定まれるの運命境遇あると其境遇を打破するのチャンスの有無によ

りて無名の偉人に終るのみ意志の人となりて奈翁の後塵を拜せんか情の人となりて老いたる母を養はんか抑も亦一切の境遇を打破して名譽の一ペリヂを青史に止めんと欲するに欲望の奴隸ならんか人間何ぞ然く忙はしき世路のみを學ぶに及ばんや須らく己れの最善を盡せば足るのみ停車場は町の西南端より一先づ旅館武藏野に投宿す

津山町

津山川の北岸に位し東は鳥羽川(一名宮川)を隔て、東津山本町と接し西北は田園遠く相連りて遙かに大風呂山、日浦山の連嶺を望み東北方遙かに那岐山の高峯を見る南は津山川を隔て、直ち藤山荒神山と對し東方は加茂川を隔て、僅か小丘を見る古生紀中世紀の地層を以て圍繞せられ隣國も出る皆羊腸たる山路を以てす然も國中形勢の雄偉なる山水に乏し市街附近土地稍平易國中第一の都會なり人口一万二千あり津山城趾は東宮川に臨み小丘を横断して城地となしたるが如し舊大手、本丸趾二の九趾等嚴然として未舊形を損せず目下公園地として市人の遊覽地となる植樹其他經營當を得ば有數の名區と化す亦難からず余の見たる處にては東京大坂熊本の三城に次ぎては津山城は天下の名城の一なるべし嘉吉元年山名教清赤松滿祐を滅せし功を以て美作の守護職を補せられし時初めて築く所にして後慶長九年國守森長政(森蘭丸の弟、豊臣家よて盛立し人)再び之を修築し經營九年を経て元和元年全く落成す長政の後三世此に居りし元祿十一年森氏國除せられ松平宣富を此地に封す津

山松平は彼の家康の長子たる秀康即ち越前家の後にして其系統を表示すれば左の如し

忠直—光長—綱賢

家康—秀康

綱國

幼名長矩從四位下左近衛權少將越後守
宣富 實松平直矩第四子光長の嗣となる元祿二年美作に封す
津山十萬石享保六年二月七日卒去

忠昌—秀康遺跡相續五十二萬石

系統正に斯の如く越前家の分派維新削の名流たり宗統よりすれば越前家の嫡流は此地にありとすべきも其後の勢力の消長を比較するに忠昌の後は貞享三年綱昌狂疾よて廿五萬石を減知せられたるも文政元年に治好のとき三十二萬石に増加せらる是に反し津山は享保十一年淺五郎早世封土を半減せられ官位も從四位侍從に止まりたり齊孝の時僅かに五萬石を賜ひて舊封を復せらる實力を以てするときは越前松平は津山松平の到底及ばざる處なりしなり維新前勝山(寶曆年間三浦明次封せらる)鶴田(久米北條郡和田南慶應の初松平武聰石見の濱田より徙る)一國三藩の一なりき城趾の北數丁にして津山公園より衆樂園と稱す舊松平氏の庭園あり泉池あり屋宇あり頗る閑雅あり然れ共固より廣島の泉邸、岡山の後樂園等より比すべくもあらず規模頗る

小なり津山町や元來山間の城市にして加ふるに鉄道僅か岡山と連絡するのみ東西北の三道の悉く腕車或は徒歩の地なれば市中の閑寂は眞に表日本の都邑の夢とも見る能はざる處町内の一端ふ立ちて他端を見るも行人僅か一二、朝より既に眠氣を催すに足る此地産物としては雲齊織、足袋等あり

旅行の都合上翌朝出發の豫定なれば先づ津山中學校に友人某を諸兄を訪ふ久々よての面會に頗る興味を覺む校内を一覽して後市内を散策す夕景より旅舎より小宴を張る舊を談し來を語り時の移るを知らざりし此地蓋し思想の地として好適地たるべし只憾むらくは活動の社會を目撃するの機乏しからんか

五月廿五日晴、二三日來暑氣稍加はり旅行の困難層一層を進む余は四月初旬の冬服のまま、さればなり午前八時津山を發して伯耆國に向ふ山陽鐵道の業務に熱心なるや中國鐵道及山陰の官線と連絡して直行列車を運轉し津山倉吉間廿里八丁の山路は人力車を以て連絡の準備ありとの事なりければ前夜乗車切符の用意を整へ車上時間約十時間倉吉(伯耆國)停車場の豫定ふて出發し約一里にして院の庄に至る道分れて二となる左すれば高田街道を経て米子と達す右すれば津山川の沿岸を進むものよて真加部上齊原等を経て倉吉に出づ即ち右して院の庄を進む事此邊水田の間垣をたる新道砥の如くなるも天日燒くが如く流汗背にあふる有名なる作樂神社道の左にあり元弘の亂後醍醐天皇駐蹕の古驛兒島高德が來りて櫻樹を削り天莫空勾踐時非無范蠡の二句を題し





停車場方向

院庄

津山川

宮川

城趾

公園は此城趾の北にあり

作州津山南方ヨリ
津山市街西半部ヲ見ル

たる舊跡にして即ち後醍醐天皇見島高德を祀り明治二年津山藩主松平慶倫朝裁を経て
創造し社格は縣社に列せらる巨松鬱茂三面をめぐり宛然舊趾の面目を存す錦川社西よ
り滙流して帆船の上下するを見るべく川を隔て、久米の佐良山を望む景致あなごち賞
するに足らざるも史上の名蹟稍旅情を慰むるに足る本殿の在所は古の皇居跡なりと云
ふ櫻樹のありし處として其跡を存するも今と只拜殿の東に銅碑あるのみ明治廿六年の建
設にして表面は後醍醐帝御製として

あはれとはなれも見るらん我民をおもふこゝろは今もかはらす

よそよのみ思ひそやりし思ひさや民のかまごをかくて見んとい 熾 仁 識

とあり院の庄の舊趾や小島高德事跡の如何より其價值を定むべき者にして彼の太平
記が既に小島法師の作なると共に高德なるものが史上の實在的志士なりしやも薄弱な
る論なりと雖今は明確を欠くを以て只在來の史跡をまかせて茲に記せり同社を辞して、
より歩一步は道路急勾配となる羊腸たる坂路を上下すること約四時間黒木に達せしは
正に十二時道程僅か五里のみ茲にて津山よりの車夫は黒木驛の車夫と交替す曰く疲
勞甚しく到底是より進み得ずと時間に差あると豫定の如く進行せざるを詰問すれば曰
く車走時間は約の如し但山路到一日の旅行といふ爲し難し途中一泊の心算ありたしと
の事にて案に相違の連絡乗車不得止れば適當の處にて一泊と決せり津山川の沿岸を縫
ふて登行事更に二里餘女原を過ぎて一小時あり登約一里先曳を附す絶頂より下る事一

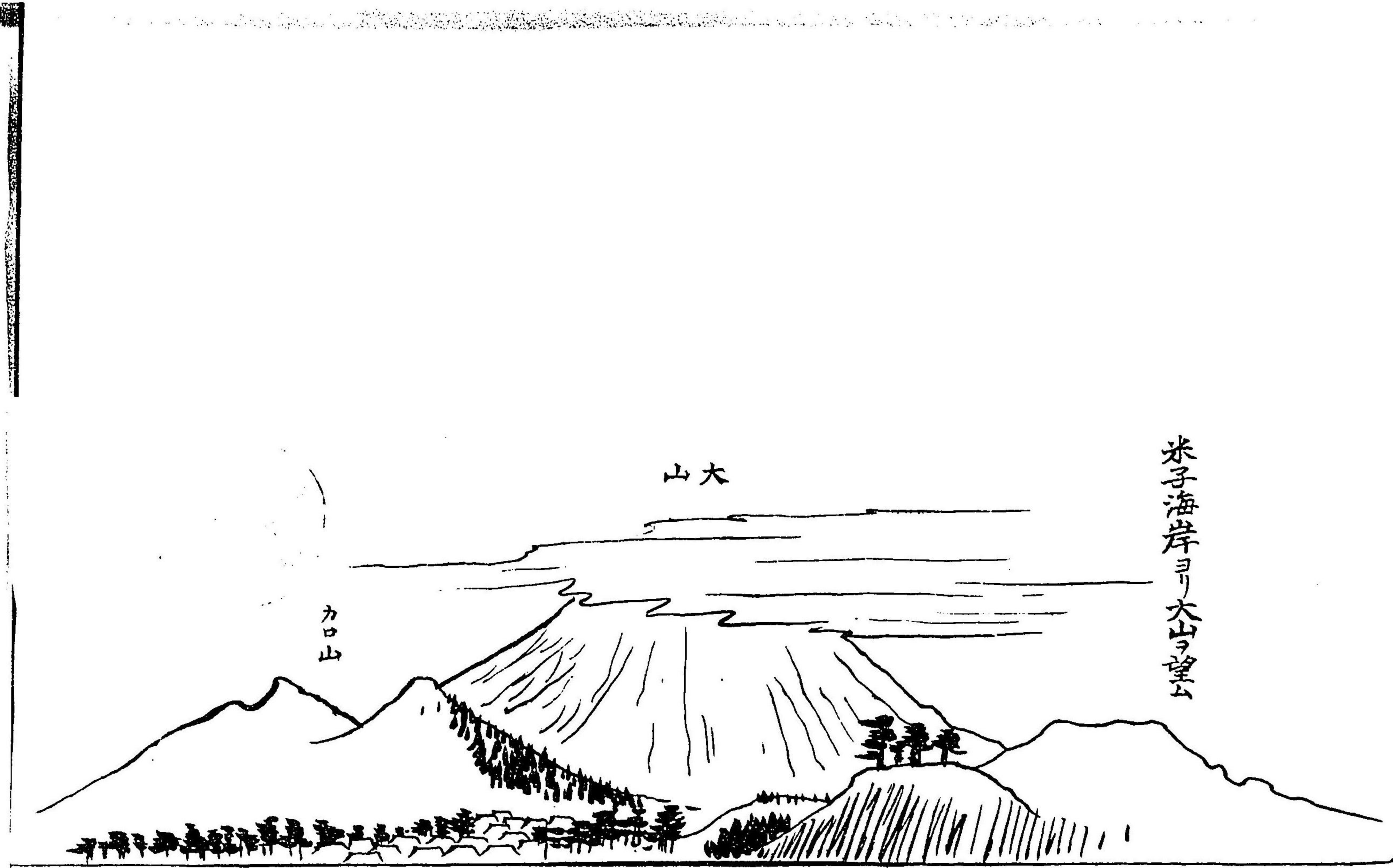
里奥津川村に達す時正午午後四時車夫の疲勞甚しくあえぎ／＼て上齊原に至る津山より行程拾壹里半歩一步爪先登りの坂路なり上齊原は伯耆國に近き作州最終の村落にて一旅舎あり就て慰ふ車夫曰く此村はづれより人形峠の險坂よかゝるものにて曾源寺に至る迄約五里餘の道程殆んど人家なし便宜上茲に一泊するの好都合なるを教へ呉たれは不取敢一泊と決して旅装を解きぬ途上の風物悉く平凡山又多くは密樹なし
五月廿六日曇、午前七時上齊原を發して人形峠に向ふ作州伯州の分水嶺にして地質花剛岩よりなる山上灌木雜草のみにて巨木なし絶頂迄先引を附す此間三里午前九時曾源寺に達す雨降る再び人力車をかへて發す午前十時倉吉驛着直ちに汽車にて御茶屋に向ふ山陰鉄道は官線として明治卅七年三月の開業に係る乗客殊に少なく各停車場の静寂なること想像の外なり御來屋驛間各驛上下車客何れも二三人のみ午前十一時十九分下車停車場附近一の茶店だもなし十二三丁にして御來屋町に至る後醍醐帝隱岐島より潛幸ありし所なり海岸に沿ひ蕭條たる寒驛にして町内殆んど人馬の往來するを見ず中央より南の小丘に鉄道を横切て登れば別格官幣社名和神社あり元弘の忠臣名和長年を祭る此地即名和村にして社殿敢て輪奐の美を盡さるも壯嚴蕭洒優に忠魂を慰するに足る社殿の後部より燒米を出す長年の倉庫を燒たりと云へる跡なるべし社前茶店西三あり賽者の便を與ふ時正に十二時に近かりしを以て茲にて豊食をしたためぬ長年は名和行秋の長子なり元弘三年後醍醐天皇の名和港に着し給ふや族を擧げて天皇を奉す事

膳國史も明なり午後直ち大山に向かて出後瀧落たる石塊多き山道を南に向ふて登る三里西の高麗山(海拔七百七十六米突)の秀づるあり麓南に赤松池あり蓋し舊火口なるべし東に船上山の翠緑を望む(海拔九七五米突)樹木蒼鬱たる間西方に少しく平地の存する處後醍醐帝の行在所跡あり土人字して天皇屋敷といふ宮跡より東一里に船上神社あり伊弉册命を祭る想ふ元弘三年閏二月落たる火山岩上義人起て幾斗の鮮血を瀝き北海の陰風暴れて名和港外雷雨一聲隱州茫々の間に盡ひ去らるゝ光景や如何火山の裾野松嶺烈しき小徑をたどり午後五時大山を麓大山寺に到着す此地牛馬の育成盛なり本月廿四日は於ける牛馬市状況を見るに牛馬總數貳千九百四十頭内牛千九百二十八頭馬千二頭賣買數額四万四千二百三十圓最高價壹頭二百二十圓なりき大山市即ち是なり忽ちよして烈風砂塵を飛し忽ちよして一天暗濛沛然として急雨下るや山容濛々の内よ覆ひ去らる陰森の氣人を襲ひて老杉蒼鬱晝猶暗き處人家十數あり概ね旅舎を業とす豆腐屋と稱するもの稍慰ふ足る即ち就て一泊す由來山陰風多し此日強烈頗る苦しむ
五月廿七日晴、風猶強午前七時人夫を賃して大山に登る西側沿ふて溪流を渡り杉林を越え兎角して山腹の小徑路に出づ大山や伯耆國八橋汗入日野の三郡に跨かりて米子町の東に聳え中國第一の高峯なり海拔千七百八十一米突舊火山の一種なり徑路は蓋し作州街道に通するもの是より山腹を攀登する約一里固より路通するなく絶崖を目標として登る險峻極度余は常に手足を地よ投して一回だも立つ能はず樹木漸く疎く雜草

漸く多し暫時にして殆んど中腹に達す風ますます激しく稍冷氣を思ゆ願れば人夫數丁の下ふかり待つこと多時漸く至る曰く登山の困難なる今日の如き其比を見ず十數年來案内業を職とするも健脚君の如きものあし加ふるに烈風殆んど面を向く可からず請ふ本日は是にて下山し明朝快晴を待ちて再び登らんよは經驗する處によれば絶頂恐らくは不測の危害あらんと余曰く余は山國に人となり海内の山河を跋渉する茲に年あり登山亦幾十豈此大山のみならんや風の烈は蓋し然らん中途に絶望するが如きは余の忍ぶ能はざる所汝單獨下山すべし然らずんば茲に余の歸るを待て二者其一を擇びて余の安否を待て思ふに是より約三時間なれば断して茲に歸着せんと彼危むる如し余は期する處あり雨中の登山烈風の登山余は於ては幾回の經驗あり然く恐怖するも足らずと彼は即窪地の風なき處を探りて余を待事に決す余は單獨絶巖に攀づ午前十時頂上に達すハヒビヤクレン地を覆ふて西方一帯足の向ふべきなし南北兩面は斷崖絶壁一條の頂線東西に亘る處峻険ふして渡る可からず間々猶白雪皚々冷氣甚しく肌粟を生ず頂上に一本の標木あるのみにして他に一物なし西南頂上より下る約三丁にして小池二あり雪水の融解して貯留するもの炎暑の際も水涸れずと云ふ深さ一二尺大さ四五間稍掬するに足る烈風山谷を動かして身体爲め飛んとす余は一小窪地を發見して直ち横臥し先づ食事を終り近く雪塊を喫して渴を醫する事數分幸ひなるかな風と雲霧を拂ふて天拭ふが如く眺望濶大眞個に山陰の雄なるもの北に隱岐の島日本海上に浮出し西方遙か

石見境上の三瓶山稟の鋭頂を望み東に三國山(但馬、播磨、丹波の境界)及但馬丹波の連山を認め得米子町は眼下の中の海は一小盆水の如し日本海や廣大溟渺壯なり豪なり意氣將に天地を呑む人間須らく登山すべし不平鬱悶悉く去て只見る身は既清淨無礙なる天界にあるを人間の經營や眞個に粟粒大なり曰く英雄曰く豪傑彼必竟何するものぞ大嶽創成三万丈絶巖漂渺有無中(仁科白谷)の消息や登山者にして始めて解し得るものなり頂上噴火口らしき處を見出さず欠損尋ぬる由なし恐らくは北方一大溪谷あるもの其舊跡か午前十一時半舊路を下りて人夫の在る處に至る人夫茲に待てり伴ふて歸途につく正午十二時大山寺畔の宿所に入る小憩後沐浴し終りて大山寺に遊ぶ元正天皇の養老年中金蓮上人此地に一字を草創す後延暦寺第三世慈覺大師錫茲此山に留め丈六の地藏菩薩を安置して始めて大山寺と號す天承年間大に堂宇を造營せしも享録年中洪水の爲破損し天文六年今の本堂を再築す建久二年佐々木高綱勅を奉して郡内末吉、稻本稻吉三ヶ村に於て三町有餘の田園を寄附す足利及び徳川幕府よりも代々寺領を寄附し朱印若くは黒印を賜ふと云ふ本堂觀音堂阿彌陀堂鐘樓等あり本堂は慈覺大師の創建せしものにて天承年中再興のときは方廿四間餘の巨堂たりしも漸次修繕每少縮す然も其用材は創立時代のもの、みよて實に千二十餘年の古堂なり寺寶として後陽成院の宸翰智證大師自筆正教目錄櫃の厨子入千手觀音椎の厨子入彌陀三聖兆殿司庫渡唐天神等あり本日も猶滯留

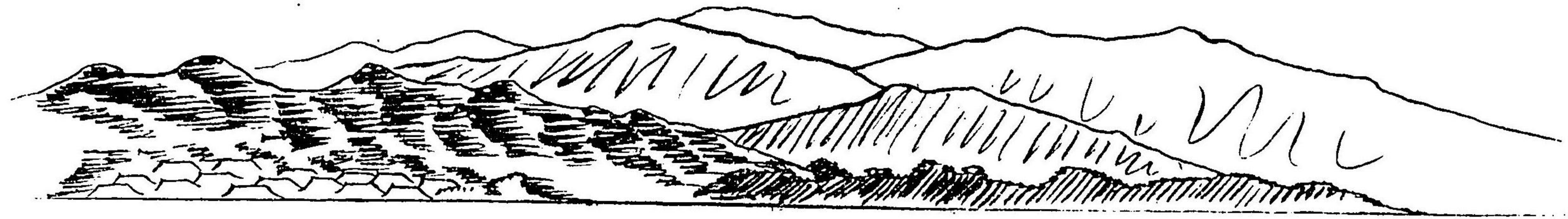
五月廿八日晴、午前七時大山出發米子に向つて進む前日の道に引換て修繕能く成り小砂利雜りの坦路頗る心地よし四里にして熊堂停車場に着す午前十一時四十八分同驛發米子下車直ちに市中を徘徊して中の海埠頭漁船のある處に至る米子町は國內第一の都會にして人口一万六千伯耆は元來綿産多く倉吉地方より盛に伯州木綿を産出するを以て其取引頗る盛なり天正年間中村一忠當國に封せられ此地に城きて一國を治す慶長十四年一忠卒して嗣なく爲め國除せられ翌年加藤貞泰此地に治し後伊豫の大洲に移る其城趾尙は町の北端あり午後一時發船との事なりし故一茶亭に賚食し松江に向ふ即ち是より根の國なり入雲立出雲の國や背面的日本の重要な史跡を存する處風俗言語古跡等充分の注意を拂ふに足る中の海や夜見が濱一帶の砂州即ち大なる一種の天の橋立よりて東方を限り北は島根半島遠く三保が關より地藏岬に突出して北海の風濤を避け其間境港の小海路を通して外海と連絡す西は大橋川天神川を以て尖道湖と連なり南方一帶丘陵起伏して其間一二の港灣をなす水や碧藍風濤の難なく大根島低く中の海の北部に横はり漁村農屋島上に點綴して麥圃の黄色は海水の藍色を相映し夜見が濱一帶翠綠滴る如く大山の秀峯高く米子港の西隅に聳え小涼船時に二三縦横に奔馳す丹後海濱の外山陰第一の勝區とす日本の瑞西式風光を見んとするものは宜しく此地を訪はざる可からず今抄ふ少しく中の海附近地形の變遷よつきて記す處あらん中海は出雲風土記に南入海といひ萬葉集よ飡宇海と詠せらる廣さ東西五海里南北亦約五海里とす



西、馬海^{ウマウミ}の瀬戸は古への朝酌促土、湖中の大根島は風土記には蜈蚣島といへり米子町の西北一里許にして中の海一面する處粟島の地名存す粟島と古代の一島よて足利幕府の初期迄は其島の附近より東方今の夜見濱を貫通して外海に出づるを得たるは明らかなる事實にて今の境港附近の如きは徳川時代正徳年中宍道湖に注ぐ河流變遷の爲め中の海の水漲溢し遂に境港の北所謂中江瀬戸なるものを大ならしめしものなり後醍醐天皇の隠岐に流され給ふや今日の安來古代の八杉浦よりして出帆し給ひ米子附近の瀬戸より美保關に渡り順風を得て隠岐に渡り給ひしなり承久の役の後鳥羽院の隠岐への航路亦同じ然るに後世日野川等の流域より土砂を流出すること甚しく遂に壅塞現今の陸地は變せしものとす更な古代に遡りなば夜見濱一帯の砂渚すら之れ有らざりしなるべく三保關より中の海へ一大灣入をなし松江附近又海にて宍道湖西岸築一帯の平地も恐らくは大海なりしならん日の御崎より地藏崎に至る迄全く一の狹長なる島なりしなるべし何となれば此地方や地層最近の洪積紀に屬し松江附近飲用水の悪しき等は其地層の最近時代の發達に原因するものなるや知るべし韓國より引もて來りて縫附たる嶋根半嶋の古傳説即ち其由來を證するに足る安來の西南松江の南六里に有名なる月山城即ち富田城の古跡あり旅行を急ぐ爲め巡遊の機を得ず遺憾の極とす富田城は廣瀬町と富田川を隔て、相對す足利の末世周防の大内氏と覇を争ひ永祿八年八月十六日遂に毛利元就の爲め滅亡したる尼子氏數代の居城なり米子發の小汽船は安來馬海を経て午后

五時松江の大橋鉄橋の畔に投錨す松江市を見んとしたるも宍道湖を横きる汽船の直ちに出帆する由を聞き歸途上陸と決し直ち大社參拜として大橋の西側棧橋に至り全形の小蒸氣船にて松江を發す湖中鱸多し清國松江の鱸の如し松江の地名亦茲起因すと云ふ東岸に一小嶋あり嫁の嶋といふ全嶋巖を以て骨とし古松其外面を點綴し風景稍佳午後七時宍道湖の西端斐伊川の支流新川を廻りて庄原に達す更に腕車に乗して陸行三里今市に至る途中夕景の爲め附近の光景を看取する完からざりしも田畑耕作の方法農家の構造一種特別の相あるを見る農家の構造は草葺屋根多く其頂点支那家屋に見る如く兩端一種の曲線を畫し所謂チギ、カツラギらしきものなし西南地方はチギの遺制と思はるゝ形あり普通カツラギの在る處も小竹片を交叉してチギの如し我東北の單に頂点を平面にするものと異かれり西南に此制多きは恐らく南洋地方の遺風の一部なるべし出雲は即ち形式より云へは支那家屋に似たり家屋の周圍必ず老松幾株を屏障とし其方向の西北を遮て東南を開く蓋し大陸地方よりの寒風を避くるか遠く是を望めは恰かも神社を見る森林の如く平野は點在して一種の奇觀とす聞く老松の年數多く家屋の來歴の古きを以て其舊家たるを誇りとなす二百年或は三百年來の古家ありと蓋し國遣家の亞流を汲むものか午後十時今市着紙尾に投宿す小婢の言語頗る不明恰かも青森地方の如しとととの差シとスとの差の如き是なり思ふ日本海に面する地方は一帯ヒマキチツの誤多きみ如し且雲民族の發する地を知るは恐らく同一の

中ノ海ヨリ
西南ニ安
来町ヲ望ム



關係より來るものゝあらざるか余の言語の東京辨なるより物珍らしきが如く侍し居たり以て未だ交通の遠區域に及ばざるを見るべし今市は斐伊川の支流高瀬川に沿ひたる一市街にして國道の衝に當り人口約六千地は簸川郡役所あり雲州西部の物貨集散場なるを以て商業殊に盛なり松江市を距る八里十町杵築を距る二里廿二町あり此は朝來余は遠雷の如き響きを耳よすること數回なりしが此地ふ來りて其砲聲なるを聞き得たり否な是が余が唯一の紀念日にして彼のバルナック艦隊が對州沖に大敗して其全艦隊を破滅せられし吉日なりしなり處は出雲の杵築に向ひ時は明治の卅八年五月廿八日嗚呼余は皇天が我國に幸ひせしを誠意を以て感謝す此日余が乗れる車夫は松江よりの新聞號外をもたせり曰く海戦中と聞者踴躍其結果を待つ、

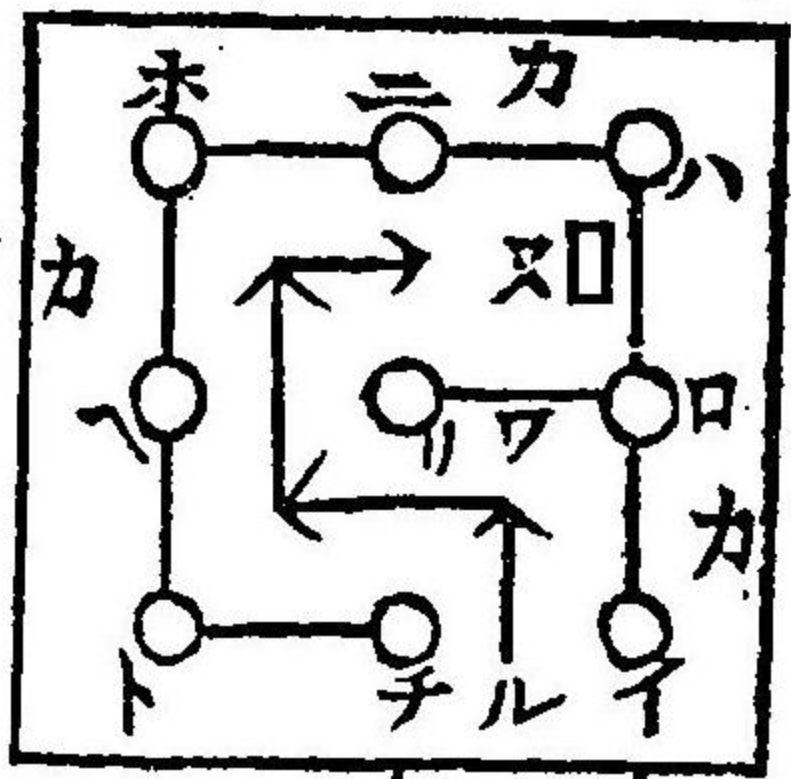
五月廿九日晴、午前八時今市を發して杵築に向ふ平野田圃能く開けて小溝に船を通し荷物の運搬を便す午前九時杵築着一茶店に憩ひ輕裝して大社に參拜す杵築町は元神門部に屬す今は簸川郡内にあり人口約五千市街は敢て清潔と云ふ可からず亦繁盛と云ふ可からざるも大社參拜の旅客は常々往來して絶ゆる時なし

出雲杵築大社

大社は町の北端ふあり八雲山の南麓に鎮坐し素盞鳥尊の胤大國主神を祭る日本歴史上最重要なる部分たる出雲民族の主神として大陸半嶋地方より侵入して茲に根據を定め遂には山陰一帯北陸より畿内地方に至る迄高千穂派即神武の東征以前は葦日本

は我文明の中心点たり高千穂派の民族と共に我人種の中心たる大和民族を形成したるものにて容貌、秀麗、所謂日本の美人系統は是等民族の蔓延したる地方にあり余嘗て奥羽にあり秋田地方の女子作らずして美なるを知る越後古來美人多しと稱す濃美や京坂や人の能く知る所蓋し人種上の關係あるを証するもの大和民族的容貌是なり町の一端石造の大鳥居あり進む約三町老松左右に並び風致稍喜ぶべし次で毛利元就の献納にかゝる銅製の鳥居あり其左右荒垣あり境内を圍繞す七門あり之を七口御門と云ふ荒垣の内樓門あり左右に神饌所あり悉く玉垣を周らしたり樓門の奥に八足門あり拜殿神殿亦其奥より境内には其他會所社務所文庫寶庫攝社末社等あり大体の規模体裁是を伊勢の太廟に比して其幽邃、壯嚴等の大に遜色あるを覺ゆ伊勢大廟は社殿の瀟灑に神代杉の密林を以てし境内幽邃眞に神々しき感起す反し出雲大社は境内一の老杉なく亭々天を摩するの大幹巨木殆んど皆無其形式やあまりに快瀾よあまりに殺風景なり由來神社の壯嚴や崇敬の念や一半は其形式にあり歩一步密林靜寂の内に入りて澗水潺湲人影稀なる處古色蒼然たる神殿を拜すれば不思議の清淨と崇美の感に打たるゝを常とす大社や然らず聞く古來兵亂相繼ぎ或は火災の爲斯くも神威を損するに至れりと彼の田中鹿之助の如きは境内の大木を切倒し築城其他の用材に用ふたりと云ふ戰國時代の常とは言へ眼中國体なく武道一片の腕力沙汰時勢の面影其内にはの見えて悲しむべし大社の建築は我國最古の摸型を存するものに

て普通の神社の構造とは頗る趣を異し伊勢大神宮神殿の構造も日本建築史上此大社より後代に属すべきものたり大社の建築式と即ち上古に於ける皇居の構造式なり今便利上神殿の平面圖を示すべし



普通の神社の階段を上り入口は正面にあり入口の奥に神体を設置す然るゝ大社は階段入口共に正面より右に偏し神体は西面す猶入口と神体との間に壁あり矢の方向に進みて神前に出づ中央に(カ)の柱あり是通常の神社になき處殊に奇とす(カ)の柱は二柱が(カ)の二柱の中心(カ)の二柱の中心と平行線上にあらすして柱の半徑の四分の三は外面に偏するゝあり主神天日隅尊(即大國主神)にて正殿の奥に西面して鎮坐あり正面より齋祭するは五つ柱の別天神延亨元年の造營文化七年と明治七年との兩度修理せらる社の高さ八丈、二間四面にして柱は九本屋根は檜皮葺如斯を正殿式といふ中央の柱を心の御柱と稱へ其基に天日隅尊の御子別雷神の御像を安置す農神にして牛を引給ふ境内の左に千家右に北島の二家あり世人の知る如く祭祀を主る家にて兩家共天穗日命の子天夷鳥命の子孫なり日本書紀に高皇產靈尊が大國主の命に給ひし勅の内に又當主汝祭祀者天穗日命是也とありて兩家が本社と淺からざる關係あるを知る上下二千余年血統連續由緒

普通の神社の階段を上り入口は正面にあり入口の奥に神体を設置す然るゝ大社は階段入口共に正面より右に偏し神体は西面す猶入口と神体との間に壁あり矢の方向に進みて神前に出づ中央に(カ)の柱あり是通常の神社になき處殊に奇とす(カ)の柱は二柱が(カ)の二柱の中心(カ)の二柱の中心と平行線上にあらすして柱の半徑の四分の三は外面に偏するゝあり主神天日隅尊(即大國主神)にて正殿の奥に西面して鎮坐あり正面より齋祭するは五つ柱の別天神延亨元年の造營文化七年と明治七年との兩度修理せらる社の高さ八丈、二間四面にして柱は九本屋根は檜皮葺如斯を正殿式といふ中央の柱を心の御柱と稱へ其基に天日隅尊の御子別雷神の御像を安置す農神にして牛を引給ふ境内の左に千家右に北島の二家あり世人の知る如く祭祀を主る家にて兩家共天穗日命の子天夷鳥命の子孫なり日本書紀に高皇產靈尊が大國主の命に給ひし勅の内に又當主汝祭祀者天穗日命是也とありて兩家が本社と淺からざる關係あるを知る上下二千余年血統連續由緒

尤も正し先年兩家並に男爵を賜ひ華族に列せらる此家は上古より出雲國造と稱せられ上古は臣姓なりしも後宿禰姓となる千家は本家にて北島は別家なり千家と稱するに至りしは第四十九代孝宗の時代よりすと云ふ南北朝の際争ふ所あり分れて二家共み國造となり交るゝ祭祀を主ると云ふ即ち南朝の興國五年千家清孝の死後康永三年孝宗貞孝の二人争論を記し貞和五年上裁を経て分立す大社の西市街を離れて海岸より一帯の松林あり古への伊奈佐の濱是なり天孫降臨に先ち武雷神と經津主神は大國主に國土奉還の應否を迫り手詰の談判をなせし所即ち否か諾かを決せし故の地名とぞ西は一面茫々たる蒼海を望み南の波の如き連嶺東西に連なる處西端一峯の高く聳ゆるものはれ石雲二州の境界なる三瓶山なり

三瓶山

舊火山にして海拔一二二八米突最高峯を男三瓶山といふ男三瓶女三瓶子三瓶孫三瓶等外輪山をなして其間ふ舊火山口あり周圍二十丁中央に池あり鳥の地獄あり炭酸噴孔にして鳥類此所より到りて斃る此山は韓半島方向より出雲に向ふもの、好目標として恰かも美保關中の海に向ふもの、大山を好目標となす、如し昔燈明臺のなき時代の航海には此種の山岳は文明に大影響ありしを思ふべし出雲史上重要な關係より立つものといふべし

巡り終りて茶亭より歸りしは正十二時豫て聞く日御崎神社(祭神八束水臣、津野命)(神宮

は天尊根命の裔にて今小野と稱し男爵を給ふ(鱒淵寺(神佛混淆のまきは大社は此寺の支配下あり)等巡覽の望は多々なるも如何せん長途の旅行特に出雲に多大の日子を費すを許さず遺憾を含みて歸途おつき再び今市庄原を経て松江より着せしは午後四時なりき市中見物の時間は豫算上極めて少なきを以て人力車にて縦横にかけ廻り城趾の大平市中光景の一般を見る

松江市

國內第一の都會として元松平氏(十八万六千石)の城下なり人口三万五千市街の中央に大橋川あり河南を白濁せし河北を末次とす末次の西北に一丘陵あり古へ田山と呼び今城山と稱す即松平氏の舊城趾として當時 天主閣を存し城内老樹鬱茂し其間に近頃市民の遊園地を開く大橋川架するに鉄橋を以てし長さ八十間餘城は千鳥城と稱す關が原役後慶長五年十一月堀尾吉晴が遠洲濱松より轉封せられて雲隱に二十四万石を喰みたるときは未だ富田城に在りしも形勢甚だ不便の僻地にして雲州隱岐を制約するの地にあらず末次の地や東、中の海より外海の航通は至て便に西は宍道湖より杵築地方に至りて形勝の比較上其子忠氏と謀りて此地に築城をたると中途慶長九年忠氏死し吉晴自から孫忠晴を伴せて移轉せしは正に慶長十二年なり天主閣高さ十四間三尺六層樓にして宇賀山上を截り開きて建築したるものなり忠晴は寛永十年九月死歿し子無きを以て國除せられ京極宰相高次若狭の小濱より來り十四年高次死し子

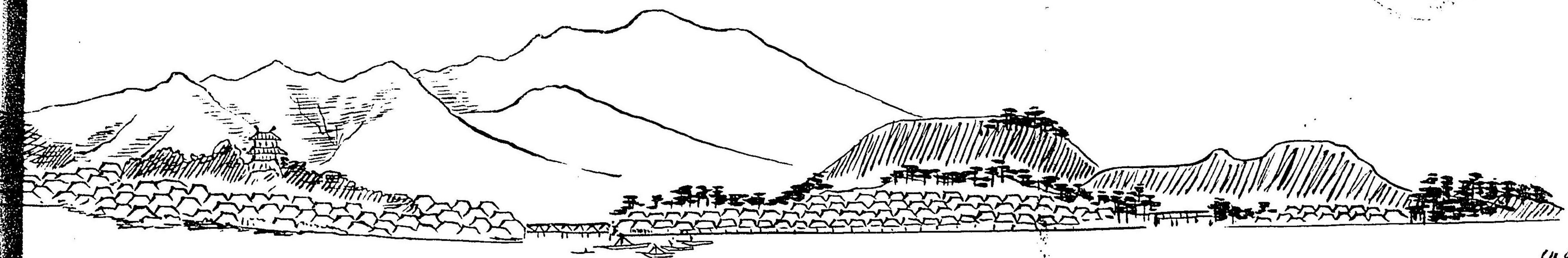
無きを以て國除せられ最後に家康の曾孫越前宰相忠直の少子出羽守直政城主となりて子孫相連續して明治維新に至り堀尾氏の此地に移轉したるは其蹟見の衆にすぐれし証なるが其後明治に至るまで誰一人も此形勢を利用せず徒らふ背面日本の一名城に終らしめしは幸か不幸か

城北に白髪山あり山中一城址あり新山城と云ふ毛利元就の出雲を經略するや城將松田左近將監(尾子義久の叔母婿)力盡きて降り後多賀兵部少輔元信をして是を守らしめしよ永祿十二年毛利氏南方に事あるや尾子勝久遺臣山中幸盛と共に父祖の舊業を恢復せんとして兵を擧げて此城を攻め守將を走らせ此地を根據として雲因二州の大平を従へたるも元龜二年毛利氏の爲め全く其余燼を滅せらるゝに至れり

此地名産は瑪瑙細工と出雲焼とあり瑪瑙は湖南の乃木地方に産する由出雲焼は石焼とありず黄色の陶器にして其地處頗る光澤あり軽くして稍脆弱なるも高尙にして上品なり初め出雲焼に樂山燒富士名燒の二種あり樂山燒は慶安年間嶋根郡松江の樂山に於て始めて製出する其地の工人倉崎權兵衛といへるもの長門國萩より土及釉を齎らして造る其質、萩焼に似て一層の奇を帯ふ多くは點茶の茶碗、水壺、盞盆の類なり惜むらくば一代よしを廢絶す返世國人再び竈を開くとはいふ萬治年間樂山權兵衛の弟子加田半六といへるもの富士名燒を製す唯茶器のみ寛政年間同國の工人善四郎といへるもの陶製に巧みなり當時出雲の國主松平治郷致仕して本味と稱す深く點茶を好み

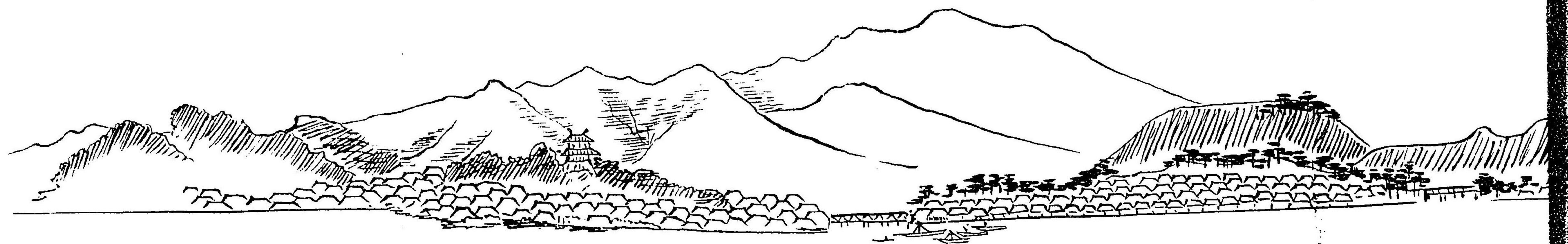


安道湖
東方
松江
市
街ヲ望ム



192 (4-9)

安道湖
ヨリ東方
松江市
街ヲ望ム



終に一家の茶式を定めて治癒茶器の好醜を撰擇するも長せり因て蕃四郎も命じて茶器
を造らしむ昔不昧の意匠を加ふ既にして其地の工人黃種を施し其上に五彩綃を以て
畫ける所の圓花瓶等の諸器を製造す慶安年間窯を開きてより以來皆稱して世雲騰と
いふ

夕景より中の海を渡りて大根嶋の北を廻り境港に着海岸の橋田旅館に入りしは午後七
時なりき思へらく山陰道は今日の時勢より懸れば其交通の不便なる文化の發展は頗る
不利の地位に立つものにして山陽道の人口の密度は一方里平均二千三百人の間にあり
比し山陰道は二千の間に及び山陽道の人口の密度は一方里平均二千三百人の間にあり
に比すべし以て其風化の間及び難きを見るべし今日すら猶然り況んや古來交通の不便な
る陰陽二道の間横はる山脈あり表日本の中心点を去るや頗る僻遠歴史の上着大の發展
をなしたる英傑の出でざりしを蓋し自然の政治的區劃も亦其自然區域を從ふもの蓋
に連なるは其南北間の文明を遮斷し政治的區劃も亦其自然區域を從ふもの蓋
し然らん竹葉町茶亭の主人曰く余未だ不幸にして東京を知らずと而して同市有数の旅
舎の主たるは境港の植田屋主人一々余と四方山の閑談の機關たり此種の高尙優美なる
京へ來る旅館の境港有数の旅舎未だ之れ有りかば其情勢推察すべからずや此地方は古
大建築の旅館として東京より足を未だ之れ有りかば其情勢推察すべからずや此地方は古

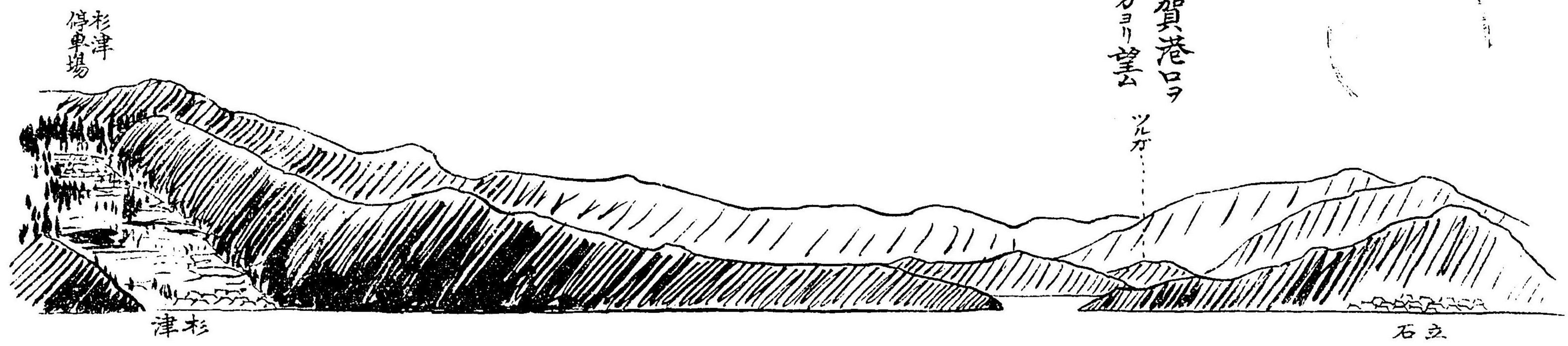
來○力○士○を○出○す○史○上○よ○有○名○な○る○野○見○宿○禰○は○暫○く○言○は○ず○出○雲○陣○幕○谷○の○音○伯○耆○の○荒○岩○
 皆○東○京○相○模○社○會○よ○有○名○な○る○も○の○背○面○的○日○本○の○聲○價○を○維○持○す○る○も○の○は○是○等○數○人○と○出○雲○大○
 社○と○千○家○氏○の○み○夫○れ○天○下○ふ○志○あ○る○も○の○は○高○き○に○登○り○て○叫○ば○さ○る○可○か○ら○ず○其○反○響○の○大○
 なら○さ○れ○ば○な○り○人○心○又○稍○固○陋○な○る○が○如○し○山○陰○道○を○改○良○す○る○の○最○便○法○は○交○通○機○關○の○速○成○
 に○あ○り○此○夜○新○聞○号○外○を○見○る○に○對○馬○海○大○海○戰○敵○の○第○三○艦○隊○司○令○官○チ○ボ○ガ○ト○フ○捕○虜○と○な○り○
 敵○艦○十○三○艘○を○擊○沈○し○六○隻○を○捕○獲○す○と○余○は○海○戰○に○よ○つ○て○名○を○知○ら○れ○た○る○竹○嶋○(○リ○ヤ○ン○コ○
 ー○ド○岩○)○の○材○を○以○て○せ○し○室○内○よ○あ○り○て○大○海○戰○の○勝○報○を○讀○み○此○吉○兆○を○祝○す○因○縁○淺○か○ら○
 ず○永○久○不○磨○の○好○紀○念○な○る○か○な○

五月卅日晴、此日境港を出帆の豫定ありしも海戰の爲め航海停止中未だ解除の命なし
 と爲めに一日滞在の不得止に至りぬ此間美保關に至らんとせし事幾回なるも知れず然
 る何時便船の出帆あるやを詳よせず海戰の結果により多分今日中に航路復舊の命に接
 すべしとの事なれば無聊なる客室に消息を待つ事數時此間附近の事情を主人よ問ひ女
 中よ尋ね終に一日を空過したり境港は夜見の濱の西北端に在る一市街にして前は中江
 瀬戸を隔て、出雲嶋根郡森山村と相對す其間約七丁東西二十五町深さ四町より五町人
 口五千商船會社船隱岐通ひの隱岐丸等は直ち埠頭横付にするを得るも郵船の東方
 約一里半の洋中に碇泊す美保關通ひ松江通ひの小蒸氣船常に相往來す米子町を去五里
 一町なり境港や山陰道唯一の港なるも只特別輸出港の一として製齋布、米、酒、魚油、棉

花を輸出し、豆、小麥、米、藥材等を輸入するの外將來の發展も十分なる能はざるべし鉄
 路一度ひ陰陽を連絡すれば今より一層の繁昌を來すは勿論なるも埠頭より東に一淺洲
 の手出するありて漸次陸地を形成せつゝあり大汽船は大抵此淺洲の南より埠頭より
 直ちに小艇を進むるを得ず約二里正東に進みて後更に南西に逆行し初めて本船に至る
 の不便あり惜むべし

六月一日晴、此日便船を待ちて更に滞在中三保關神社の模様を聞く美保關の出雲國嶋
 根半嶋の東南端にあり港の廣さ東西三町南北五町深さ五尺より十三尺港口は石造の燈
 臺を設く人口約二千以上美保神社あり市街の西北よりあり國幣中社にして事代主命を祭
 る古事記神代卷に事代主神が御穂崎に遊んで繪を垂れ給ひし事を載す此崎は蓋し今日
 の地蔵岬か中古時代には此地に關を設けて吏員を派出して出入の船舶を監視せしめた
 る事あり關の名稱茲に出づ美保關神社境内は非常な鶏を忌み町内と雖も是を殺すこと
 を禁す此鶏を忌む事は偶然にあらず博物學上鶏の原産地は馬來半島にして伊勢太神宮
 を初め南方諸神多くは飼育したる例に比して北人が南人を忌みし飛火よて所謂毛嫌の
 一種にあらざるか此夜電報來る航海復舊スピール号馬關發と因て更に同船の入港を待
 六月二日晴、午前十時頃スピール号入港の報あり午後五時出帆との事なり斯くも長く
 滞留する豫定ならば日御崎、鰐淵寺將た美保、月山城等優に遊覽の機ありしものをかへ
 すくも遺憾の事ありし時局の影響は我輩の如き境遇にも襲來せり午後五時夕食後歸

既にて英船スピル号に向ふ全船は敦賀直行との事なりき乗船切符を手よして將に出
發せんとする瞬間山陰道沿岸を縫ふて進む小汽船も亦發航するを聞く既に遅し失敗に
失敗を重ねて茲に山陰旅行の一半を沒了す本船に乗込しは午後九時頃なるべし四方の
海色朦朧として只船内の電燈のみ明かなり直ち寢所は横はつて夢中日本海を航す
六月三日晴、朝來覺め來れば一碧萬頃北の方は一点の青螺だも望むを得ず海上藻草の
漂ふことおびたし南方遙か丹後國經が岬望む翠巒手にし得るが如く舞鶴港北の
連嶺、博奕岬、成生岬等最も明瞭なり山上砲臺らしきものを見る否か、奇形なる沖島雄
嶋の二島は船の進むに従ひて其形を變し妙言ふ可からず既にして若狹小濱港の門戸た
る久須夜が岳題はれ來る東方更に海上に突出するは水月湖三方湖の北なる常神岬か午
前十一時東方立石崎丘上の燈臺を望む立石村其東南海岸あり灣口の東端は鉢伏山に
して官有鐵道の一大トンネルは正に立石崎の東に平行す山形敢て奇ならざるも漸次陸
地は接近するや敦賀港口の面目活躍し來る快味一層、敦賀港は古への角鹿にして東西
一里廿町南北一里余の間ありて深さ四五尺日本海岸有數の良港灣たるも惜むらく
は冬の強風を避るよ十分ならず町の西北部に常宮澳と名くる一灣あり後は敦賀灣口
の西側たる榮螺が岳及岩倉山の連峯南北の方向より去り風濤の避難十分なり只山腹平地
の少なきは敦賀町南部の大なるに如かず



杉津
停車場

敦賀港口
北方ヨリ望

光方

津杉

石立

(5)

灘の南東端金の崎城趾の麓にあり人口壹万八千西方一帯氣比の松原に接し白沙青松市人遊歩の勝區たり往古渤海使の客館清景樓を此地に設け氣比神宮の大宮司をして之を檢校せしめたる事雜式に見ゆ松林中水戸藩士武田耕雲齋以下同志の墓あり門前に碑あり水戸藩士墳墓の處と刻し土壇を築きて耕雲齋以下廿三人の墓石を置き其左右に同形の墓十五基を建て連ね三百七十三人の姓名を分載せり耕雲齋名は正生伊賀守たり勤王の志深く京師より上らんとして途を北陸道に取るや加賀藩之を拒み同志の士と共に敦賀に幽閉す慶應元年二月幕吏來り耕雲齋以下を斬に處す是れ其遺跡たり金の崎岬角の上は金が崎宮あり金崎停車場の傍より登る此地元弘の役新田義顯の據りたる南朝の古城趾にして本社は尊良恒良の二親王を祭り官幣中社と列す二親王の事跡は國史に明かなれば多くを言はず想ひ起す延元二年の春新田義顯城の支ふ可からざるを知り尊良親王に告別して將に自殺せんとし親王の共死せんと誓ひ給ふや義顯泣いて先づ自から腹かき破り鮮血滴る其刀を御前に進めて伏せし時岬頭海風や如何に悲涼の調を帯ひたりけん國史中の此壯美は將ふ海波の碧藍と共に幾千歳にや傳ふらん敦賀停車場に近く氣比神宮あり官幣大社にして御食津大神、仲哀天皇神功皇后を祭り相殿に日本武尊譽に別尊武内宿禰命淀姫命を配祀す時恰かも婆爾的艦隊來航の時とて名古屋の兵士多數市内に宿營し（此地第九師團第十八旅團に屬する第十九聯隊あり）日本海大勝利の爲め臨時祭を催し境内雜沓兵士の參拜非常の光

景を呈しぬ單調なる日本海岸線に境、宮津、伏木等と共に本港のあるはせめてもの幸
福なり

午後三時敦賀を發し官線北陸線にて大聖寺より向ふ鐵路は舊、木目峠の國道を進み兼原
に至りて更に北方杉津の海岸より出で立石岬を望む杉津の停車場は海上より望めは杉津
村の後部山上高き處よりあり日野川の支流より出づる迄トンネル數個所頗る難所をす北
陸道は京坂方面よりは全く其地域を遮断せられたるもの冬時雪深き時古代交通の有様
を想像せば山陰と同じく大英雄の根據を定むべき地域とあらず越前家と前田家の配置
交通の便否等に思ひ及び、前田の北邊の一雄藩と終らざる可からざる所以を知るも亦
難からず今庄に至れる敦賀よりする木目峠の國道と江州柳が瀬より榎木峠を越ゆる來る
國道との交叉點なり地は全く古生紀の地層にして日野川流域は第三紀層の發達するを
見る鱗波の東甘丁に柚山城趾あり爪生氏の居城跡なり午後四時四十六分武生に達す古
への國府の地舊名を府中と云ふ人口一万六千市中島の子紙（雁皮と楮皮とを原料とす
紙質厚く滑澤なり）の産あり又鍛冶を業とするもの多し敦賀を去十里十一丁なり岡四
時五十六分鯖江着聞部氏五万石の舊城下ふして享保五年以來の管轄地たりし地なり次
で福井に着

福 井 市

維新史に有名なる松平氏の居城地三拾二万石の舊城下なり越前家は中納言秀康の後

なり舊北の庄の地として城趾は市の中央にあり元柴田勝家の據る所とす慶長六年結
城秀康此城を領し福井と改む世襲して維新に至る人口四万四千奉書納（練糸を以て
製したる平織なり羽二重と近し）羽二重（平織の一種にて生絲を以て織り精練したる
もの）絹手巾等の産物あり羽二重絹手巾は外國に輸出し東方の大野と共に絹織物の
産地なり市街の西南より足羽山あり足羽神社あり男大迹皇子即繼体天皇を祭る御父を
彦主人王と稱す御文囊して後當國高向郷に移り仁徳を施して國民を撫育し給へり後
帝位に昇り給ふや人民欣慕の情に堪えず即ち祭りて足羽宮と號す

午後六時四十七分加賀國江沼郡の大聖寺驛に着せり停車場前に憩して更に腕車にて
山代温泉に向ふ九谷燒の原産地を見んが爲なり

大 聖 寺 町

前田氏の支流松平備後守奮拾万石の城下なり前田利家子利長孫利常、利常は松平肥
前守と稱す男三人あり長と光高次は利次（富山拾万石）三子利治飛騨守と号す慶長五
年前田領の分配を受く其昔拜郷、山口の二氏此地に城主たり九谷陶器會社あり大山
の山脈北西を覆ひ大聖寺川町の中央を貫流して西、吉崎に注ぎ商業稍盛なり
時正は黄昏なりしも腕車の便より大聖寺の東南一里十丁なる山代温泉場に遊ぶ途中
附近の婦女子の手拭を手として歸るに逢ふもの多し温泉場の中央に総湯あり二層の巨
屋あり其四隣旅舎約十八戸荒屋倉屋最も名あり余は倉屋に一泊す内湯あり室内頗清潔

待遇懸篤聊か勞を慰するに足る泉質は鹽類泉なり九谷は茲を去る南五里大聖寺川の上流西谷村の大字にして磁石の産地たり昔は此地に陶窯を設けて陶器を製造せしも文化二年以來此山代の地に移し其業を再興せり實に九谷の窯元なるものとす明朝參觀を依頼して寢に就く

六月四日晴、暑氣甚し午前七時出發大藏の窯元を視察す九谷焼は寛永年間加賀の國大聖寺の城主前田利治臣田村權左衛門某に命じて窯を其江治郡九谷村に開かしめて造る所の者なり其陶質瀬戸焼に似たり點茶家の茶壺、水指今尙存す利治の男利明の時より至りて父利治の遺志を繼ぎ萬治年間家臣後藤才治郎某を肥前の有田に遣はし磁器移殖の製法を學ばしめ九谷村に於て再び製陶せしむ時に偶京師有名の畫工久保守景といふ者あり來て加賀に遊べし因て之に畫かしめて製する所の者を守景下畫といふ人々のを珍賞す是に於て其業大に進歩し盛に製出す其質たるや白土に彩釉を施し其製は支那交趾に倣ふ者あり有田に倣ふ者あり而して其錦様と稱する者甚佳なり他國の陶器皆是に及ばず之を通稱して古九谷と云ふ既にして業稍衰ふ文化七年國人吉田屋傳右衛門といふ者あり九谷村に於て更に窯を設けて其業を再興し宮本屋理右衛門と云者をして之を主管せしめ青緑の彩畫を描し又交趾を模造す同十一年傳右衛門窯を同郡山代村に移し九谷の土石を運搬して製す是を吉田屋窯といふ又同國の人陶畫工飯田屋八郎右衛門といふ者あり支那の陶畫譜を求得て發明する所あり乃從前之畫風を一變して赤色繪を製出

す其技絶妙なり稱して八郎畫金欄といふ皆赤釉に金泥を附着す是に由て名聲遠近に鳴る續て大藏清七といふもの其業を勉勵し壽閑と號し其窯を主とる其後淺井幸八なる者飯田屋八郎右衛門の藏せし陶畫譜を傳へ大藏清七と相謀り大に其業を盛にし益其精巧を極め終に海外の人をして賞讃せしむるに至れり今加賀國金澤市江沼能美の二郡にて製出するものを總稱して九谷焼と云へるも其眞の窯元なるものを此大藏とす有田焼より地白く香稍異なり年額總計卅五六万圓あり大藏窯元は所謂上り窯を用ゆ即ち土地の傾斜面に據り燒きたる粘土と生土とを混して作り又は耐火煉瓦にて下より上より築き高さ一間巾二間位にして長凡そ十間に及び其内部は壁を以て數室に仕切り最下室に火(松割木)を燒き熱して焰及熱を漸次上方に至らしむるの裝置なり即ち器物は耐火粘土にて作れる箱即ち轆み入れて燒き又棚に列して燒くなり素燒窯と仕上窯とは別なりとす二三の原料品を購ひ受け直ちに出發動橋に至る此間約一里發車には猶時間あり一茶店に晝食し午前十一時四十八分金澤に向ふて發す小松(加賀絹の産地)美川、松任等を經て金澤に着せしは午後零時五十一分なりき

金澤市

石川郡の東北部に位し北陸道第一の都會なり維新前々田氏百二万二千七百石の舊城下なり人口約九万石川縣廳の所在地たり地勢海面より高きと二百二十尺小坂數ヶ所あり高低一ならず市外の東南より西南に亘りて丘陵相起伏し犀川の水流域中の國境

大門山三方山等より發して市の西南部を貫流し西北金石港に注ぎ淺野川は市の東部を貫流し北して河北瀉に注ぐ舊城及兼六公園は市の中央高臺上ふあり先づ舊城を見て兼六公園に遊ぶ前田百万石の大城流石其偉大なるを認む百間堀を隔て、金澤城の東南に隣り古への山崎山の遺趾即公園地たり東西四町四十間南北四町十八間面積二万三千五百九十八坪綠樹鬱鬱規模宏大景致頗る幽邃なりとす所謂天下三公園の一たり兼六公園の名稱や李格非の洛陽名園記に所謂六を兼ねる者なりとて松平樂翁公の命名する所なりと云文政年中舊藩主前田齊廣樓閣を建て、菟裘の地とし其嗣齊泰更に修築し明治四年より公園となる園中名蹟多し夕顔亭蓮池の邊にあり黃門橋夕顔亭の東北花剛石の一枚石拳螺山黃門橋東小丘霞が池園の中央にあり福壽山霞が池の東明治紀念碑西南役戰没者忠魂を祭るもの勸業博物館館園の東南隅今捕虜收容所成巽閣前田氏別邸紅葉山元の山崎山今攀登を許さず鶴嶋山崎山の西北麓金澤神社公園の南頭菅原道真を祭る金澤靈澤金澤神社の側より湧出する清泉にして金澤の名是より出づと東北郡稍開瀾遙かに河北瀉の碧藍を臨む大体の地盤平坦にして芝生少く池水亦清からず一高所より公園の全景を遠觀するが如き地勢の變化なし散步するまゝに一景は一景と其趣きを異にする可なるも眺望の全きものを貪取する能はざるは彼栗林公園や後樂園に如かざるが如し芝生の清麗や栗林、後樂二園の最もほこるに足るもの清泉の湧くに至つては天下何れの地か肥後熊本の水前寺よ及ぶものぞ只

此園の長所は規模の稍大なるあり、豪壯の趣味多きにあり、余や凡眼其品評や蓋し當らざるものからんと所謂幽邃に於て栗林公園を推し瀟洒に於て後樂園を推し豪壯に於て兼六公園を推さんとす水戸の公園や稍小規模なるも地勢稍變化あり豪壯の分子と幽邃の分子を適宜に加味したる處蓋中庸を得たるものならん然も園内稍寂漠たり栗林公園は濃密なり兼六公園や平板なり何れか多少の遺憾なからんや必竟是人工なる安ぞ欠点なり吾嘗て富士山の絶巔に宿す太平洋の海面宛として明鏡の如く朝曦既上りて五彩燦然金色銀色刻一刻變化する來り名山の絶頂神氣全身を襲ふて朝界未だ睡りの内にありさ自然なるかな自然なるかな天下何人か此景を摸し得んや宰者たるの感ありさ自然なるかな自然なるかな

徘徊多時園の西端より廣坂通りに縣廳裁判所高等學校等を瞥見し上松原町より出で尾山神社に詣す藩祖前田利家の靈を祭る明治六年加越能三國士民の協同して創建する所なり瀟洒にして高潔なるも只其所謂神門と稱する西洋建築風の三層樓門は日本風の神殿より西洋風の樓門を配し其俗氣の紛々たる滑稽淺慮ある兼六公園を持てる金澤市民としては一種の骨董品を陳列したるが如く全然莊嚴の分子を破却し終りたる如し金澤市の美術趣味や正に如斯あるべきや否頗る怪まざる可からざるに似たり行々市中の模様を観察するに建築亦一種の特相を帯び關東地方と同しからず其多くは二階建てにて千篇一律の二階窓の一種異様なるが如き慥か舊文明遺物なりとす余は是を金澤式の建築と

云はんか

金澤地方々言

(父) トート(金澤) マー(石川郡) チャーチャ(金石) オツチャマ(大聖寺)
 (母) カーカ(金澤) ヤーヤ(石川郡) (兄) アニキ(金澤) アンカ(大聖寺) (弟) オチ(金澤)
 (夫) オヤツサン(金澤) マー(石川郡) 妻カ。(金澤) ジャーマ(石川郡) コンノ(金澤) 夫
 ノ妻ヲ呼ブトキト雖ジャテ。(金澤) シンチヨベンコナピント浴湯ダマンガ等の如し

金澤城趾

兼六公園と相隣し市の中央小立野の一端一丘岡上ニ立つ面積凡九万坪餘東北を大手
 口とし西南を搦手とす舊尾山城といひ又御山と書せり文明年中一向宗の僧徒此地に
 起りて土豪富樫氏を滅し本源寺を建立し且つ堡砦を築きて之を守る天正三年織田信
 長之を亡し城を佐久間盛政に賜ひ盛政卒後秀吉前田利家を此地に封す利家七尾城よ
 り徙りて大ニ城を増築し改めて金澤城と稱す今第九師團の司令部たり

此地第六旅團の第七第三十五の兩聯隊あり市街頗る繁盛象眼細工漆器及絹布を産出す
 此地金石港のあるあり海陸の交通比較的に便なるも由來北陸道の海岸は良港乏しく
 就中金石港の如き冬期西北風の衝に當りて波濤を避くるに便ならず金澤市の咽喉とし
 ての一大欠点茲ふあり思ふに今日の大市街地は附近より一大良港のあるか市街夫れ自身
 に港灣を兼備するかにあらざれば大洋時代の風潮に伴ふの繁華を保つ能はず金澤や頗



明治廿八年五月
 五日越中山
 魚津港ヨリ望ム

(51)

204 2



新道

204

明治廿八年
吾越中山
魚津港

山立



204 1

(51)



親不知子不知景

新道

る惜いべき地勢なりとす午後四時十五分發金澤を發し越中國高岡市に至る途上水田の
植付中のものあり既に植付けを終りしものあり越前加賀能登は米の産額比較的多き地
方にして一反歩平均二石以上を得べく越中の平均は稍下りて一石七八斗以上なり平均
額を以てすれば越中信濃等は同一なり越後に至りては更に一等を下ると云ふ河北海
の東津幡驛より東して俱利加羅峠の國道に沿ふて走る壽永二年木曾義仲平維盛を敗り
たる處なり今石動を経て高岡市に達す北陸線と中越鐵道との交叉点に當り米穀の取引
最も盛なり市の東隅に舊城趾あり慶長年間前田利長の築く處なり今は開きて公園とす
乗替の爲待つ事多時伏木港に至りしは午後六時廿二分なりき

伏木港

伏木町は射水川河口の西岸に在る市街にして對岸新港と共一小良灣をなす人口約
七千河口を伏木港とす深さ五尺より二仞魯領沿海州サガレン及朝鮮貿易に對する特
別輸出港なり輸出品は米、食鹽輸入品は鹹魚豆類食鹽等なり西北越登の國境石動山
寶達山等の山脈を負ふて風濤をしのぎ國內第一の良港とす古の國府の地として今大
字古國府に其舊趾を存す

一旅舎に投ず夕食後市中を散歩したるに戰勝祝賀の爲よ年の樂隊群をなして練り歩
き勇ましくも又うれし午後十時寢所に入る

六月五日、雨午前六時伏木港を發し越中南船株式會社の直江津丸(八十一噸餘)にて越

後國直江津より向ふ船進むに従て雨下る益急なり岩瀬滑川を経て漁津に至り少しく晴る遙か南方立山の連嶺白皚々たるを見る形勢雄大海上よりの眺望頗る佳し玉山壁立撫青空、鉄鎖援雲摩日空、晚晴會仙壇畔雪、明吟飛下北溟風（龜田鵬齋）頂上の雪白色は腰邊の深綠色と相映して同時に冬と夏とを競ひ戦はしめ威嚴と愛情との何れか余の擇む處なるかを海上の碧藍色の公平なる比判より待ちのむるに似たり晴れの立山雨の立山何れか初見舞の余を慰めざる、生地、泊り、を経て有名なる親不知子不知の險を過ぐ針の如き雨は細引の如き雨となりて風亦稍ふとく加はり險崖の想を一層に高むる處豪壯の景趣頗る佳斷崖の上一條の新道を通し古への險路（波打際）は只其面影を残すのみ慈母天滙久別離也逢北地近寒時、旁人且說前途惡、瞻落越州親不知（佐田竹水）は今や一條の昔譚に過ぎずなりぬ糸魚川霧の内より顯はれて姫川の流れ、架せる長橋淡墨の文人畫に似たり能生の有名なる斷層燒山附近の火山棄は全く烟霧濛々の内におりて更に指點するの餘地なし午後五時直江津着豪雨如何ともする能はず上陸早々腕車を飛ばして停車場より至り午後六時發の汽車にて長野着對旭館より泊す

六月六日晴、早朝出發日出度我家に歸着せし午後三時頃なりき北陸の雨に引かへて連日の晴天未だ熱せず況んや田植をや早魘の爲め烟の立つ如し巡歴旅程五十有八日天下至る處山や秀麗に水や晶明柳緑りに花紅なる其地其地の人心是を韓山の平坂鉦調ふ比して我神州精氣の英發する所以略は解するを得たり梅風沐雨幸ひ微恙の儲

疾を嘗するなく否な寧ろ強健奮に倍して生氣更に一段を加ふ見來れば鳥兔匆々人事頗る多忙なるも山河舊の如くよして炎熱漸く加はらんとす山川の神靈よ余は恙なく我郷里に歸着せり爾の教訓は深く余の感銘する處なり多謝す茲に擱筆す

30
226

全 明治三十八年十一月廿一日印刷
年 全月 日發行

著 述 者 村 瀨 米 之 助
長野縣小縣郡浦里村

發 行 者 西 澤 喜 太 郎
長野縣長野市

印 刷 者 中 澤 勝 治 郎
長野縣小縣郡上田町

發 行 所 西 澤 書 店
長野縣長野市

印 刷 所 中 澤 活 版 所
長野縣小縣郡上田町

